松浦市文化財調査報告書　第20集

松浦市内遺跡確認調査(5)

土地開発に伴う市内遺跡確認調査報告

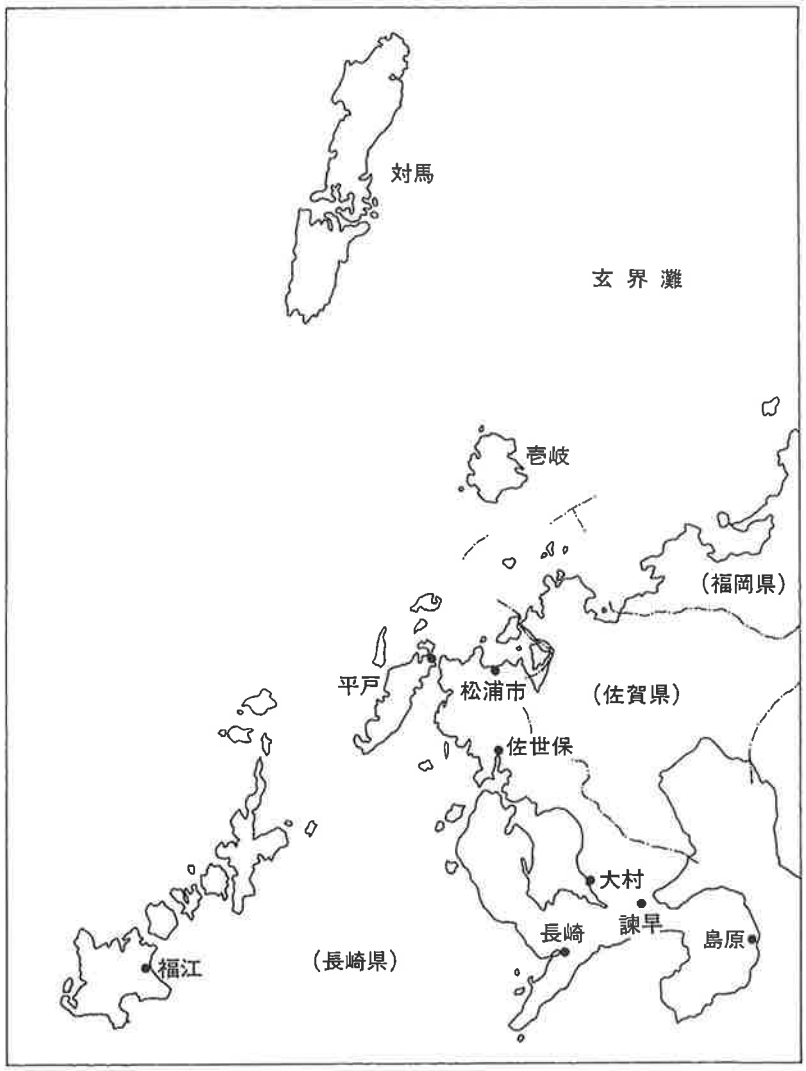
2004

長崎県松浦市教育委員会

松浦市文化財調査報告書　第20集

松浦市内遺跡確認調査(5)

土地開発に伴う市内遺跡確認調査報告



2004

長崎県松浦市教育委員会

発刊にあたって

長崎県松浦市は、県北部の北松浦半島に位置しており、海をはさんで朝鮮半島に近いという地理的な条件を生かして、古くから大陸との交流が盛んでありました。それは旧石器時代にさかのぼり、その後の時代も大陸との関係を抜きにしては語れません。なかでも中国後漢時代の青銅鏡である内行花文鏡を出土した栢ノ木遺跡、中国福建省・折江省及び朝鮮半島産の陶磁器類が多数出土した楼楷田遺跡などはその代表的なものであります。

文化財の保護として重要な課題の一つに埋蔵文化財の保護対策があります。今日の埋蔵文化財保護行政は開発者との調整を行い、重要な文化財を保護していかなければなりません。近年の開発は大規模に水田を埋め立て、山地を削るものが多く、これまで残っていた景観が失われつつあります。この景観のもつ歴史的特性を明らかにしていくことも大きな責務のひとつであります。

本報告書は、平成13年度から15年度にかけて行われた各種開発と埋蔵文化財の保護調整のための確認調査の記録です。開発に伴う市内遺跡確認調査は、地道な作業ではありますが、こうした作業が地域文化の向上に必ず役立つと信じ、今後もより一層努力していきたいと存じます。

最後になりましたが、関係者の方々のご理解とご協力により円滑に調査を進めることができましたことを心から感謝を申し上げ、地域住民の皆様はもとより、広く市民各位の文化財保護行政への理解を深める一助となることを祈念いたしまして発刊のごあいさつといたします。

平成16年３月31日

長崎県松浦市教育委員会

教育長　宮　本　勝　行

例　　言

1．本書は、平成13年度から平成15年度にかけて実施した松浦市内の遺跡確認調査報告書である。なお、調査期間の関係で平成12年度で報告できなかった分も掲載している。

2．調査は、国庫補助及び県費補助を受けて松浦市教育委員会生涯学習課が主体となって実施した。

3．調査にあたっては、長崎県教育委員会学芸文化課、松浦市農林課・建設課・農業委員会をはじめ多くの方々にご理解・ご協力を賜った。

4．調査は、生涯学習課明石拡子・冨永百合子・中田敦之があたった。

5．現場での遺構・土層の写真撮影は、明石があたり、中田が協力した。遺物の写真撮影は、中田があたった。

6．遺物の実測は明石・中田があたり、一部を株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託した。トレースについては明石が行い、吉野貴子の協力を得た。

7．本書における図面・写真については、松浦市生涯学習センター（松浦市志佐町浦免1483番地1）郷土資料室に保管している。

8．遺物については、松浦市教育委員会が保管の任にあたり、報告書の刊行後は、松浦市立調川小学校の郷土資料室にて一部を展示予定である。

9．写真図版の縮尺は、不統一である。

10．本書の執筆・編集は中田があたった。

本 文 目 次

第Ⅰ章　はじめに
1．調査に至る経緯 …… 1
2．調査関係者 …… 6

第Ⅱ章　地理的・歴史的環境
1．地理的環境 …… 7
2．歴史的環境 …… 8

第Ⅲ章　平成12年度栢ノ木遺跡第14次調査について
1．栢ノ木遺跡 …… 11

第Ⅳ章　平成13年度確認調査の概要
1．横久保遺跡 …… 17
2．栢ノ木遺跡 …… 19

第Ⅴ章　平成14年度確認調査の概要
1．辻ノ尾遺跡 …… 29
2．中ノ瀬遺跡 …… 31
3．宮ノ下リ遺跡 …… 37
4．栢ノ木遺跡 …… 39
5．栢ノ木遺跡 …… 40

第Ⅵ章　平成15年度確認調査の概要
1．津崎遺跡 …… 53
2．辻ノ尾遺跡 …… 57
3．田口高野遺跡 …… 59
4．栢ノ木遺跡 …… 60

第Ⅶ章　栢ノ木遺跡について
1．発見に至る経緯 …… 71
2．調査経緯 …… 74
3．甕棺墓・石棺墓について …… 78

第Ⅷ章　まとめ …… 79

挿図目次

第１図　松浦市内遺跡分布図（1/50,000）……3～4
第２図　松浦市地質図　……7
第３図　栢ノ木遺跡位置図（1/10,000）……11
第４図　14次調査区設定図（1/750）……11
第５図　14次調査遺構配置図（1/40）……12
第６図　14次調査遺物分布図（1/40）……13
第７図　14次調査区土層図（1/40）……14
第８図　14次調査出土遺物①（2/3）……15
第９図　14次調査出土遺物②（1/2）……15
第10図　14次調査出土遺物③（1/3）……16
第11図　横久保遺跡位置図（1/10,000）……17
第12図　調査区設定図（1/600）……17
第13図　調査区土層図（1/40）……18
第14図　出土遺物（2/3）……18
第15図　栢ノ木遺跡位置図（1/10,000）……19
第16図　15次調査区設定図（1/900）……19
第17図　15次調査区土層図（1/40）……20
第18図　15次調査遺構配置図①（1/40）……21
第19図　15次調査遺構配置図②（1/40）……21
第20図　15次調査遺構配置図③（1/40）……21
第21図　15次調査遺構実測図（1/40）……22
第22図　15次調査出土遺物①（2/3）……24
第23図　15次調査出土遺物②（1/3）……25
第24図　15次調査出土遺物③（1/3）……26
第25図　15次調査出土遺物④（1/3）……27
第26図　15次調査出土遺物⑤（1/3）……28
第27図　辻ノ尾遺跡位置図（1/10,000）……29
第28図　２次調査区設定図（1/600）……29
第29図　２次調査区土層図（1/40）……30
第30図　２次調査出土遺物（2/3）……30
第31図　中ノ瀬遺跡位置図（1/10,000）……31
第32図　３次調査区設定図①（1/600）……31
第33図　３次調査区設定図②（1/600）……32
第34図　３次調査区設定図③（1/600）……32
第35図　３次調査区土層図①（1/40）……33
第36図　３次調査区土層図②（1/40）……33
第37図　３次調査区土層図③（1/40）……34
第38図　３次調査出土遺物①（1/3）……35
第39図　３次調査出土遺物②（1/3）……36
第40図　３次調査出土遺物③（1/2）……37
第41図　宮ノ下リ遺跡位置図（1/10,000）……37
第42図　６次調査区設定図（1/900）……37
第43図　６次調査区土層図（1/40）……38
第44図　６次調査出土遺物（2/3）……38
第45図　栢ノ木遺跡位置図（1/10,000）……39
第46図　16次調査区設定図（1/900）……39
第47図　16次調査区土層図（1/40）……39
第48図　16次調査出土遺物（1/2）……40
第49図　栢ノ木遺跡位置図（1/10,000）……40
第50図　17次調査区設定図（1/900）……41
第51図　17次調査区土層図①（1/40）……42
第52図　17次調査区土層図②（1/40）……43
第53図　17次調査遺構配置図①（1/40）……44
第54図　17次調査遺構配置図②（1/40）……45
第55図　17次調査４号石棺墓実測図（1/20）……46
第56図　17次調査４号甕棺墓実測図（1/20）……46
第57図　17次調査５号甕棺墓実測図（1/20）……47
第58図　17次調査遺物出土状況図（1/20）……47
第59図　17次調査出土遺物①（2/3）……48
第60図　17次調査出土遺物②（1/3）……49
第61図　17次調査出土遺物③（1/4）……50
第62図　17次調査出土遺物④（1/3）……51
第63図　17次調査出土遺物⑤（1/3）……52
第64図　津崎遺跡位置図（1/10,000）……53

第65図　２次調査区設定図①（1/1,500）……53
第66図　２次調査区設定図②（1/1,500）……54
第67図　２次調査区設定図③（1/1,500）……54
第68図　２次調査区土層図①（1/40）……55
第69図　２次調査区土層図②（1/40）……56
第70図　２次調査出土遺物（2/3）……56
第71図　辻ノ尾遺跡位置図（1/10,000）……57
第72図　３次調査区設定図（1/300）……57
第73図　３次調査区土層図（1/40）……57
第74図　３次調査出土遺物（2/3）……58
第75図　田口高野遺跡位置図（1/10,000）……59
第76図　３次調査区設定図（1/600）……59
第77図　３次調査区土層図（1/40）……59
第78図　３次調査出土遺物（2/3）……60
第79図　栢ノ木遺跡位置図（1/10,000）……60
第80図　18次調査区設定図（1/1,500）……61
第81図　18次調査区土層・遺構図（1/40）……62
第82図　18次調査出土遺物①（2/3）……64
第83図　18次調査出土遺物②（1/3）……65
第84図　18次調査出土遺物③（1/3）……66
第85図　１号甕棺墓実測図……71
第86図　２号・３号甕棺墓実測図……72
第87図　１号石棺墓実測図……72
第88図　２号石棺墓実測図……73
第89図　３号石棺墓実測図……73
第90図　２号石棺墓内出土遺物……74
第91図　栢ノ木遺跡調査地点図（1/5,000）……76
第92図　栢ノ木遺跡遺構配置図（1/450）……77

付図　栢ノ木遺跡17次調査遺構配置図③（1/40）

表　目　次

表１　平成13年度から平成15年度松浦市内埋蔵文化財発掘届および発掘調査一覧表……２
表２　平成13年度から平成15年度確認調査内容一覧表……５
表３　出土石器観察表１……67
表４　出土石器観察表２……68
表５　出土土器観察表１……69
表６　出土土器観察表２……70
表７　栢ノ木遺跡発掘調査一覧表……75

図　版　目　次

図版１　栢ノ木遺跡14次Ｂ３区西土層、栢ノ木遺跡14次Ｃ３区西土層……83
図版２　栢ノ木遺跡14次Ｄ２区西土層、栢ノ木遺跡14次Ｂ２区遺構検出状況……84
図版３　横久保遺跡Ｔ１西土層、横久保遺跡Ｔ２西土層……85

図版４　栢ノ木遺跡15次調査風景、栢ノ木遺跡15次Ｔ１西土層 ……86
図版５　栢ノ木遺跡15次Ｔ２北土層、栢ノ木遺跡15次Ｔ５東土層 ……87
図版６　栢ノ木遺跡15次Ｔ11西土層、栢ノ木遺跡15次Ｔ８土壙検出状況 ……88
図版７　栢ノ木遺跡15次Ｔ８土壙検出状況、栢ノ木遺跡15次Ｔ９土壙検出状況 ……89
図版８　栢ノ木遺跡15次Ｔ９土壙検出状況、栢ノ木遺跡15次Ｔ10土壙検出状況 ……90
図版９　辻ノ尾遺跡２次Ｔ４北土層、中ノ瀬遺跡３次Ｔ１北土層 ……91
図版10　中ノ瀬遺跡３次Ｔ４北土層、中ノ瀬遺跡３次Ｔ７北土層 ……92
図版11　宮ノ下リ遺跡６次Ｔ１北土層、宮ノ下リ遺跡６次Ｔ３北土層 ……93
図版12　栢ノ木遺跡16次Ｔ１北土層、栢ノ木遺跡16次Ｔ２北土層 ……94
図版13　栢ノ木遺跡17次Ｔ１東土層、栢ノ木遺跡17次Ｔ２東土層 ……95
図版14　栢ノ木遺跡17次Ｔ８東土層、栢ノ木遺跡17次Ｔ３遺構検出状況 ……96
図版15　栢ノ木遺跡17次４号石棺墓検出状況、栢ノ木遺跡17次５号石棺墓検出状況 ……97
図版16　栢ノ木遺跡17次４号甕棺墓検出状況、栢ノ木遺跡17次４号甕棺墓土壙検出状況 ……98
図版17　栢ノ木遺跡17次５号甕棺墓検出状況、栢ノ木遺跡17次５号甕棺墓土壙検出状況 ……99
図版18　栢ノ木遺跡17次４号甕棺墓･６号石棺墓検出状況、栢ノ木遺跡17次Ｔ８遺構検出状況 …100
図版19　津崎遺跡２次Ｔ３西土層、津崎遺跡２次Ｔ６北土層 ……101
図版20　辻ノ尾遺跡３次Ｔ１北土層、田口高野遺跡３次Ｔ２北土層 ……102
図版21　栢ノ木遺跡18次Ｔ２西土層、栢ノ木遺跡18次Ｔ７東土層 ……103
図版22　栢ノ木遺跡18次Ｔ９西土層、栢ノ木遺跡18次Ｔ７配石遺構検出状況 ……104
図版23　出土遺物①、出土遺物② ……105
図版24　出土遺物③ ……106
図版25　出土遺物④ ……107
図版26　出土遺物⑤ ……108
図版27　出土遺物⑥ ……109
図版28　出土遺物⑦ ……110
図版29　出土遺物⑧ ……111
図版30　出土遺物⑨ ……112
図版31　出土遺物⑩ ……113
図版32　出土遺物⑪ ……114
図版33　出土遺物⑫、出土遺物⑬ ……115
図版34　出土遺物⑭ ……116
図版35　出土遺物⑮ ……117
図版36　出土遺物⑯ ……118

第Ⅰ章　は　じ　め　に

１．調査に至る経緯

松浦市における埋蔵文化財保護行政は、昭和50年以来、長崎県教育委員会の指導により現場立会、確認調査など積極的に対応してきている。その結果、市内における開発行為に際しては、事前に文化財保護の協議を行うことが徐々に定着してきている。ここ最近は国営農地再編整備事業・県営圃場整備事業である大型の農業基盤整備事業が減少傾向にあるが、一方で小規模の個人による圃場整備や受益者などによる農道整備、用排水設備事業などの土地改良事業に伴う協議が増えてきている現状である。また、道路造成事業は逆に増加しつつある。この要因としては個人住宅の普及、宅地の造成が郊外へと広がる傾向にあることなどがあげられるのではなかろうか。

そんな中で、松浦市教育委員会では、平成７年度から松浦市内での各種開発事業に伴う確認調査を実施している。調査は国庫・県費補助事業として３ヵ年計画で実施し、事業の最終年度にあたる３年目に確認調査などの成果として報告書の刊行を行っている。本書は平成13年度から15年度にかけて実施した市内遺跡の確認調査の報告書である。

平成13年度に実施した発掘調査は３件である。このうち国庫・県費補助事業（以下「補助事業」という。）関係で実施した確認調査の件数は個人の圃場整備事業に伴う横久保遺跡と範囲確認調査を行った第15次調査になる栢ノ木遺跡の２件であった。残りの１件は市単独事業として試掘調査を行っている。この調査は元寇に関する防塁ではないかと考えられている石塁の確認調査とその後背地を調査対象としている。調査の結果、弥生土器・焼土などの包含層を検出したため、後に逃ノ浦遺跡として周知することとなった。現在整理中である。

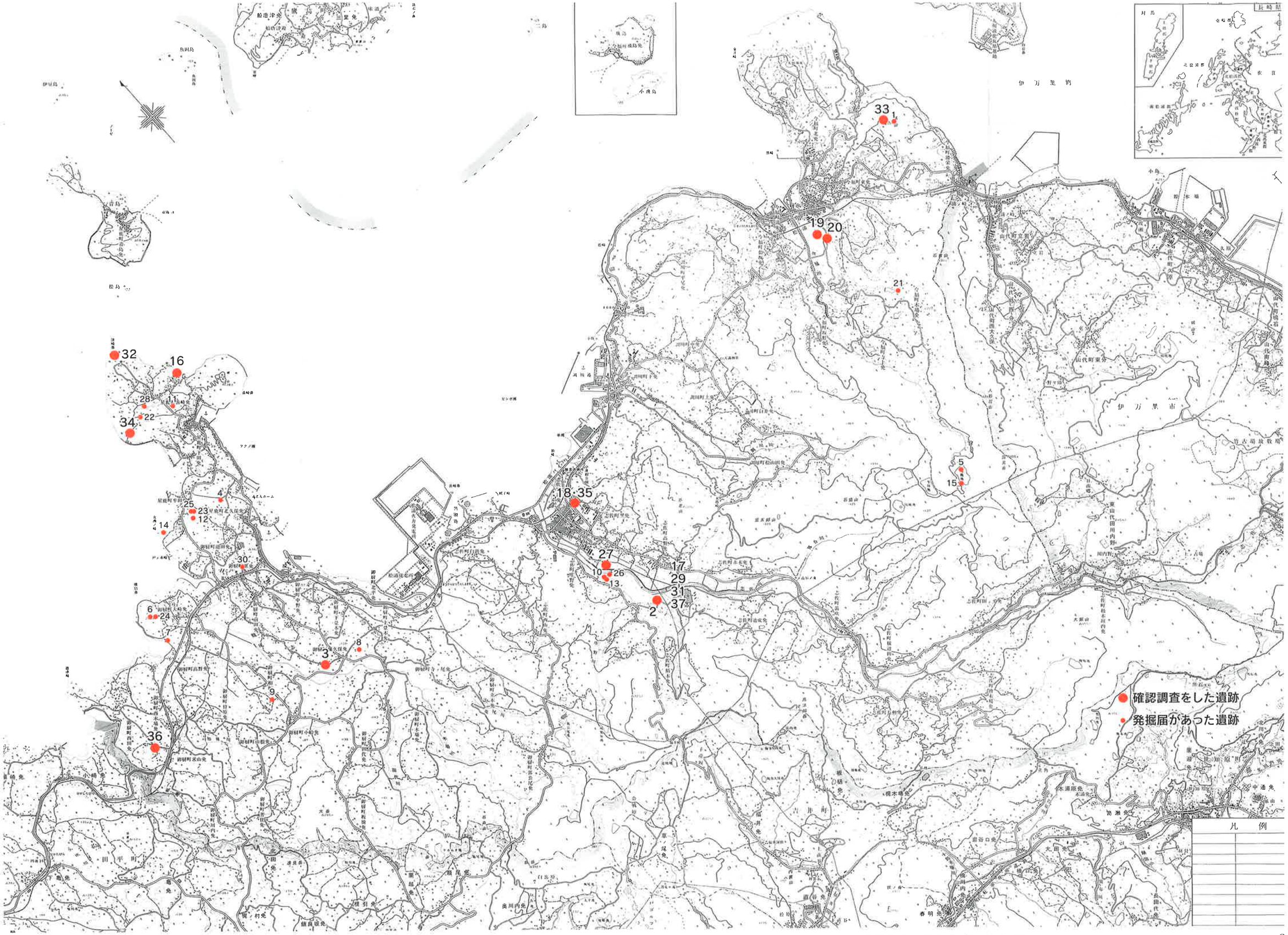
平成14年度に実施した発掘調査は６件で、このうち補助事業関係では土地区画整理事業に伴う辻ノ尾遺跡、圃場整備事業に伴う３地点の中ノ瀬遺跡、同じく個人による圃場整備事業に伴う宮ノ下リ遺跡、個人による圃場整備事業と範囲確認調査を行った栢ノ木遺跡の４遺跡の調査を実施している。なお、残りの１件は市単独事業として試掘調査を行っている。前年に引き続き逃ノ浦遺跡より北側に位置する元寇に関する防塁ではないかと考えられている石塁の調査とその後背地を調査対象として実施している。調査の結果、ナイフ形石器や黒曜石製石鏃などが出土したため、調査後に津崎鼻Ａ遺跡として周知することとなったが、逃ノ浦の石塁及び津崎鼻の石塁に関しては時期を決定する関連遺物の出土がなかったことを報告するにとどめておく。現在整理中である。

平成15年度に実施した発掘調査は５件で、このうち補助事業関係では中山間総合整備事業に伴う津崎遺跡、土地区画整理事業に伴う辻ノ尾遺跡・個人の住宅建築に伴う田口高野遺跡、範囲確認調査を行った栢ノ木遺跡の４件の調査を実施している。１件は市単独事業で松浦党梶谷城跡に隣接する箇所にトイレの建設計画があり予定地の試掘調査を行っているが遺物・遺構などの検出はできなかった。

以上の確認調査は必要最小限にとどめ、調査の主旨にそって遺跡の状況把握に努めているが、ほとんどの調査では良好な包含層の発見には至らず、調査終了後に工事に着手している現状である。

表１　平成13年度から平成15年度松浦市内埋蔵文化財発掘届および発掘調査一覧表

番号	年度	遺　跡　名	調査次数	届　　出　　地	事業内容	事 業 主	調査費用	調査方法
1	13	松浦党梶谷城跡		今福町東免城山2288	放送設備	日本放送協会		
2	13	栢ノ木遺跡		志佐町栢木免小久保	農道整備	個　　人		
3	13	横久保遺跡	1	御厨町横久保免大久保299･300-1	圃場整備	個　　人	国庫補助	確認調査
4	13	北久保Ａ遺跡		星鹿町北久保免勢ノ巣	用 排 水	受　益　者		
5	13	篭籠池遺跡		今福町木場免篭籠	農道整備	受　益　者		
6	13	蕨川遺跡		御厨町大崎免フウチン	農道整備	受　益　者		
7	13	小嶋古墳群		御厨町大崎免小嶋	農道整備	受　益　者		
8	13	寺ノ尾Ｃ遺跡		御厨町横久保免天久保	農道整備	受　益　者		
9	13	城ノ越城跡		御厨町小船免大久保	用 排 水	受　益　者		
10	13	庄野の六地蔵塔		志佐町庄野免島ノ田733	圃場整備	個　　人		
11	13	大石Ｃ遺跡		星鹿町岳崎免丸久保	農道整備	受　益　者		
12	13	牟田Ａ遺跡		星鹿町牟田免細	用 排 水	受　益　者		
13	13	庄野の六地蔵塔		志佐町庄野免島ノ田	用 排 水	受　益　者		
14	13	佐世保崎遺跡		星鹿町牟田免佐世保崎	用 排 水	受　益　者		
15	13	篭籠池遺跡		今福町木場免篭籠	用 排 水	受　益　者		
16	13	逃ノ浦遺跡	1	星鹿町岳崎免久保田1584	試掘調査	松　浦　市	市　　費	試掘調査
17	13	栢ノ木遺跡	15	志佐町栢木免小久保	範囲確認	松　浦　市	国庫補助	確認調査
18	14	辻ノ尾遺跡	2	志佐町浦免辻ノ尾767ほか３筆	区画整理	松　浦　市	国庫補助	確認調査
19	14	中ノ瀬遺跡	3	今福町東免野々田82-1ほか11筆	圃場整備	受　益　者	国庫補助	確認調査
20	14	中ノ瀬遺跡	3	今福町浦免田川原168-1ほか８筆	圃場整備	受　益　者	国庫補助	確認調査
21	14	長尾池遺跡		今福町木場免長尾	農道整備	受　益　者		
22	14	大石Ａ遺跡		星鹿町岳崎免追出	農道整備	受　益　者		
23	14	牟田Ｃ遺跡		星鹿町牟田免池上63-1ほか５筆	用 排 水	受　益　者		
24	14	蕨川遺跡		御厨町大崎免中ノ辻	用 排 水	受　益　者		
25	14	牟田Ｃ遺跡		星鹿町牟田免牟田	暗渠排水	受　益　者		
26	14	庄野の六地蔵塔		志佐町庄野免島ノ田737･738	圃場整備	受　益　者		
27	14	宮ノ下リ遺跡	6	志佐町里免森野川94	圃場整備	個　　人	国庫補助	確認調査
28	14	大石Ａ遺跡		星鹿町岳崎免大牟田	農道整備	受　益　者		
29	14	栢ノ木遺跡	16	志佐町栢木免佐々山99ほか３筆	圃場整備	個　　人	国庫補助	確認調査
30	14	坂本遺跡		御厨町里免坂本316-5	個人住宅	個　　人		
31	14	栢ノ木遺跡	17	志佐町栢木免小久保	範囲確認	松　浦　市	国庫補助	確認調査
32	14	津崎鼻Ａ遺跡	1	星鹿町岳崎免鳥瀬884ほか２筆	試掘調査	松　浦　市	市　　費	試掘調査
33	15	松浦党梶谷城跡	5	今福町東免城山2300-3	試掘調査	松　浦　市	市　　費	試掘調査
34	15	津崎遺跡	2	星鹿町岳崎免上血田328ほか５筆	農道整備	長　崎　県	国庫補助	確認調査
35	15	辻ノ尾遺跡	3	志佐町浦免辻ノ尾772ほか２筆	区画整理	松　浦　市	国庫補助	確認調査
36	15	田口高野遺跡	3	御厨町西木場免二ノ川379-2	個人住宅	個　　人	国庫補助	確認調査
37	15	栢ノ木遺跡	18	志佐町栢木免小久保	範囲確認	松　浦　市	国庫補助	確認調査



第１図　松浦市内遺跡分布図（1/50,000）

表２　平成13年度から平成15年度確認調査内容一覧表

番号	年度	遺 跡 名	調査面積	調 査 区（m）	遺構の有無	主 な 出 土 遺 物
3	13	横久保遺跡	8㎡	２×２を２ヵ所	無	石鏃、黒曜石製剥片等
17	13	栢ノ木遺跡	110㎡	２×５を11ヵ所	土壙・柱穴	弥生土器、石庖丁、石斧等
18	14	辻ノ尾遺跡	16㎡	２×２を４ヵ所	不明土壙	石鏃、黒曜石製剥片等
19	14	中ノ瀬遺跡	24㎡	２×２を４ヵ所 ２×４を１ヵ所	無	弥生土器、青磁、石錘、黒曜石製・安山岩製剥片等
20	14	中ノ瀬遺跡	16㎡	２×２を４ヵ所	無	黒曜石製剥片・砕片等
27	14	宮ノ下リ遺跡	12㎡	２×２を３ヵ所	無	黒曜石製・安山岩製剥片等
29	14	栢ノ木遺跡	8㎡	２×２を２ヵ所	無	削器、黒曜石製剥片等
31	14	栢ノ木遺跡	104㎡	２×５を10ヵ所 ２×２を１ヵ所	石棺墓・柱穴 甕棺墓・土壙	石鏃、石斧、スクレイパー、弥生土器、青磁、白磁等
34	15	津崎遺跡	36㎡	２×２を７ヵ所 ２×４を１ヵ所	無	ナイフ形石器、石核、黒曜石製剥片、須恵器等
35	15	辻ノ尾遺跡	16㎡	２×２を３ヵ所 ２×４を１ヵ所	不明土壙	石鏃、彫器、黒曜石製剥片、近代陶磁器等
36	15	田口高野遺跡	8㎡	２×２を２ヵ所	無	石鏃、黒曜石製剥片等
37	15	栢ノ木遺跡	96㎡	２×４を12ヵ所	柱穴･配石遺構	石鏃、弥生土器、須恵器等

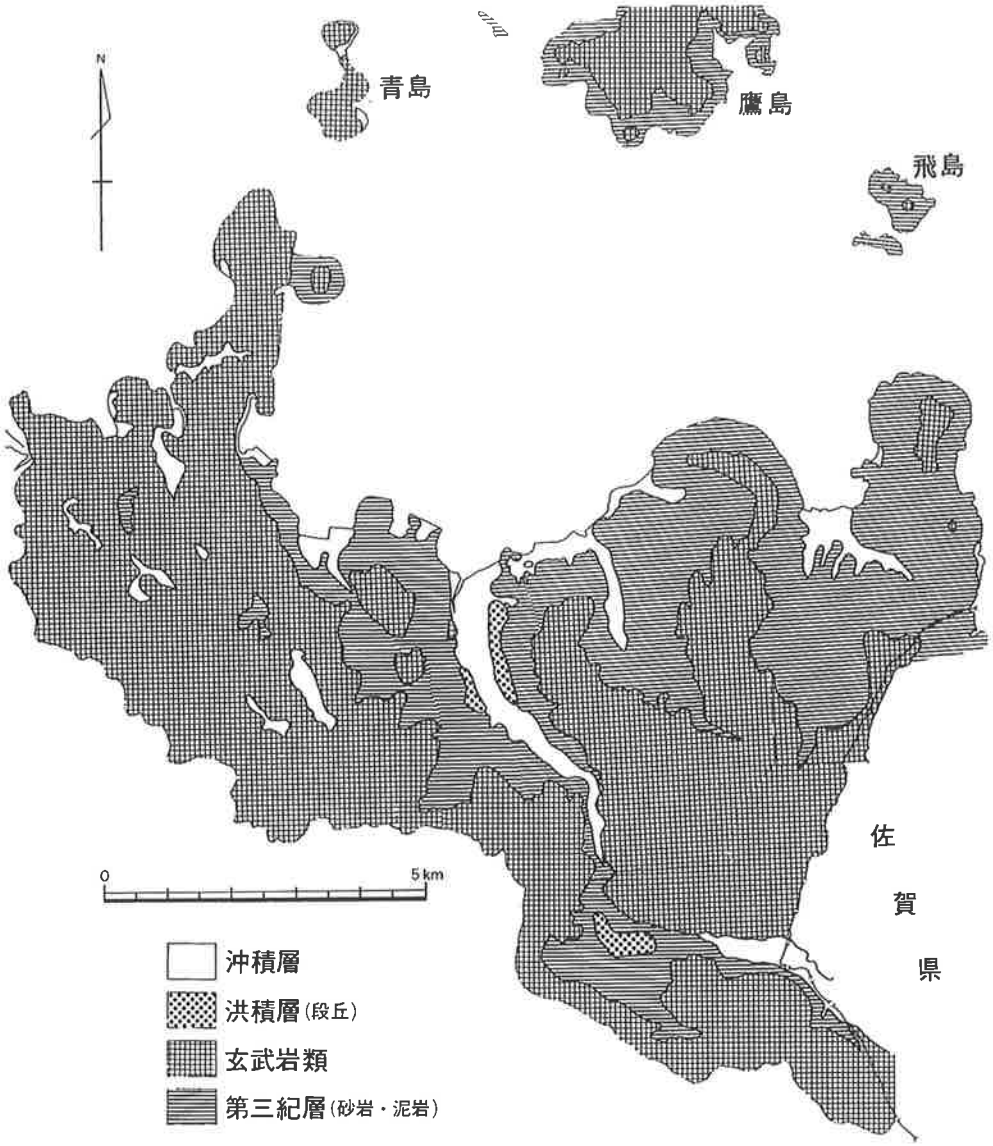
2．調査関係者　　（敬称略）

調査主体	松浦市教育委員会
総　　括	黒川　壽信　教育長（平成16年１月20日まで）
	宮本　勝行　教育長（平成16年１月21日から）
事務局	松浦市教育委員会　生涯学習課
業務総括	末竹　信彦　生涯学習課長（平成14年３月まで）
	和田　光正　生涯学習課長（平成14年４月から）
	和田　光正　生涯学習課次長兼管理業務係長（平成14年３月まで）
	松瀬　美治　生涯学習課次長兼管理業務係長（平成14年４月から）
調査担当	中田　敦之　生涯学習課生涯学習推進係長兼社会教育主事
	明石　拡子　生涯学習課生涯学習推進係主事
	冨永百合子　生涯学習課生涯学習推進係臨時職員（平成14年３月まで）
整理担当	中田　敦之
	明石　拡子
整理補助	吉野　貴子
調査作業員	里森知恵子・松田マサヨ・冨野トシエ・松永セツエ・天久保正子・黒田ヒサエ・吉田未千子・坂本クニ子・松永ヒデミ・中島カズ子・松永チエ子・崎田　政子・末永　民子・森　　淑子・渡口　米子・渡口　洋子・横山　清子・前田　數子・辻　　礼子・田中　節子・田中　　稔・山本　初幸・中倉　　勇・前田　義孝
調査協力者	田中　　清・松永　龍興・末永登志男・末永　　守・末永　　勉・渡口　愛子・久保川　清・久保川　覚・市山　　留・川本千代子・久保川則雄・山口ヤエ子・山口登茂之・山口　栄二・清水　義雄・久保川隆司
	長崎県立松浦高等学校
	長崎県県北振興局

第II章　地理的・歴史的環境

1．地理的環境（第２図）

長崎県本土の北端に位置する松浦市は、北松浦半島の北端部とその沖に浮かぶ青島・飛島などのいくつかの島々から構成されている。松浦市の北には伊万里湾と元寇の島で有名な北松浦郡鷹島町が位置しており、鷹島海底遺跡からは炸裂玉のてつはう、木製イカリが碇石を装備した状況で確認されるなど水中考古学の最先端基地となっている。西の北松浦郡田平町には西の登呂遺跡といわれ多くの木製品が出土した里田原遺跡がある。弥生中期初頭の甕棺墓からは県内では珍しい多紐細文鏡が出土している。南の北松浦郡吉井町には縄文草創期の隆起線文土器が出土した福井洞窟がある。福井洞窟の第15層出土の遺物の再評価も行われている。東は佐賀県伊万里市と接しており、有田焼の積出港で有



第２図　松浦市地質図

名である。このように松浦市の近郊は日本の歴史上においても重要な地域であり、中国大陸・朝鮮半島とも近いという地理条件からも旧石器時代から交易の拠点として栄えてきた地域である。

松浦市の地質は、第三紀層を基盤として、その上に玄武岩が広く堆積している地質構造を呈している。この玄武岩は、北松浦半島を中心に西北九州に広く分布する松浦玄武岩と称されるもので、典型的な溶岩台地を形成している。かつては、伊万里市南方を中心として噴出した火山であったと思われている。したがって、佐賀県境を占拠する標高777ｍの国見山を主峰とし、北および西に高度を減じている。この台地が形成されたのは800万年以前の新第三紀の火山活動で、粘性の低い溶岩が盾状に広がった結果によるものである。

松浦市の地勢は、南高北低をなし、市内を流れる河川もすべて北流している。市の南側には400ｍから500ｍ級の高位台地があり、悪太郎川以西では100ｍ以下の低位台地が広がっている。市北西部の星鹿半島の先端の津崎鼻や西田地区の波津崎には、長い年月の風化作用より海岸線を急峻に切り立たせた玄武岩の柱状節理の海食崖が発達している。この玄武岩が基盤になっているが、長い年月の侵食による地形の変化が著しく、現在の山頂部や山裾に溶岩流の一端を見ることができる。この玄武岩は節理の間に滞水しやすく、地辷り災害の原因にもなっているが、一面では湧水が豊富で溜池に利用されているところも多い。湧水のあるところは、古くより人と動物の暮らしに大きく係ってきており、遺跡の分布が認められる。

２．歴史的環境

松浦市では、人類の出現を物語る痕跡は早くから認められ、後期旧石器時代の遺物散布地は約40ヵ所にも及んでいる。その遺物もナイフ形石器・三稜尖頭器・剥片尖頭器・彫器・掻器・削器など多種多様で、西北九州特有の台形石器もこれに加わる。このような背景には、星鹿半島をはじめ牟田の台地に算出する黒曜石および佐賀県伊万里市腰岳の山麓に算出する黒曜石を容易に入手できる地理的要因があったためである。

松浦市内の遺跡としては、圧倒的に旧石器時代・縄文時代の遺跡が多いのが特色でもある。特に市北西部の伊万里湾に突出した星鹿半島の周辺は市内でも特に遺跡の多い地域として注目されている。現在までのところ、後期旧石器時代の所産であるナイフ形石器や台形石器の資料が牟田Ａ・Ｂ・Ｃ遺跡、中ノ崎・長蔵坊・田口高野・田川・楼楷田・宮ノ下リ遺跡などで確認されている。さらに、平成２年度の竜尾川地区県営圃場整備事業に伴う寺ノ尾Ｃ遺跡の確認調査ではナイフ形石器・台形石器の良好な包含層が検出されている。このように星鹿半島一帯は、原始生活に必要な道具生産の主たる石材である黒曜石の原産地である。これまで多くの原石が採集されているが確認調査では良好な包含層の発見までには至っていない。平成12年度に実施した国営農地再編整備事業に伴う発掘調査では姶良Ｔｎ火山灰と鬼界アカホヤ火山灰の降灰層準が確認されている。台形石器を主体とする石器群と姶良Ｔｎ火山灰の関連で重要な遺跡として周知されている。

縄文時代では、姫神社遺跡・小嶋遺跡など良好な遺跡も知られている。姫神社遺跡は、昭和41年に

アメリカのウィスコンシン大学アルバート・モアと日本人学者（内藤芳篤、吉崎昌一ら）による合同調査が行われており、その一部が英文で報告されている。この論文については福岡県教育委員会の水ノ江和同氏によって翻訳されている。同論文では縄文前期の轟式土器、曽畑式土器を中心に、中期の阿高式土器、石器では石鏃・石錐・石槍・石斧・石匙などが報告されている。また、この姫神社遺跡からは萩原博文・久原巻二氏によって縄文後期の土器片と共に石鋸・サイドブレイドが採集されている。小嶋遺跡は、昭和61年度に簡易水道敷設工事に伴う緊急調査で発見した遺跡で、縄文前期の曽畑式土器、中期の阿高式土器を中心に春日式土器などもある。石器では黒曜石製石鏃・剥片鏃、石銛・滑石製装飾品・石斧などが出土している。平成６・７年度には竜尾川地区県営圃場整備事業に伴い実施した田川遺跡の本調査では、縄文中期終末から後期初頭頃の坂の下式系土器とともに多数の剥片鏃・つまみ形石器・石錐・石鋸・サイドブレイドなどが出土している。平成12年度の国営農地再編整備事業に伴う下谷遺跡の本調査ではドングリ貯蔵穴19基を検出している。貯蔵穴にはイチイガシなどの堅果類が多く外皮完存のままで出土しており、湧水を利用した貯蔵穴群である。土器では後期の坂の下式土器を主体とする一群、北久根山式土器を主体とする一群、三万田式土器を主体とする一群があることから縄文時代後期前葉から後葉に営まれた遺跡である。平成８年度に実施した国営農地再編整備事業に伴う今福遺跡の本調査では、晩期の深鉢で口縁部にリボン状の突起を伴う黒川式土器が検出されている。また、松浦市では初めての網目状を呈した組織痕土器も出土している。

弥生時代では、大正14年に発見され、現在は長崎県の重要遺跡として周知されている池田遺跡がある。この遺跡は、昭和63年から平成元年度にかけて４次にわたる確認調査が行われている。その結果、縄文晩期から弥生前期にかけての良好な包含層が検出されており、柱穴・箱式石棺墓・甕棺墓・土壙などの遺構と西平式土器・刻目突帯文土器・板付Ⅱ式土器・骨製ヤス・貝輪などの遺物が出土している。その他では、昭和45年秋に水田畦畔工事に際して甕棺墓２基が発見された志佐町の栢ノ木遺跡がある。昭和46年３月の本調査の結果、石棺墓３基と新たに甕棺墓１基が検出されている。甕は成人用で器形から前期後半の年代が与えられる資料である。２号石棺墓内の枕石上には中国後漢時代の青銅製の内行花文鏡片が副葬されており、首長層の誕生が考えられている。

古墳時代では、昭和62年度に確認調査を実施した小嶋古墳群がある。３基を確認し、そのうちの１号墳を調査した。石室はすべて天井部を失って露出しており、方形の玄室プランに羨道を付した横穴式石室であった。玄室内より銀環・碧玉製勾玉・ガラス製丸玉などが多数出土しており、盛土は流失して失われているが直径約10m程度の円墳であったと思われる。７世紀代に比定できる資料である。被葬者は海上交易に関係したと思われる首長的な立場の人物であっただろうと思われる。前記の栢ノ木遺跡の対岸には昭和60年度から志佐川地区県営圃場整備事業に伴って確認および本調査を実施した宮ノ下リ遺跡がある。箱式石棺墓１基・竪穴式住居跡２棟・溝状遺構が検出されている。竪穴住居跡は４世紀後半から５世紀代の遺構である。遺物では４世紀中頃の布留式古段階の土師器甕から５世紀代にかけての甕・坏・高坏などが出土している。この頃には畿内からの影響を知ることができる。

古墳時代以降では、「宇野御厨」の痕跡であろう。宇野御厨荘、単に御厨荘ともいわれている。律

令制下では天皇や神に貢納する魚貝・果物を贄と称しており、のちに宇野御厨が置かれた松浦・五島の地域でも、大宰府を通じて贄が貢上されていたことが『延喜式』や贄木簡などによって知られる。宇野御厨が初めて文書に現われるのは『東南院文書』で、寛治３年（1089）８月17日の筑前国観世音寺三綱解案に「宇野御厨別当下文」とあるものである。つぎに宇野御厨の名が見えるのは、『石志文書』の、康和４年（1101）８月29日の肥前国宇野御厨検校源久譲状案である。この文書は偽文書の疑いが指摘されている史料でもある。この史料には「宇野御厨野検校散位」（源久）という松浦党の祖といわれている人物の名が見える。この源久は延久元年（1069）現在の松浦市今福町に下向し、土着したといわれている人物で、以後の松浦党の諸氏は源久を祖として仰いでいる。松浦党は宇野御厨および御厨荘一帯に土着した源性一字名の集団を中心に、当初はその姻族が加わった武士団であったと思われ、西北九州で絶大なる影響力を持つようになる。松浦党は、玄界灘を熟知した航海術で盛んに公益活動を行い、大陸まででかけていって交易するようになっている。

【参考文献・引用文献】

ALBERT MOHR and MASAKAZU YOSHIZAKI 1973「Cultural Sequence in Western Kyushu」『Asian Perspectives』 XⅥ（2） 1973

萩原博文・久原巻二　1975　「九州西北部の石鋸、サイド・ブレイドについて」『古代文化』27－４

下川　達彌　1984　「長崎県松浦市域における旧石器時代遺跡」『長崎県北松浦地方の文化』長崎県立美術博物館

角川日本地名辞典編纂委員会　1987　『角川日本地名辞典』－42長崎県－　角川書店

中田　敦之　1988　『小嶋古墳群』　松浦市文化財調査報告書第４集　松浦市教育委員会

中田　敦之　1989　『宮ノ下り遺跡』　松浦市文化財調査報告書第５集　松浦市教育委員会

外山　幹夫　1990　『松浦党のすがた』　松浦市

水ノ江和同　1990　「西九州における文化の変遷」　『古文化談叢』22

中田　敦之　1990　『池田遺跡』　松浦市文化財調査報告書第６集　松浦市教育委員会

中田　敦之・高原愛編　1997　『田川遺跡』　松浦市文化財調査報告書第12集　松浦市教育委員会

正林　　護　1997　「栢ノ木遺跡」『原始・古代の長崎県　資料編Ⅱ』　長崎県教育委員会

中田　敦之・明石拡子編　1998　『松浦・今福遺跡』　松浦市文化財調査報告書第14集　松浦市教育委員会

中田　敦之・明石拡子編　2001　『田口高野遺跡』　松浦市文化財調査報告書第17集　松浦市教育委員会

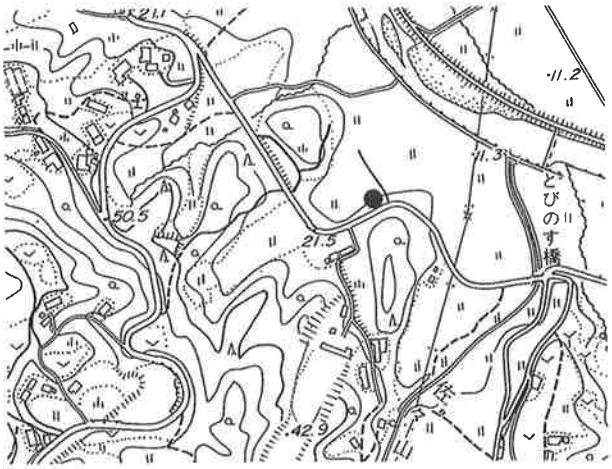
中田　敦之・明石拡子編　2002　『下谷遺跡』　松浦市文化財調査報告書第18集　松浦市教育委員会

第Ⅲ章　平成12年度栢ノ木遺跡第14次調査について

ここでは、平成12年度に国庫補助を受けて実施したが整理期間の関係で遺物などの報告ができなかった第14次調査について報告してその責務を果たしたいと思う。

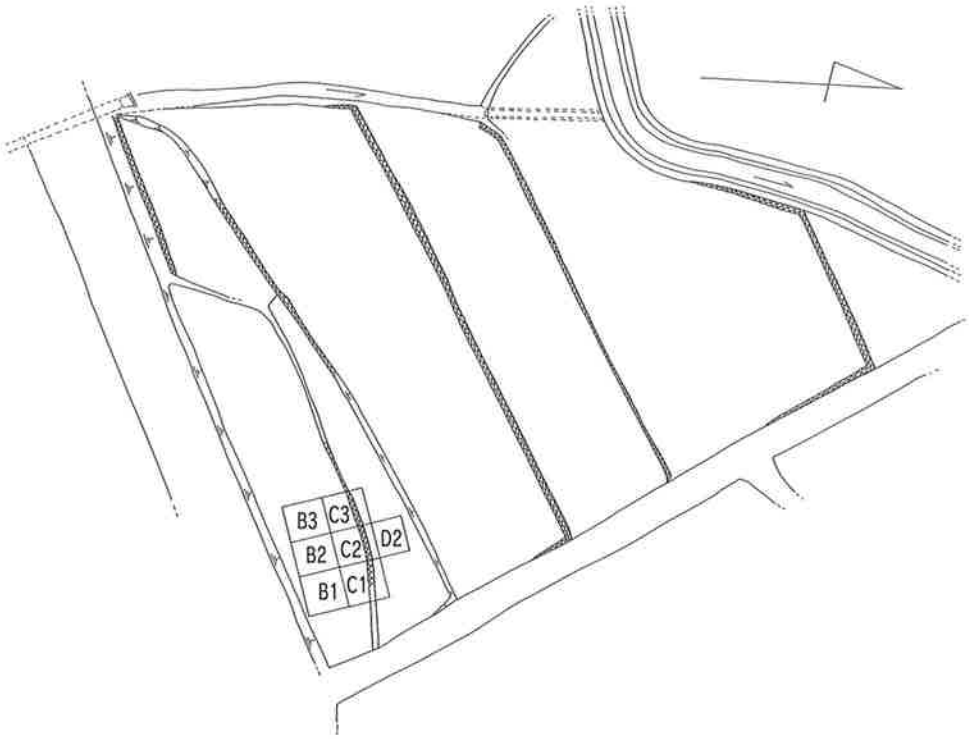
1．栢ノ木遺跡（第３図～第10図）

立地　栢ノ木遺跡は市の中心部で、志佐川下流域の左岸と志佐川の支流である佐々山川の流域の水田地帯に位置している。遺跡は東西約600ｍ、南北約900ｍの広範囲に分布している。志佐川の対岸の沖積平野および河岸段丘上には宮ノ下リ遺跡・久保園遺跡・陣ノ内城跡が立地している。



第３図　栢ノ木遺跡位置図（1/10,000）

栢ノ木遺跡は志佐川に隣接しており、水田耕作に適した地理条件に恵まれている所である。これまで14回にわたる調査が行われているが遺跡の中心は、昭和46年に最初の調査が行われた地点周辺と思われる。箱式石棺墓３基、甕棺墓３基が検出されている。特に２号石棺内からは中国製の青銅鏡（内行花文鏡）が出土しており、首長クラスの存在がうかがえる遺跡として重要性が指摘され

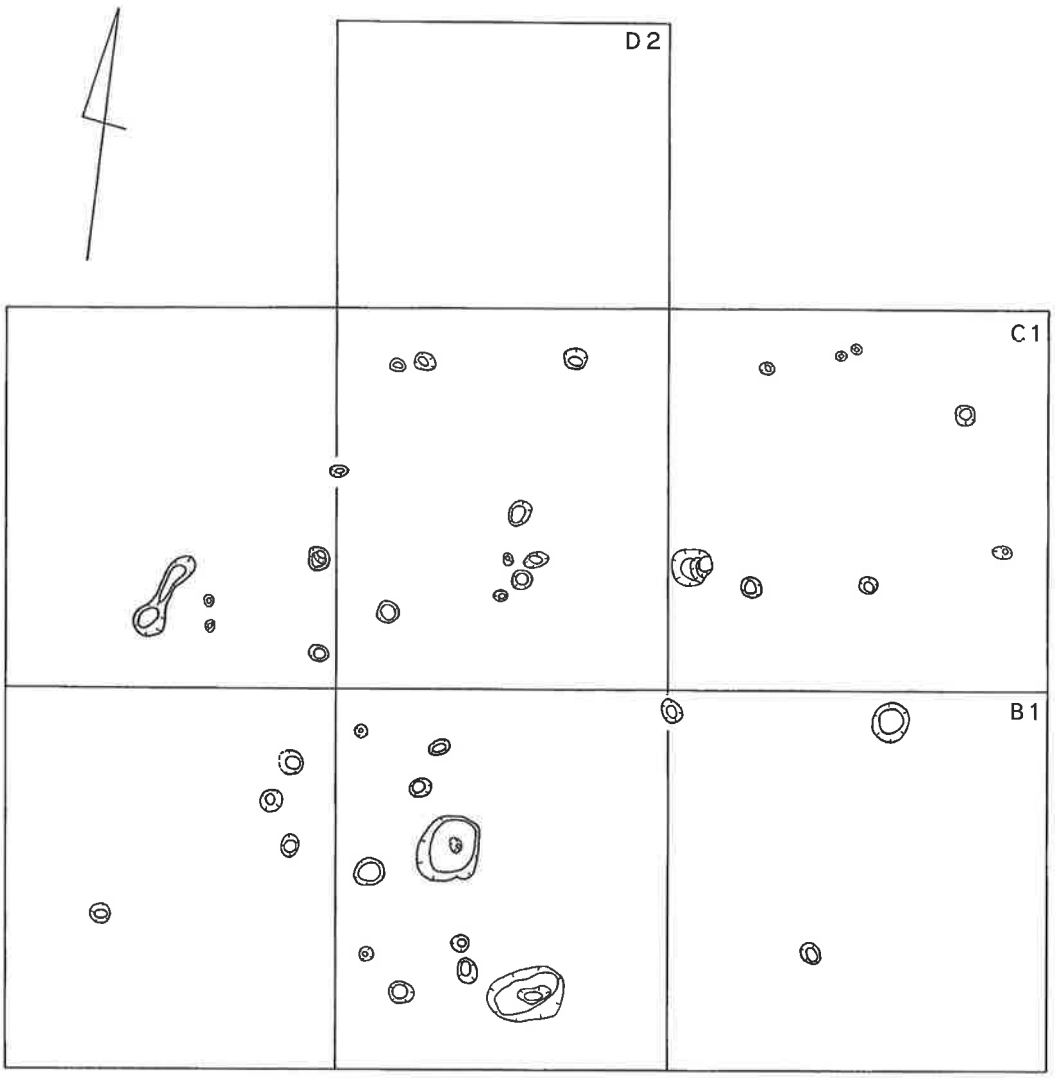


第４図　14次調査区設定図（1/750）

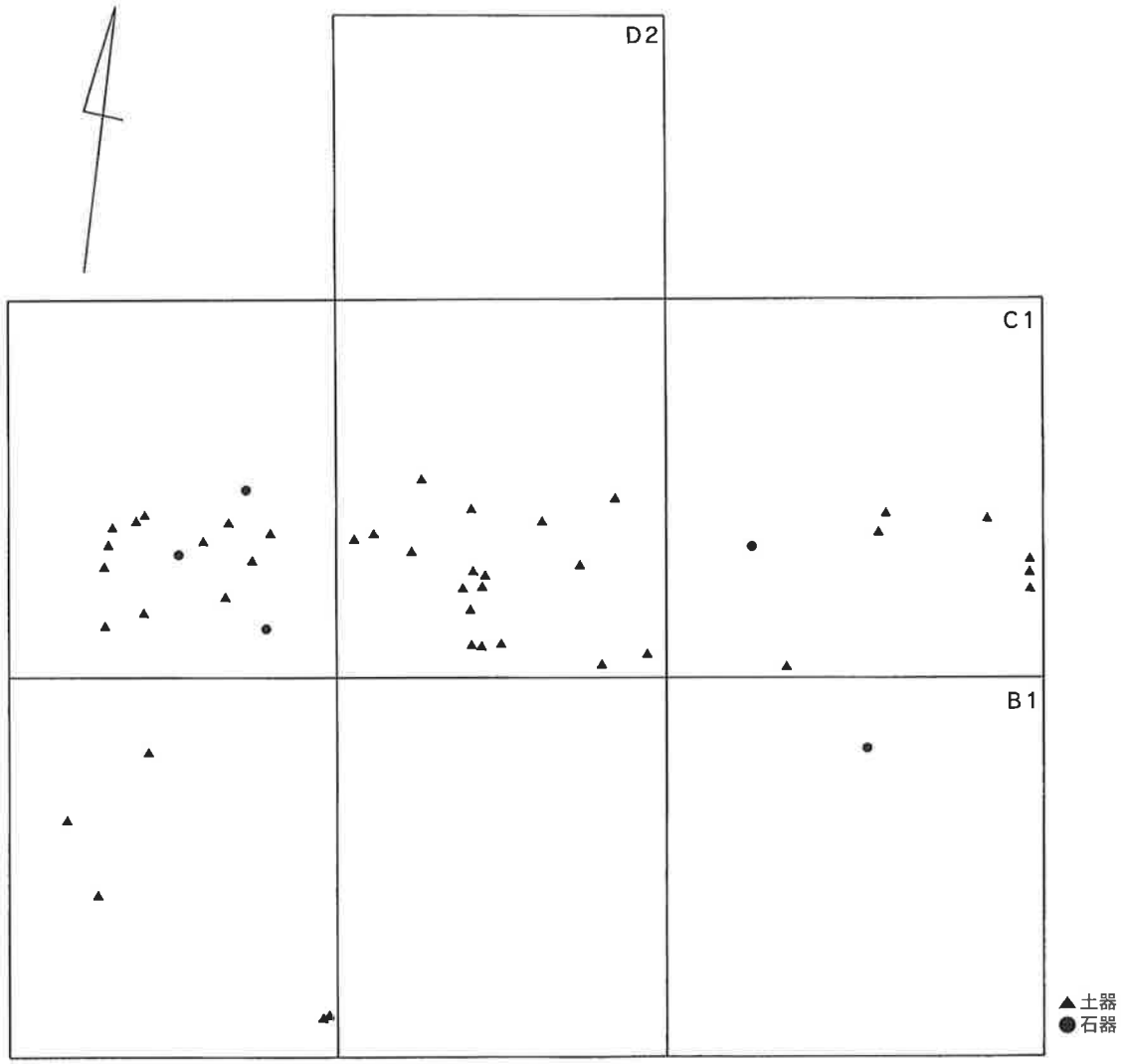
ている遺跡である。

調査　栢ノ木遺跡の平成12年度の調査は、第11次調査から第14次調査まで行っている。このうち確認調査であった第11次から第13次調査については概に報告が済んでいるので、第14次調査分についてのみ報告する。第11次調査は保育所建設に伴う確認調査であり、調査地点の東側において遺物包含層が確認されたため、平成13年１月10日から２月５日まで本調査を実施した。調査区は４ｍ×４ｍを基本として設定し、南から北へＢ～Ｄまで、東から西へ向かって１～３の番号を付し、Ｂ１・Ｄ３のように呼称した。調査時における記録処置は、実測図については1/20を基本とし、写真撮影も同時に行った。最終的に調査した面積は98.5㎡である。

検出遺構　この調査においてＢ・Ｃ列で柱穴群を検出した。柱穴の大きさは径10㎝大から20㎝大のものが非常に多い。調査地点が限られていたこともあり、残念ながら掘建柱建物跡を復元するまでには至らなかった。調査区内での基本層位はⅠ層耕作土、Ⅱ層黄灰褐色、Ⅲ層黄褐色（床土）Ⅳ層灰褐色、Ⅴ層茶褐色、Ⅵ層暗褐色、Ⅶ層赤褐色でいずれも粘質を帯びた土層である。



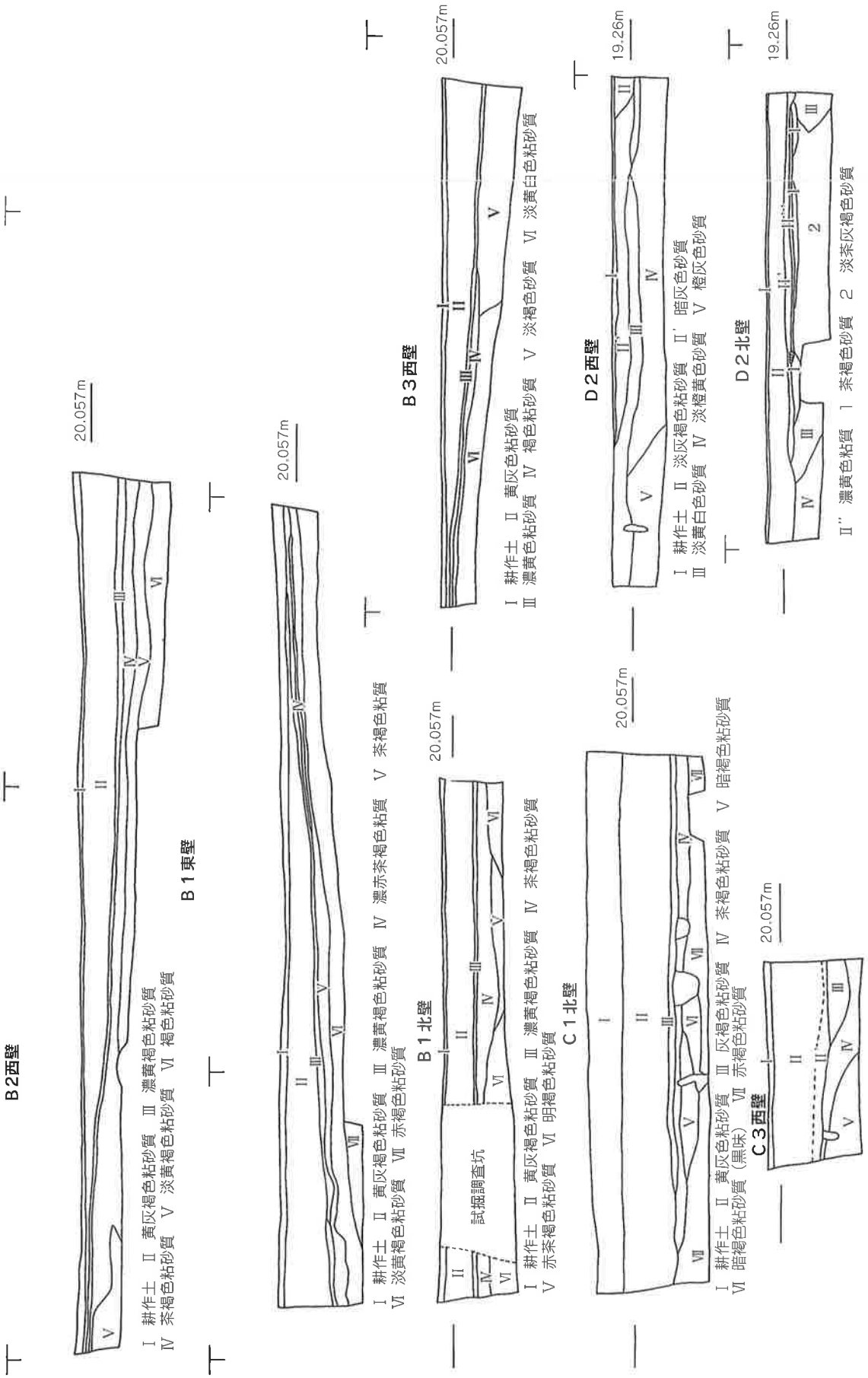
第５図　14次調査遺構配置図(1/40)



第６図　14次調査遺物分布図(1/40)

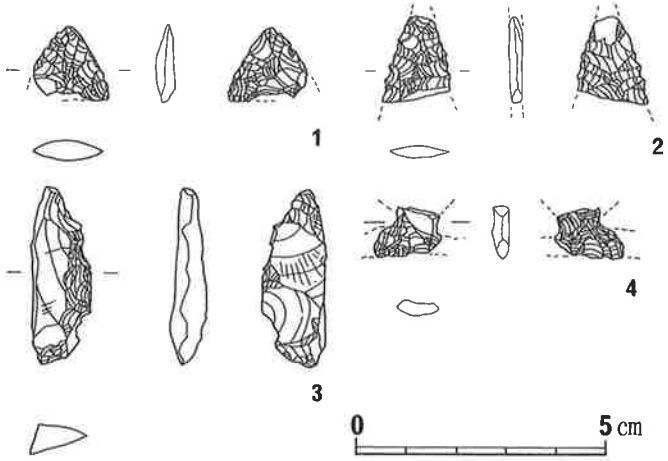
出土遺物　遺物は調査区の中央であるＣ列において多数出土している傾向にある。調査によって出土した遺物は2,423点である。黒曜石製石鏃、黒曜石製石核・加工痕ある剥片・剥片・砕片、打製石斧、安山岩製石核・剥片・砕片、結晶片岩・石鍋片・滑石片、メノウ製剥片、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、須恵質土器、輸入陶磁器である龍泉窯系青磁碗・盤・鎬蓮弁文青磁碗、同安窯系青磁碗、白磁碗・白磁皿、李朝陶器、輸入陶器、近世陶磁器、瓦片などが出土している。しかし、ほとんどの遺物が破片であるにも関わらず図示できたのは石器８点、土器８点の16点であった。

１・２は黒色黒曜石製石鏃である。１は小型の石鏃で基部の抉りも浅く、先端部の角度も65度と鈍角である。一部脚部を欠損しているが全面パティナに覆われており、加工も粗く施されている。２は先端部と両脚部・基部を欠損しているが二等辺三角形状を呈する石鏃である。両側縁とも鋸歯状に加工が施されている。３は加工痕ある剥片で彫器の未製品であろう。４は欠損部分が多いため全体の器形を知ることはできないが石鏃の可能性も指摘するにとどめておく。５は扁平片刃石斧である。小型の頁岩を利用しており、全体によく研磨されている。６は石庖丁である。大部分が欠損しているが両

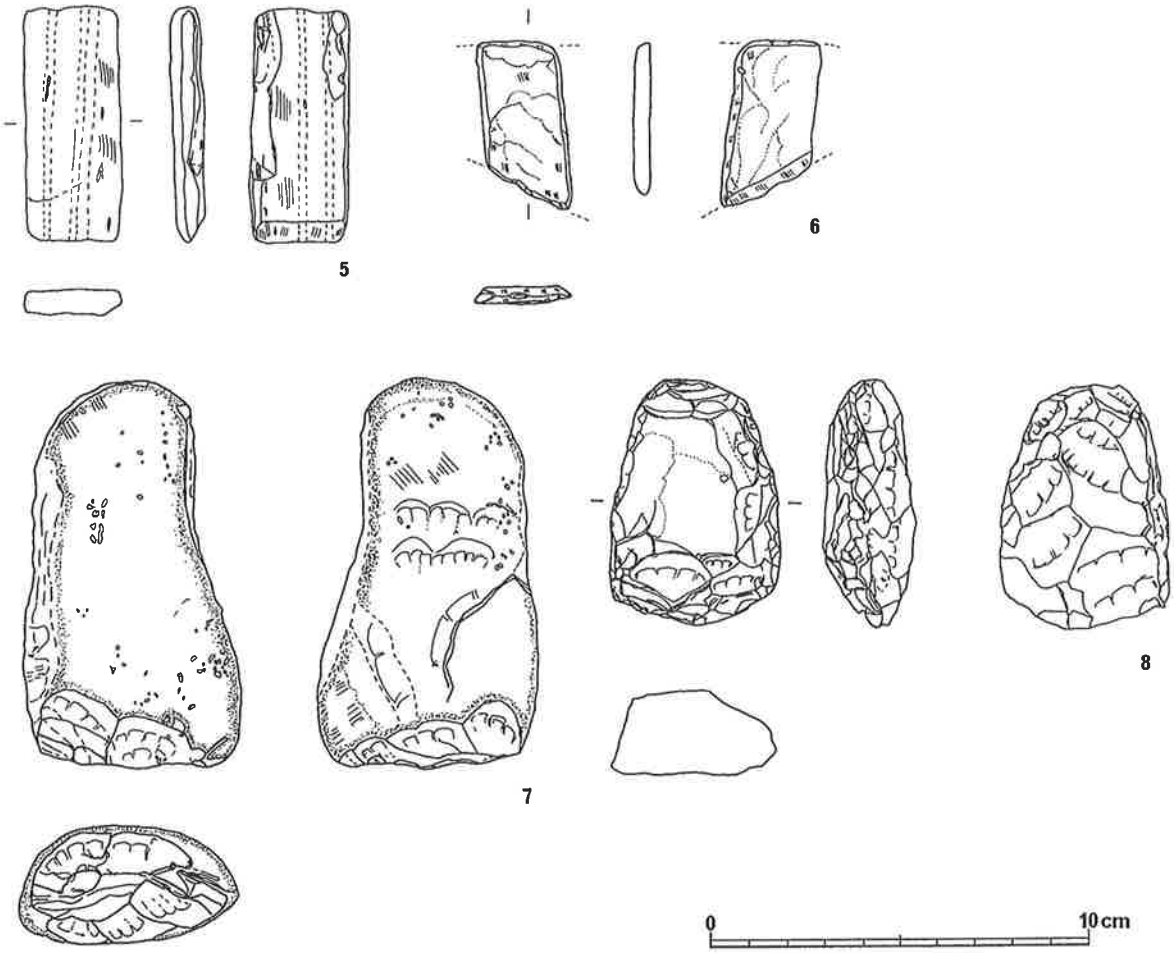


第７図　14次調査区土層図(1/40)

刃に作り出されている。刃部には使用による刃こぼれが認められる。７・８は打製石斧である。７は小型であるが基部に対して刃部が幅広く肥厚である。玄武岩製で一部磨滅が認められる。８は安山岩製で寸づまりの剥片を利用しており、一部側面に自然面を有している。

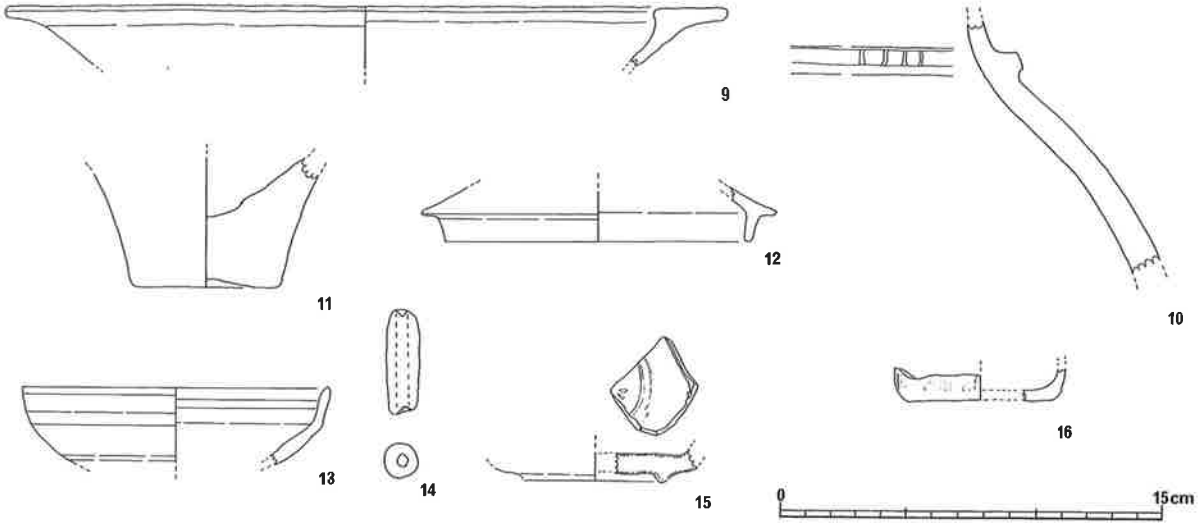


第８図　14次調査出土遺物①(2/3)



第９図　14次調査出土遺物②(1/2)

９～11は弥生土器である。９は壺の口縁部でほぼ平坦をなしており、鋤先状に張り出しておらず丸く納められている。内外面ともナデ仕上げである。10は壺の肩部分の厚手の資料で、頸胴界には１条の突帯を貼付けしているが丸味をもちシャープさに欠けており、刻目は浅く入っている。内面ナデ仕上げ、外面にはハケ目調整が認められる。突帯より頸部にかけては朱塗りの痕跡が認められる。ここでは壺棺として利用された可能性を指摘しておく。11は甕形土器の底部片である。若干上げ底状を呈している。12は須恵器坏蓋・13は坏身である。14～16は中世の資料である。14は土錘である。15は朝鮮産粉青砂器で、内面見込みには二重圏線と花（菊？）文が白象嵌されている。外面畳付部には砂が全体に付着している。釉は内外面の見込みまで全面に施釉されている。16は陶器の合子身で外面体部下位には連子文を入れている。釉は内面と蓮子文まで施釉されているが底部には施釉されていない。



第10図　14次調査出土遺物③（1/3）

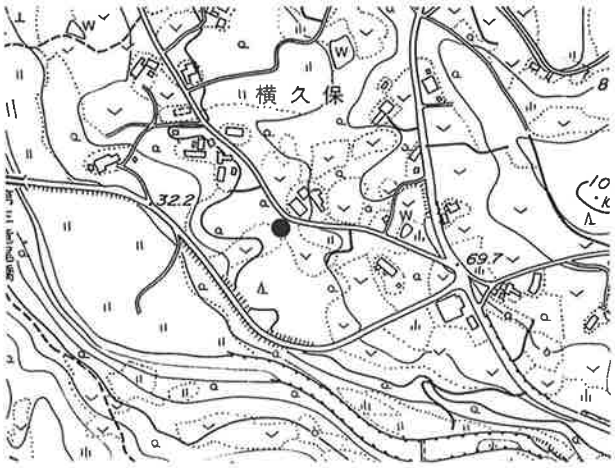
【参考文献・引用文献】
正林　護　1973　『栢ノ木遺跡（中間報告）』　松浦市教育委員会
正林　護　1997　「栢ノ木遺跡」『原始・古代の長崎県　資料編Ⅱ』　長崎県教育委員会
馬場聖美編　2003　『里田原遺跡』　田平町文化財調査報告書第９集　長崎県田平町教育委員会

第Ⅳ章　平成13年度確認調査の概要

ここでは、平成13年度に国庫補助を受けて実施した横久保遺跡・栢ノ木遺跡について、その調査を以下に概説する。

1．横久保遺跡（第11図～第14図）

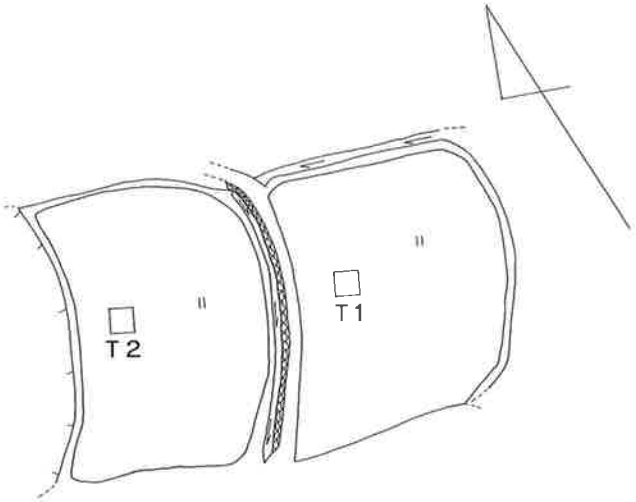
立地　横久保遺跡は市の中心部である志佐町より西へ約4.2kmの御厨町横久保免の標高約60mの玄武岩台地上にあり、遺跡の西側には龍尾川が北流している。遺跡のすぐ東側には県道江迎・星鹿港線が走っている。周辺の台地上には旧石器・縄文時代の遺物散布地である寺ノ尾Ａ遺跡・寺ノ尾Ｂ遺跡、第４次まで確認調査を行っている寺ノ尾Ｃ遺跡が位置している。昭和56年度に県教育委員会が行った分布調査では、横久保遺跡からは黒曜石製剥片・弥生土器片が採集されており、遺跡範囲も東西約100m、南北約30mの比較的狭い範囲に分布していることが確認されていた。しかし、昭和50年代初め頃の土地改良事業により遺跡の大部分は削平されているようである。



第11図　横久保遺跡位置図（1/10,000）

調査　横久保遺跡の発掘調査は、これまで行われたことがなく今回の調査が最初にあたる。調査は個人の施工による圃場整備事業に伴う確認調査で、調査地点は遺跡の最西端の水田部にあたっている。調査は平成13年12月18日から12月26日までの９日間行った。調査区は２ヵ所設定し、８㎡を調査している。

検出遺構　図示していないがＴ２区で90cm×30cmの楕円形状を呈した落ち込みを１基検出した。覆土内からは頁岩製剥片１点が出土している。この遺構の時期・性格については不明である。その他には遺構を検出することはできなかった。

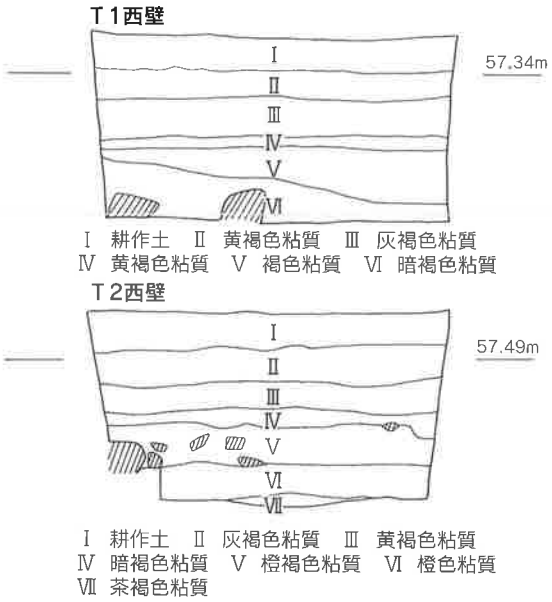


第12図　調査区設定図（1/600）

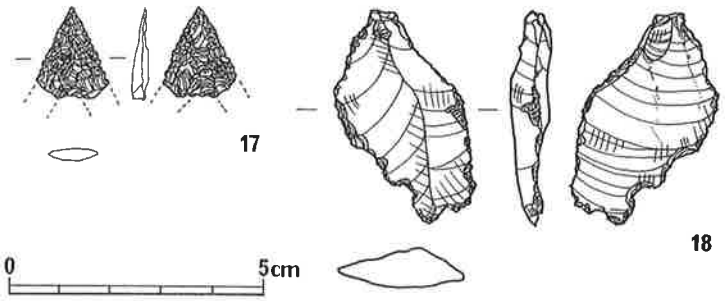
出土遺物　遺物包含層の確認はできなかったが、調査によって出土した遺物は35点で、二次堆積によるものと思われる。その内の２点を図示した。遺物には黒曜石製石鏃・使用痕ある剥片

・原石・剥片・砕片、安山岩製剥片・砕片、チャート製剥片、玄武岩製剥片、滑石の粉末が混入した縄文土器細片、土師器片、近代から現代の陶磁器類、瓦片が出土している。

17は黒曜石製石鏃で、両脚部と基部を欠損し、先端部のみとなった資料である。両側縁とも丁寧に鋸歯状に加工が施されている。主要剥離面・背面ともに細かな加工が行われている。18は使用痕ある剥片で、黒曜石製である。縦長剥片の側縁に細かな使用痕が認められる。２点ともＴ１Ⅲ層からの出土である。



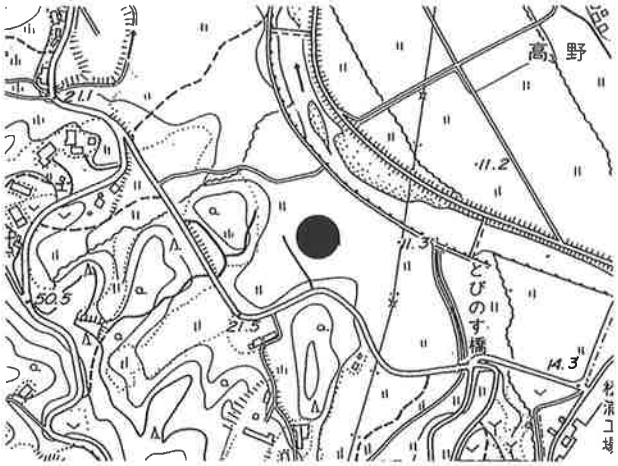
第13図　調査区土層図（1/40）



第14図　出土遺物（2/3）

2．栢ノ木遺跡（第15図～第26図）

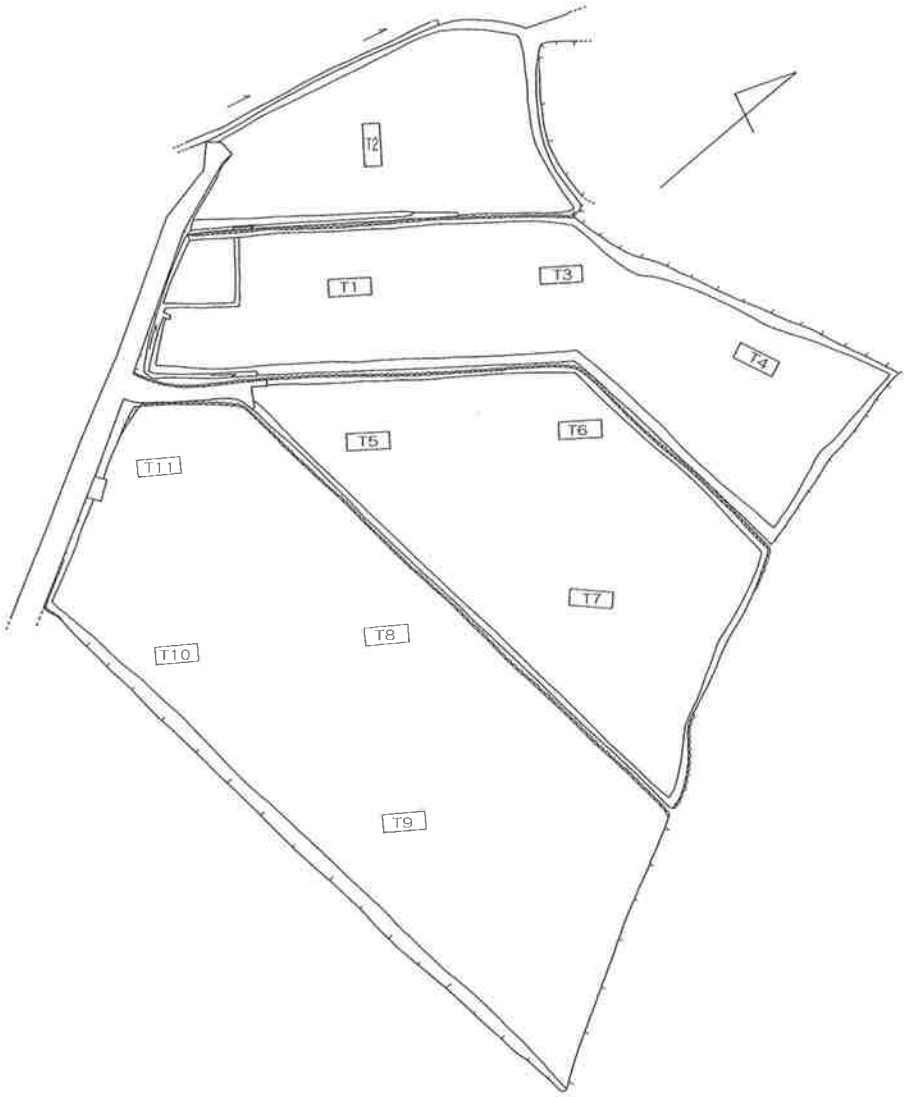
立地　栢ノ木遺跡は市の中心部で、志佐川下流域の左岸と志佐川の支流である佐々山川の流域の水田地帯に位置している。遺跡は東西約600m、南北約900mの広範囲に分布している。志佐川の対岸の沖積平野および河岸段丘上には宮ノ下り遺跡・久保園遺跡・陣ノ内城跡が立地している。



第15図　栢ノ木遺跡位置図（1/10,000）

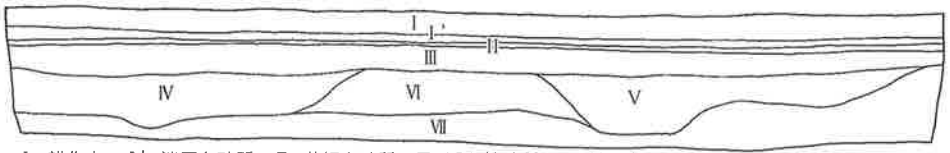
栢ノ木遺跡は志佐川に隣接しているため、水田耕作に適した地理条件に恵まれている所である。これまで15回におよぶ本調査・確認調査・試掘調査が行われている。遺跡の中心は昭和46年に最初の調査が行われた地点周辺と思われ、箱式石棺墓３基、甕棺墓３基が検出されている。特に２号石棺内からは中国製の青銅鏡（内行花文鏡）が出土しており、首長クラスの存在がうかがえる遺跡として重要性が指摘されている遺跡である。

調査　今回の栢ノ木遺跡の調査は、第15次調査にあたる。調査地点は昭和46年に調査が行われた所より北側の水田一帯で、西側は平成12年度に行った第14次調査地点と接している。調査は平成14年３月１日から３月25日までの期間行った。調査区は２m×５mを基本として北側から



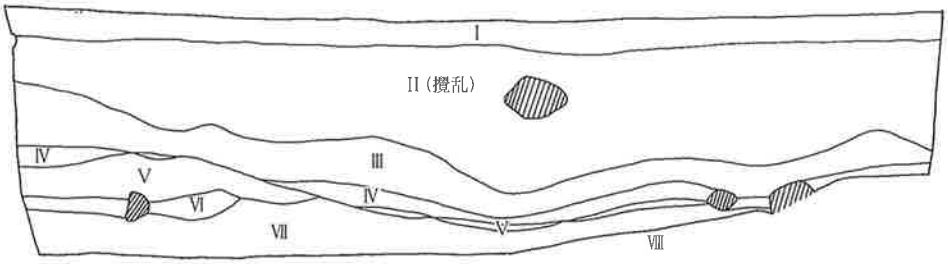
第16図　15次調査区設定図（1/900）

T1西壁



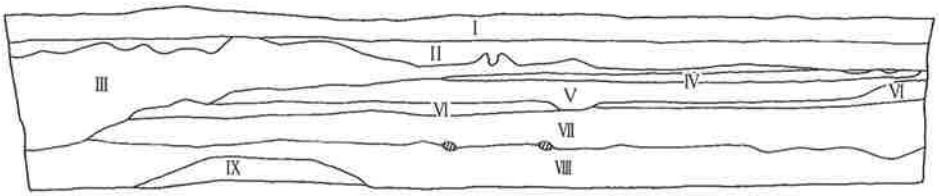
Ⅰ 耕作土　Ⅰ' 淡灰色砂質　Ⅱ 黄褐色砂質　Ⅲ 灰色粘砂質　Ⅳ 淡灰黄色砂質　Ⅴ 暗灰色粘質
Ⅵ 淡黄褐色砂質　Ⅶ 濃黄褐色粘質

T2北壁



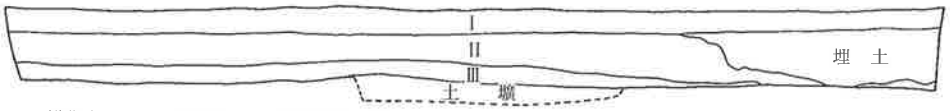
Ⅰ 耕作土　Ⅲ 灰黄色粘砂質　Ⅳ 暗灰色粘砂質　Ⅴ 黄灰色砂質　Ⅵ 黄褐色粘質
Ⅶ 暗灰褐色粘質　Ⅷ 暗茶褐色粘質

T5東壁



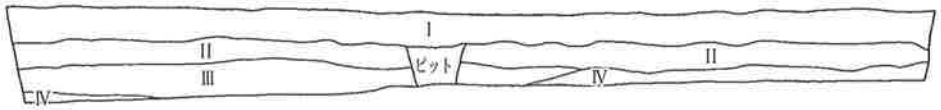
Ⅰ 耕作土　Ⅱ 黄褐色粘質　Ⅲ 灰色砂質　Ⅳ 黄褐色粘砂質　Ⅴ 灰黄色粘砂質
Ⅵ 黄灰褐色粘砂質　Ⅶ 暗灰褐色粘質　Ⅷ 黄褐色粘質　Ⅸ 濃黄色粘質

T8北壁



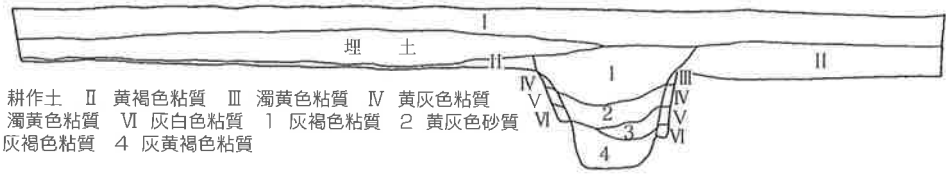
Ⅰ 耕作土　Ⅱ 旧耕作土　Ⅲ 濁黄褐色（床土）

T9東壁



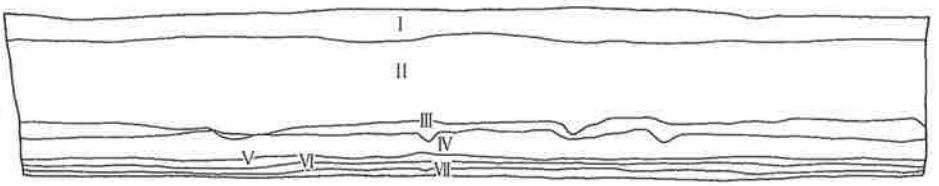
Ⅰ 耕作土　Ⅱ 褐色粘質　Ⅲ 黄褐色粘質　Ⅳ 黄褐色粘質

T10東壁



Ⅰ 耕作土　Ⅱ 黄褐色粘質　Ⅲ 濁黄褐色粘質　Ⅳ 黄灰色粘質
Ⅴ 濁黄色粘質　Ⅵ 灰白色粘質　1 灰褐色粘質　2 黄灰色砂質
3 灰褐色粘質　4 灰黄褐色粘質

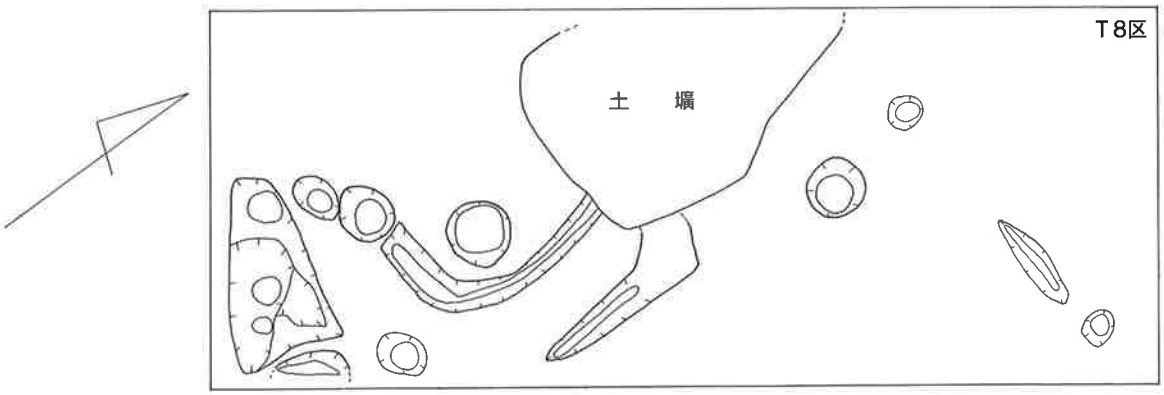
T11西壁



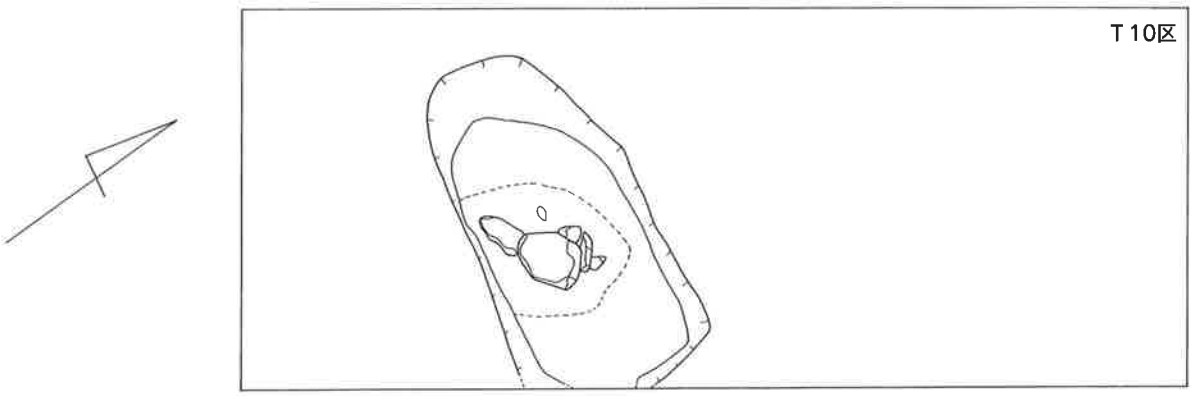
Ⅰ 耕作土　Ⅱ 茶灰色粘質　Ⅲ 灰色砂質　Ⅳ 黒色砂質　Ⅴ 灰色砂質　Ⅵ 黄灰色砂質　Ⅶ 灰色砂質

第17図　15次調査区土層図(1/40)

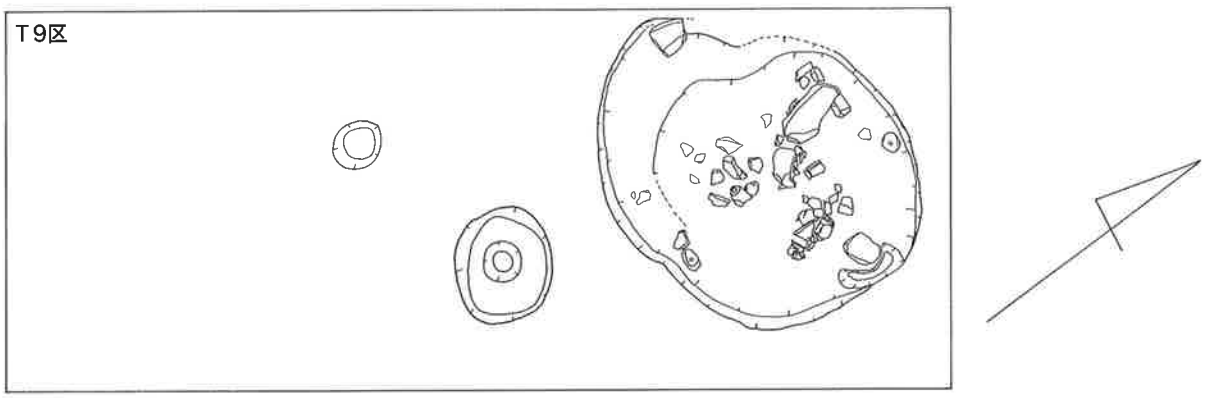
南側へと随時設定していき最終的に11ヵ所を設定した。今回の確認調査では110㎡を調査している。かつて調査地点には狭い水田が段々と営まれていたが農業用の大型機械の導入に伴い区画整理が行われており、現在のような広い面積を有する水田地帯になっている。このためＴ２区のように調査地点によっては暗渠排水用のパイプが埋設されていたり、包含層が削平されていたり、かつての水田の表



第18図　15次調査遺構配置図①(1/40)



第19図　15次調査遺構配置図②(1/40)



第20図　15次調査遺構配置図③(1/40)

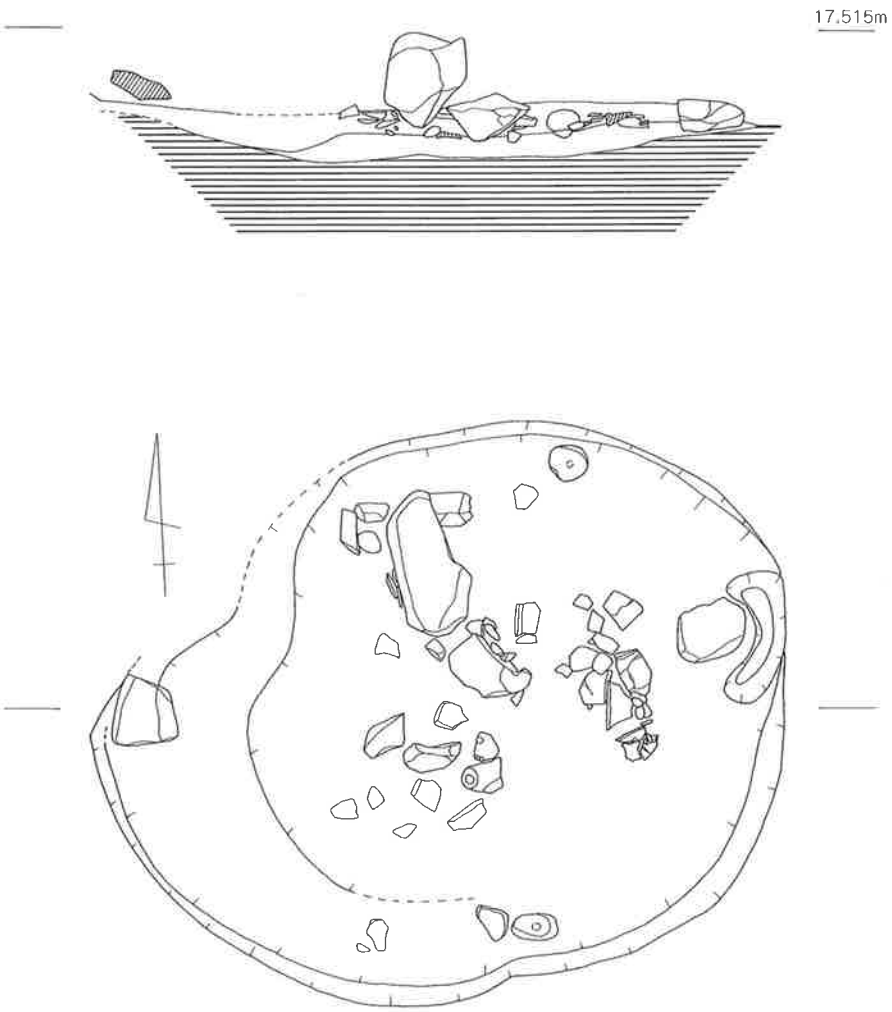
土の上に埋土を盛っていたりしている所が確認された。

検出遺構　この調査で確認した遺構は、Ｔ５区で１基・Ｔ６区で２基の柱穴を検出している。Ｔ８区では土壙１基、Ｔ９区で土壙１基、Ｔ10区でも土壙１基を検出した。時期的にはいずれの遺構も弥生期の所産と思われる。

Ｔ８区の土壙は遺構全体の約1/2程度を検出したが土壙上面は旧表土の床土である濁黄褐色で削平を受けている。不定形な方形の土壙で、覆土が茶褐色を呈し深さは約14㎝程で底面は焼土に覆われていた。遺構内から96点の弥生土器が出土している。遺構の周囲には径が15㎝から30㎝程の柱穴を７基検出している。この遺構は土器焼成に関係する遺構ではないかと考えている。

Ｔ９区の土壙は楕円形で長径185㎝、短径147㎝を測る。黄褐色粘質土から浅くレンズ状に深さ15㎝程度掘り込んでおり、覆土は茶褐色であった。土壙内には甕形土器の口縁部・胴部・底部、凹石、砥石、黒曜石製剥片などとともに炭化物も出土している。出土した遺物の総数は188点である。このうち弥生土器が132点である。同じ調査区内には土壙に伴うものなのか柱穴２基も検出している。それぞれの柱穴から弥生土器が出土しており、中期前半の遺構であろう。

Ｔ10区の土壙は地山の黄茶色粘質土を掘り込んで構築されており、長さ２ｍ、幅１ｍの隅丸長方形を呈している。深さは50㎝～58㎝あり、底面は平坦で玄武岩の自然石６個が張り付いたような状況で検出されている。土壙内からは黒曜石製石核・剥片、安山岩製石核・剥片など81点が出土しているが、土器は検出されなかった。この遺構の性格としては逆茂木用



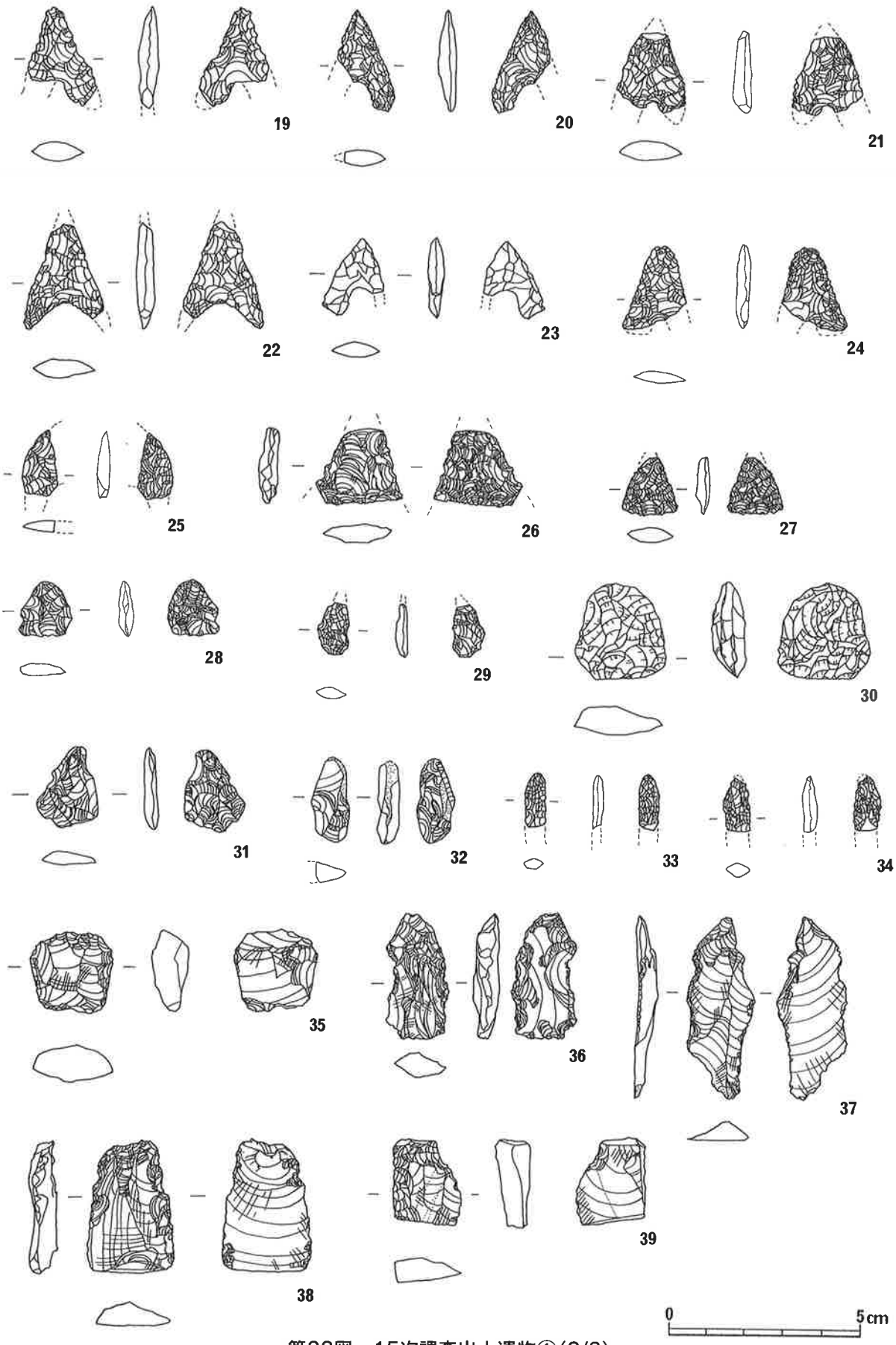
第21図　15次調査遺構実測図（1/40）

の小ピットは有していなかったが、落とし穴状遺構としての用途が考えられるのではなかろうか。

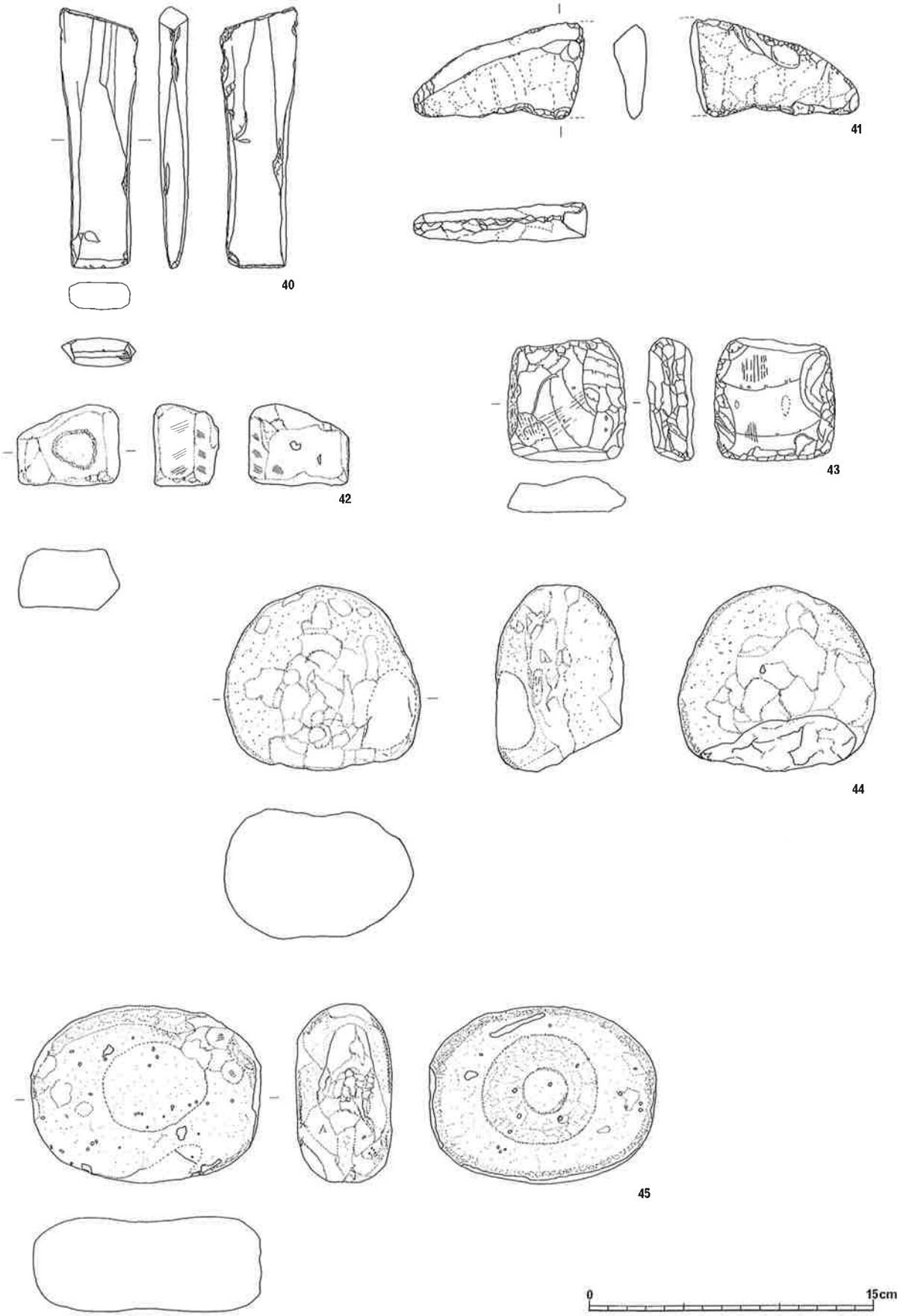
出土遺物　この調査によって出土した遺物は6,291点である。遺物の種類も多く石器では黒色黒曜石製石鏃・石核・使用痕ある剥片・加工痕ある剥片・剥片・砕片、安山岩製石核・剥片・砕片、石錐、打製石斧、磨製石斧、凹石、スクレイパー、砥石、結晶片岩・石鍋片・滑石片、土器では縄文晩期粗製土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、瓦器、須恵質土器、東播系須恵質捏鉢、瓦質土器、土錘、輸入陶磁器では龍泉窯系青磁碗・鎬蓮弁文青磁碗、同安窯系青磁碗、白磁碗口禿・白磁皿、青白磁、天目碗、明染付碗、近世陶磁器、瓦片などが出土している。そのうち図示できたのは19から45の石器27点、46から72の土器27点の合計54点であった。

19は基部の抉りも深く、脚部端と脚部を欠損している。20は灰青色黒曜石製で細かな剥離調整が全面に施されている。片方の脚部を欠損している。二等辺三角形状を呈し、先端部は鋭利に調整されている。21は先端部と両脚部を欠損している。剥離調整は両側縁から丁寧に行われている。22は脚部端が尖っており両側縁の剥離調整も丁寧である。23は安山岩製で逆ハート型を呈しており、基部の抉りも深い。24は両脚部を欠損しており、両側縁の剥離調整も丁寧である。25は石鏃の側縁部分の資料である。26・27・28は平基の石鏃である。26は大型であるが、27・28は小型である。いずれも剥離調整は丁寧である。26はローリングを受けている。29は石鏃の先端部の資料であろう。30は安山岩製の小型のスクレイパーである。不定形の剥片を利用して側縁部に主要剥離面と背面から円形状に剥離調整を施して整えている。31は両面に粗い剥離調整が施されており、石鏃の先端部の資料である。32は加工痕ある剥片で、石鏃の基部加工段階で割れたため放棄したものと思われる。33・34は石錐の先端部である。つまみ部分は欠損するが両側縁部からの調整で先端部を細身に尖らせている。35は小型で軽量の不定形剥片を利用したスクレイパーで、主要剥離面より細かい剥離調整を施している。全体にローリングを受けている。36は加工痕ある剥片で側縁部に粗い加工が施されている。37は使用痕ある剥片で縦長剥片の側縁部に使用痕が認められる。38も使用痕ある剥片である。39は加工痕ある剥片で背面に加工痕が認められる。Ｔ９土壙内からの出土である。40は磨製石斧で基部を欠損している。全面丁寧に研磨されており、側縁の稜が明瞭である。両凸刃で刃部は直刃している。41は玄武岩製のスクレイパーである。両側縁には両面からと片面からの剥離調整を施して形状を整え、内湾気味の刃部を作り出している。その他の部分には剥離面として残している。基部を欠損している。42は砥石である。欠損しており全体の器形については不明であるが、全体に滑らかで３面に磨いた痕跡があり、少し熱を受けているようである。Ｔ９土壙内からの出土である。43は打製石斧である。基部の一部と刃部を欠損しており、スクレイパーとして再利用している。背面に一部自然面を有している。44・45は凹石である。44は円礫の1/4程度を欠損しており中央部に使用による凹みがある。全体に表面が荒れている。45は両面中央部がわずかに凹んでいる。側縁部に敲打痕が認められる。Ｔ９土壙内からの出土である。

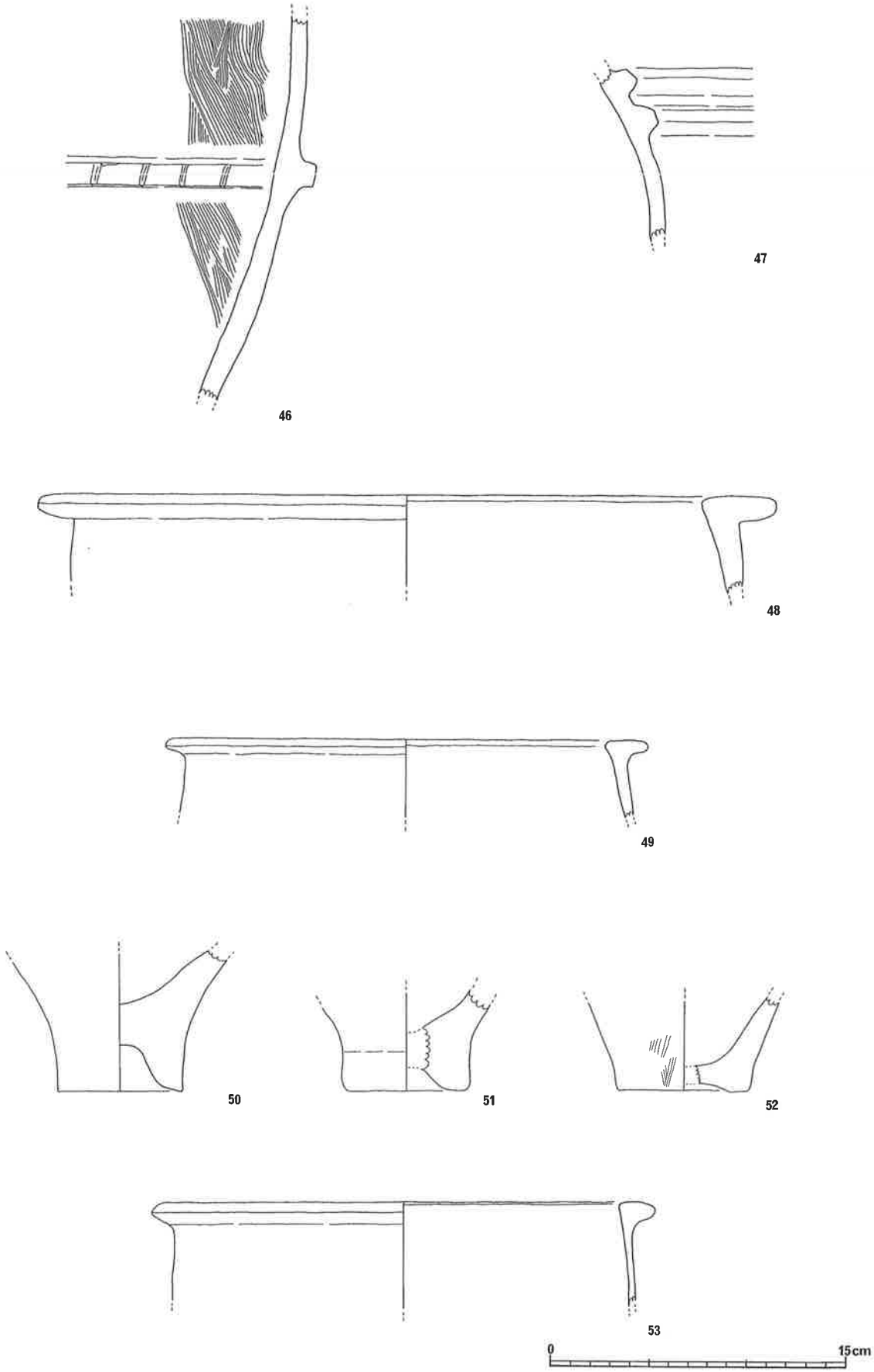
46から60は弥生土器の甕である。46・47は甕の胴部片である。46は胴部の厚さは0.8㎝～1.2㎝と厚く仕上げている。「コ」の字形の突帯を１条巡らしている。突帯には約２㎝間隔で刻目が施されて



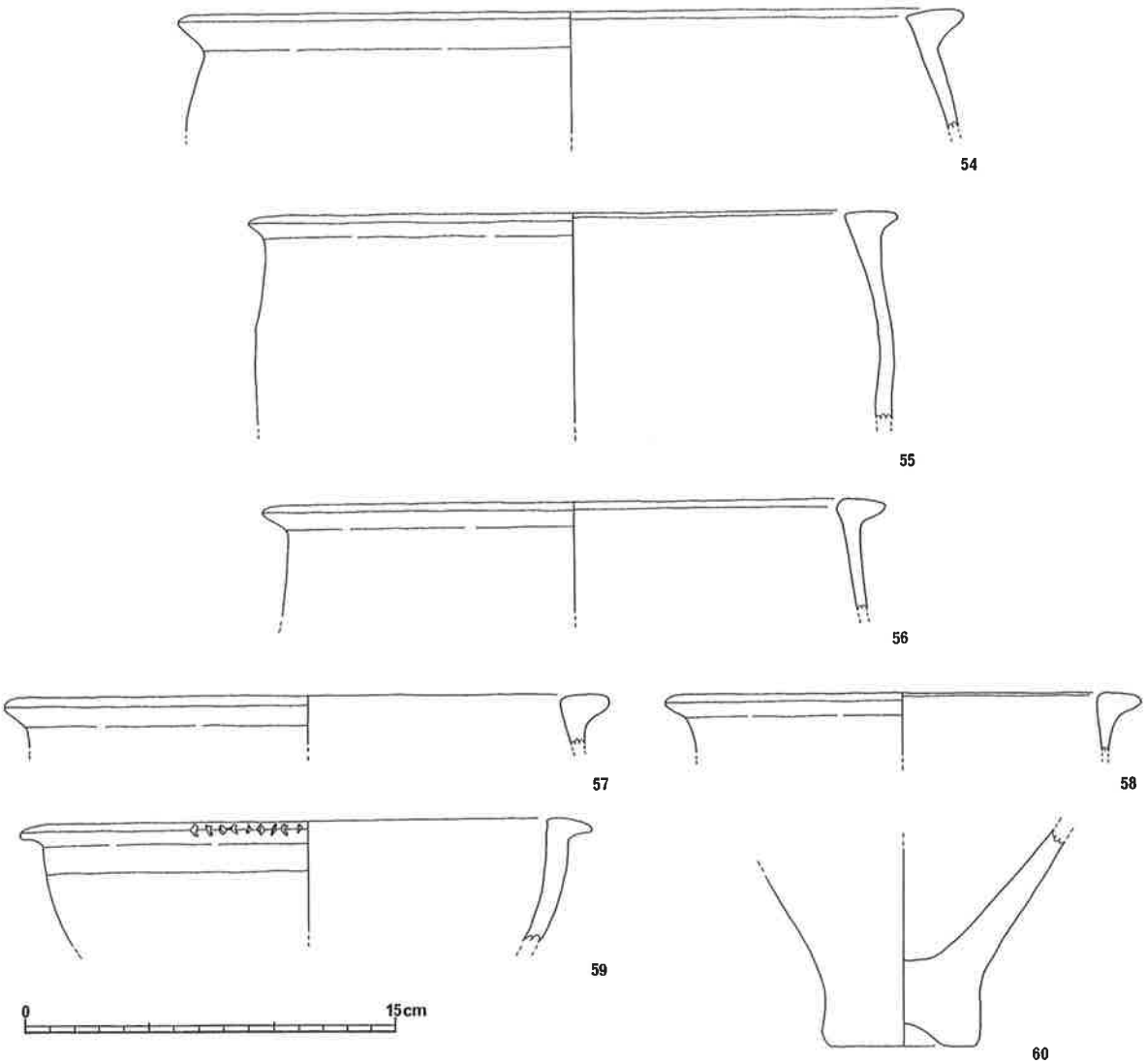
第22図　15次調査出土遺物①(2/3)



第23図　15次調査出土遺物②(1/3)

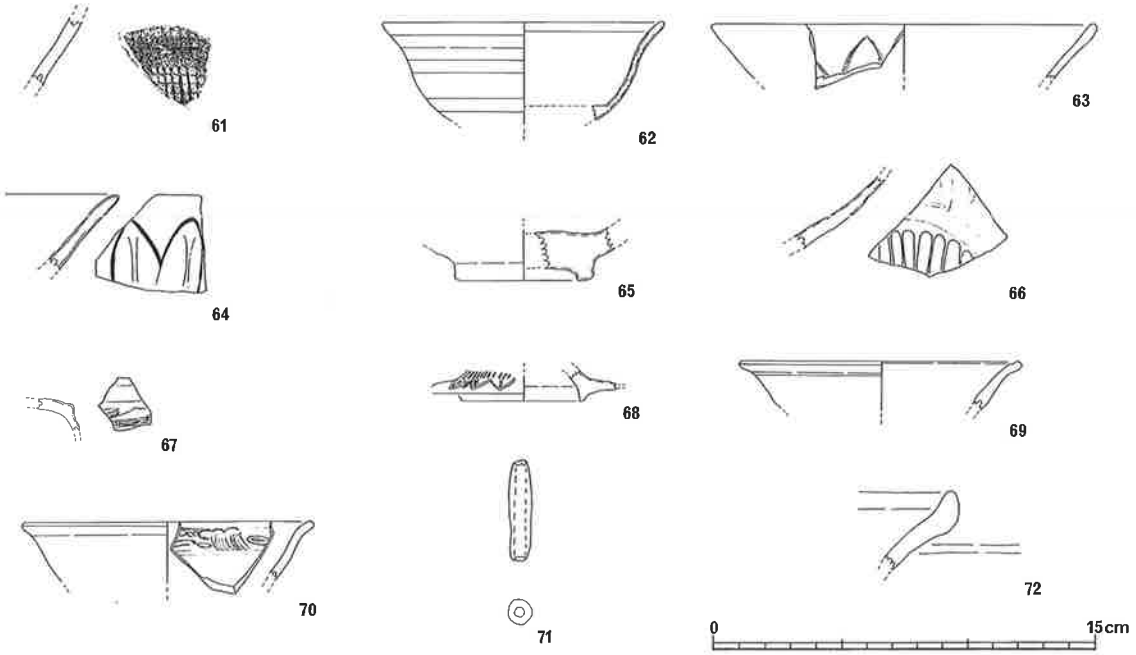


第24図　15次調査出土遺物③（1/3）



第25図　15次調査出土遺物④(1/3)

いる。突帯の上位と下位にはハケ目調整が行われ、内面はナデ調整である。甕棺用として使用されていたものと思われる。KⅣa式で後期前半の資料であろう。47も厚みが0.8cmあり、甕棺用として使用されていたものと思われる。肩部に「コ」の字形の突帯が２条巡っている。全体に磨滅が著しいため器面調整は不明である。48・49は甕形土器の口縁部である。逆「L」字形口縁で、平坦である。胴部はやや脹らむのであろう。50～53は甕形土器の底部である。上げ底を呈している。53は甕形土器の口縁部である。比較的短い口唇をもつ。胴部の厚さは0.3cmと薄く仕上げている。調整は不明。54～58は甕形土器の口縁部で、Ｔ９区の土壙内出土である。逆「L」字形口縁で、比較的短い口唇をもつ。亀ノ甲タイプで中期前半の資料である。59も甕形土器の口縁部で、口唇部に刻目をもつ。口径にくらべ器高が低く、胴部下位は急激にすぼまっている。Ｔ９区の土壙内出土。中期前半の資料である。60もＴ９区の土壙内出土の甕形土器の底部で、上げ底を呈している。中期の資料である。61は土師質土器の甕体部片で、外面には格子状のタタキ目があり、内面はナデ調整である。62は白磁碗である。口縁部の釉がカキ取られた「口禿」で、外面口縁端部までカキ取られている。釉は全体に薄くかけられ



第26図　15次調査出土遺物⑤（1/3）

ており、口縁部は外反している。大宰府分類のⅨ類にあたる。63は鎬がない龍泉窯系蓮弁文青磁碗である。釉は薄くかけられている。大宰府分類のⅠ－５・ａにあたる。64は龍泉窯系鎬蓮弁文青磁碗である。釉はやや厚くかけられている。大宰府分類Ⅰ－５・ｂ。13世紀中葉から14世紀初頭と考えたい。65は龍泉窯系青磁碗の高台部の資料である。釉は畳付部まで一部施釉されている。66は同安窯系青磁碗で体部外面にヘラ状の施文具により片彫り風の沈線を施している。大宰府分類Ⅲ類にあたる。67は青白磁の合子蓋である。内面天井部と外面口縁部には施釉されていない。外面天井部には花文？が型押しされている。68は青磁合子蓋である。外面天井部のみ施釉されている。その天井部には蓮弁が線書きされている。69は李朝陶器で皿であろうか。口縁端部を上方につまみだし、内面体部には沈線がある。70は景徳鎮窯青花碗である。内面口縁部に施文されている。16世紀前半の資料である。71は土錘である。中央部の脹らみがなく細身の紡錘形を呈する。72は東播系須恵質捏鉢である。口縁端部を上方につまみだし、内面体部はヨコナデで仕上げている。13世紀後葉から14世紀前半の資料である。

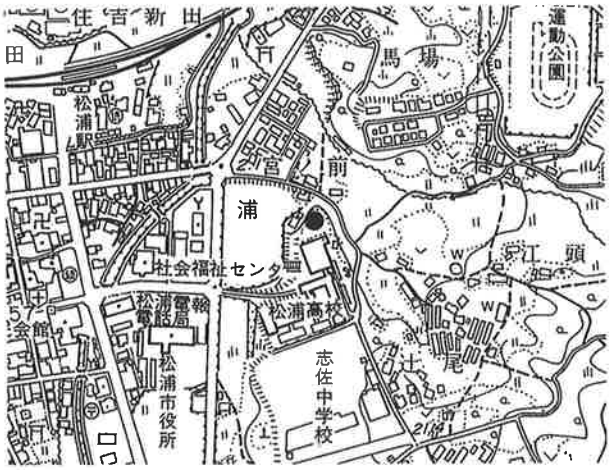
【参考文献・引用文献】
横田賢次郎・森田勉　1978　「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」　『九州歴史資料館研究論集４』　九州歴史資料館
安楽勉・中田敦之編　1985　『楼楷田遺跡』　長崎県文化財調査報告書第76集　長崎県教育委員会・松浦市教育委員会
中間研志・小田和利編　1988　『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告13』　福岡県教育委員会

第Ⅴ章　平成14年度確認調査の概要

国庫補助を受けて確認調査を実施した辻ノ尾遺跡・中ノ瀬遺跡・宮ノ下り遺跡・栢ノ木遺跡（２件）について、その調査を以下に概説する。

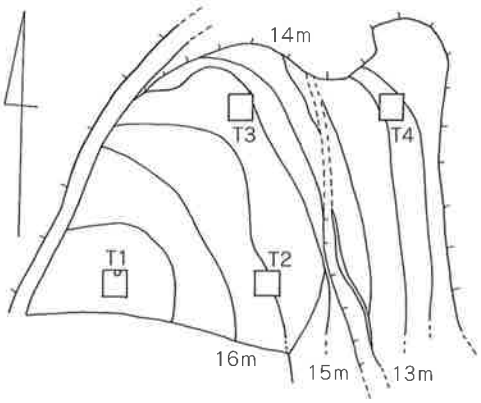
１．辻ノ尾遺跡（第27図～第30図）

立地　辻ノ尾遺跡は市の中心部志佐町にあり、市役所より北東へ徒歩で５分程度の距離にある。志佐川の流れと並行した標高約12ｍから17ｍのゆるやかな舌状台地の最先端部に位置している。この先端部には明治期以降の墓地が群集している所でもある。かねてより遺跡の範囲はこの先端部から県立松浦高等学校と南側の市立志佐中学校の敷地までの台地上の広範囲に広がっていたと思われ、旧石器から縄文時代の遺物が採集されていた。辻ノ尾遺跡の周辺には北側に淀姫神社古墳、南側に陣ノ内城跡の遺跡が分布している。



第27図　辻ノ尾遺跡位置図（1/10,000）

調査　辻ノ尾遺跡の調査は、これまで昭和63年度の志佐中学校校舎改築に伴う確認調査がある。今回の調査は平成14年度の辻の尾土地区画整理事業に伴う確認調査で、遺跡の最先端地区にあたっている。調査は８月27日から９月３日までの８日間行った。調査区は４ヵ所設定し、16㎡を調査している。この調査は辻ノ尾遺跡第２次調査と呼ぶことにした。



第28図　２次調査区設定図（1/600）

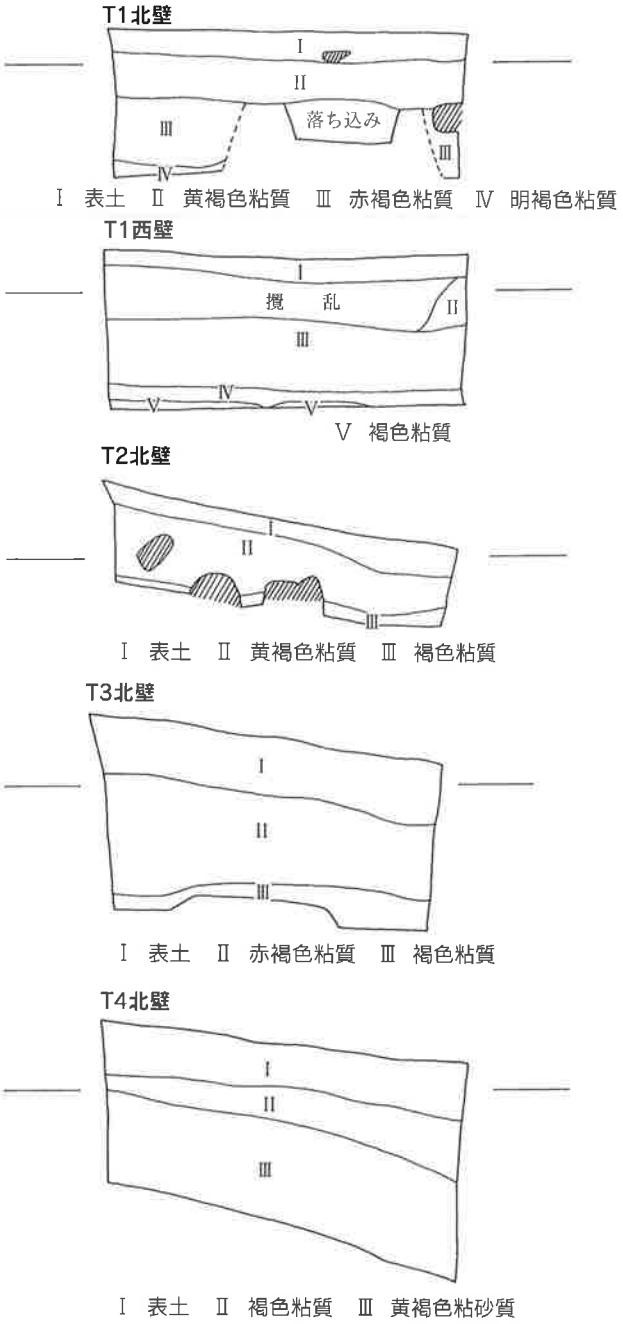
検出遺構　今回の調査の中でも最も高い位置に設定した調査区であるＴ１区から落ち込み１基を検出した。遺構はⅡ層の黄褐色粘質土の下から検出し、落ち込み上面で80㎝×64㎝の楕円形状を呈しており、深さは約22㎝で、床面は平坦であった。覆土は暗褐色で、流れ込みと思われる黒曜石製砕片１点が出土している。この遺構については、時期・性格などについては不明な点が多い。近代墓址の下部構造の可能性もある。

その他に遺構の検出はできなかった。

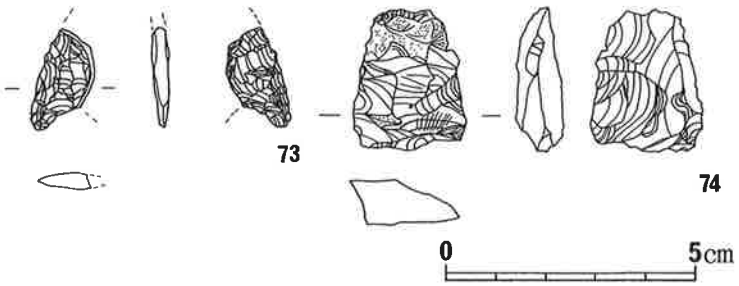
出土遺物　遺物包含層の確認はできなかったが、調査によって出土した遺物は165点である。その内で２点を図示することができた。遺物には黒曜石製石鏃、黒曜石製石核・剥片・砕片・加工痕ある

剥片、安山岩製石核・剥片・砕片、砥石片、土師器、近代から現代の陶磁器類が出土している。

73は打製の石鏃で黒色黒曜石を素材としている。全体の約半分が残存しており、先端部と片方の脚部を欠損している。側縁部はやや丸みを帯びており、基部の抉りは浅い。T２区Ⅱ層出土である。74は表面採集品で加工痕ある剥片である。一部自然面を有しており、加工面は全面パティナに覆われている。パティナの状況から旧石器の資料と思われる。



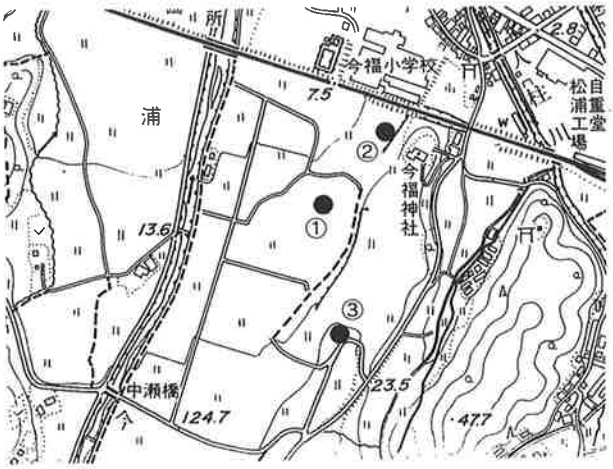
第29図　２次調査区土層図(1/40)



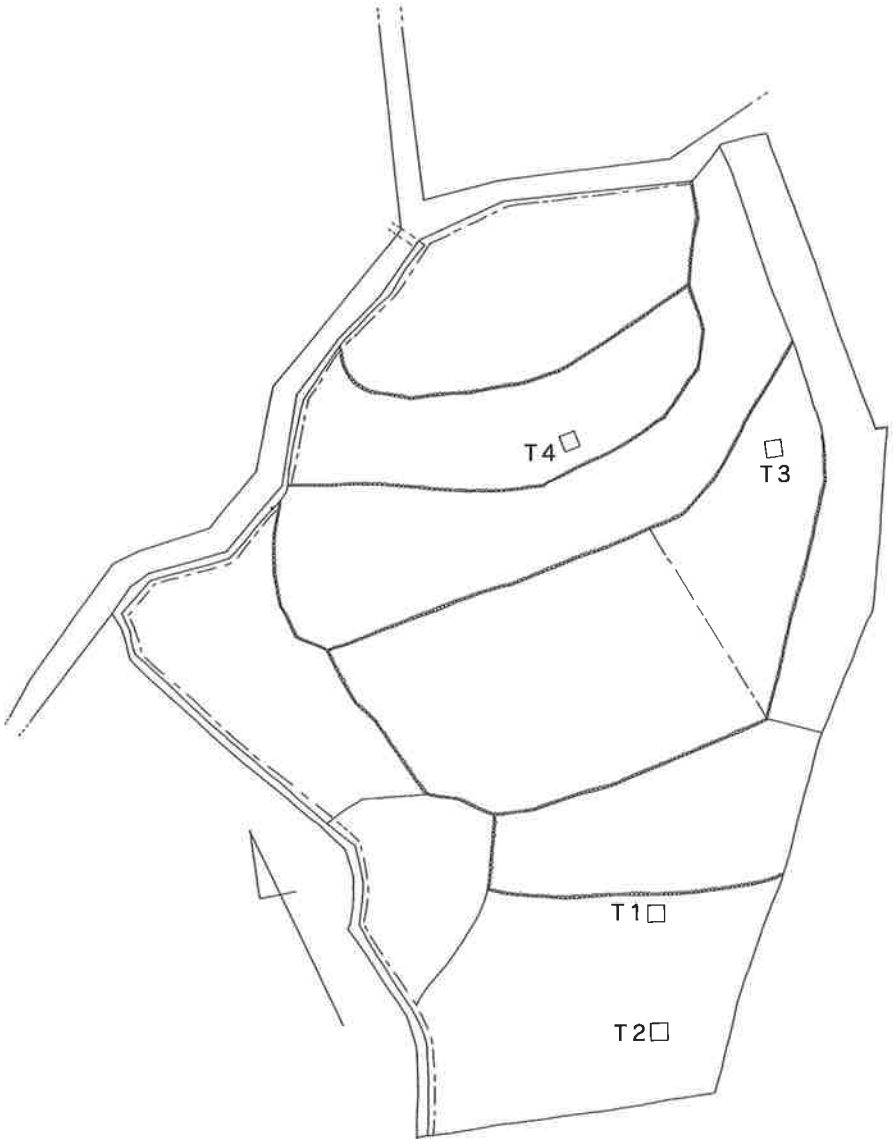
第30図　２次調査出土遺物(2/3)

2．中ノ瀬遺跡（第31図～第40図）

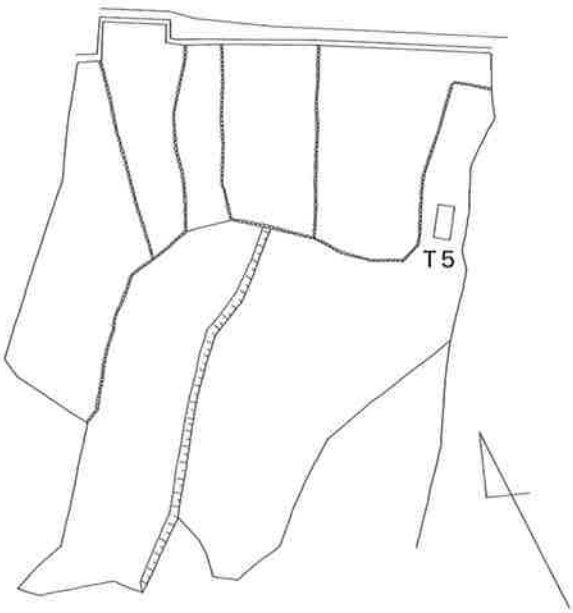
立地　中ノ瀬遺跡は松浦市の東部、佐賀県伊万里市と接する今福町の浦免および東免に所在している。町の海岸部を走る国道204号線の南側、北流する今福川に沿って伸びる丘陵上と今福川によって形成された沖積平野を望む低台地上の水田地帯に位置している。遺跡は南北に長く、東西約200m、南北約550mの範囲に分布している。標高は約16mから約40mに位置しており、南側は石倉山から伸びた丘陵へと続いている。今福川を挟んだ対岸には弥生時代から中世の複合遺跡である今福遺跡が立地している。



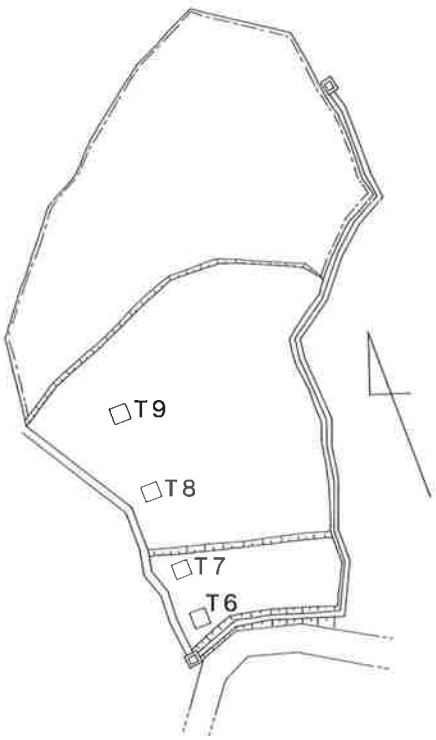
第31図　中ノ瀬遺跡位置図（1/10,000）



第32図　３次調査区設定図①（1/600）



第33図　３次調査区設定図②(1/600)



第34図　３次調査区設定図③(1/600)

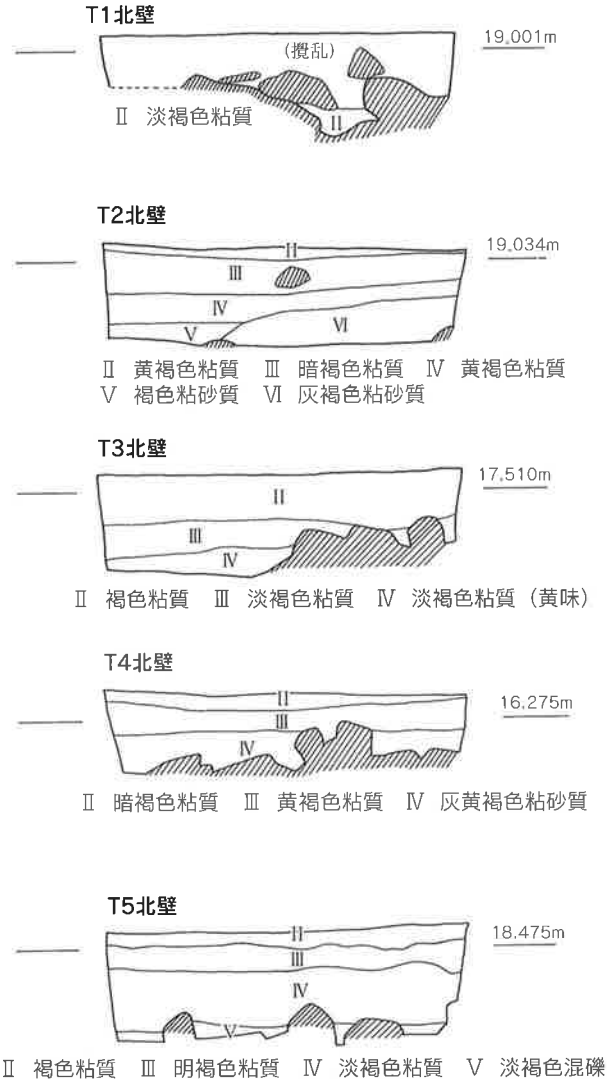
調査　今回の中ノ瀬遺跡の調査は、沖積平野に営まれた水田部の地点とそれを望む一段高い台地に位置する水田部の２ヵ所であった。平成７年度に確認調査した地点より北に約200ｍから300ｍの地点で、どちらも個人による圃場整備事業に伴う確認調査である。２ヵ所の調査は平成14年11月７日から11月20日までの14日間実施し、９ヵ所の調査区を設定した。調査を行った面積は40㎡である。

検出遺構　今回の調査では２ヵ所とも遺構の検出はできなかった。

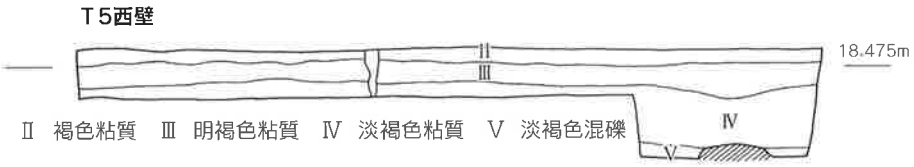
出土遺物　二つの地点から出土した遺物の総数は615点であった。その遺物には黒曜石製石核・剥片・砕片、安山岩製原石・剥片・砕片、弥生土器、土師器、輸入陶磁器である龍泉窯系鎬蓮弁文青磁碗、同安窯系青磁碗・皿、白磁碗、陶器壺、国内産の滑石製石錘・滑石片、鉄砲玉、近世から現代までの陶磁器が出土している。615点の出土遺物のうち図示できたものは石器１点、土器16点である。

75～89は弥生土器の甕である。75・76はＴ５区Ⅱ層出土である。その他の遺物はＴ５区より西側へ約８ｍの地点の水田畦畔石垣内より一括採集した弥生土器である。75・76とも口縁部が「く」の字形に外上方に折れる口縁をもち、口縁端部は丸くおさめている。75は胎土は粗いが焼成は良好である。外面には縦方向のハケ目がのこり、内面はヨコナデで仕上げている。内面は黒変している。76も外面が黒変している。77は逆「L」字形口縁をもち平坦でほぼ水平の口縁をもち、厚さ0.65㎝である。胴部はほとんど張らず、胴部の器厚は非常に薄く0.4㎝である。外面は磨滅しているが縦方向のハケ目調整痕が若干観察できる。78も77と同一タイプである。口縁部の厚みは0.6㎝と非常に薄い。胴部はまったくはらず直線的である。胎土は精選されており、焼成も良好である。79も77と同一タイプである。平坦口縁の幅が大きくなり断面が「L」字形口縁を呈する。口縁部内側をわずかにつまみ出して

いる。口縁の幅が大きくなり断面が「L」字形口縁を呈する。口縁部内側をわずかにつまみ出している。80～84は甕形土器の口縁部である。80は口縁部の断面形状が逆「L」字形の平坦口縁である。口縁直下に１条の三角突帯を張付けているが、丸味をもちシャープさにかける。81も口縁部の断面形状が逆「L」字形の平坦口縁である。口縁直下に１条の三角突帯を張付けているが、突帯はシャープさにかけている。胎土は精選されおり、焼成も良好である。82は逆「L」字形で水平の平坦口縁である。胴部は内傾しつつ口縁に達している。口縁直下に１条の三角突帯を幅狭く低く張付けている。外面は口縁部まで黒変している。外面にはハケ目調整が施されている。83も逆「L」字形で水平の平坦口縁である。口縁直下に１条の三角突帯を幅広く低く張付けている。胎土には多くの石英を含んでいる。84は逆「L」字形口縁である。口縁部は内側に傾いている。口縁直下には１条の三角突帯を幅広く低く張付けている。胎土は粗く石英粒を多く含んでいる。85は壺形土器の肩部片であろうか。薄い三角突帯を２条張付けている。突帯はシャープに仕上げている。胎土は精選され、外面は横位のハケ目調整が施されている。86は口縁部内側にわずかにつまみ出しをもっている。胴部は張らず直線状を呈する。外面が黒変している。87も86と同様に口縁部内側をわずかにつまみ出している。88は壺形土器の口縁部である。口縁部はそのままひらいたままに仕上げている。口唇部の断面形態は「コ」の字形となっている。胎土は精選され、丁寧に調整されていると考えるが磨滅のため不明である。89は甕の底部である。平底である。精選された胎土を使用しているが、土壌のためか剥離



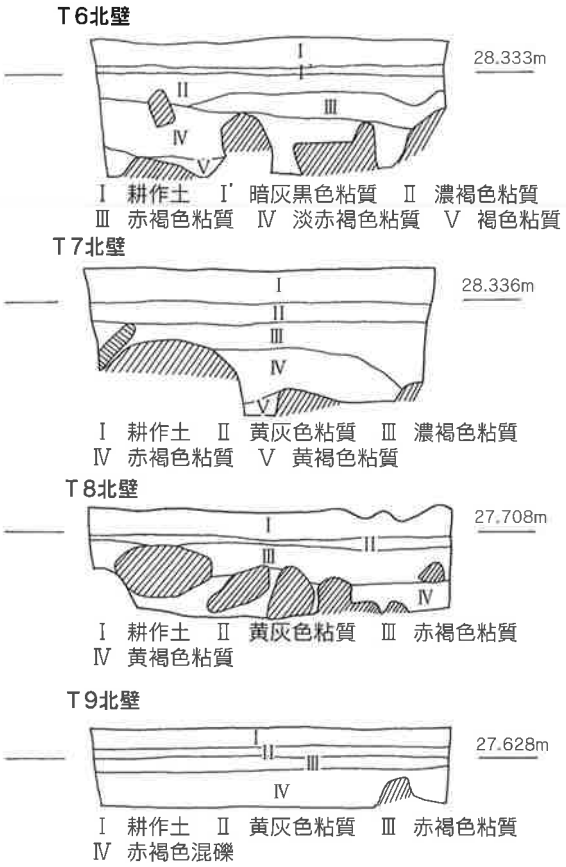
第35図　３次調査区土層図①(1/40)



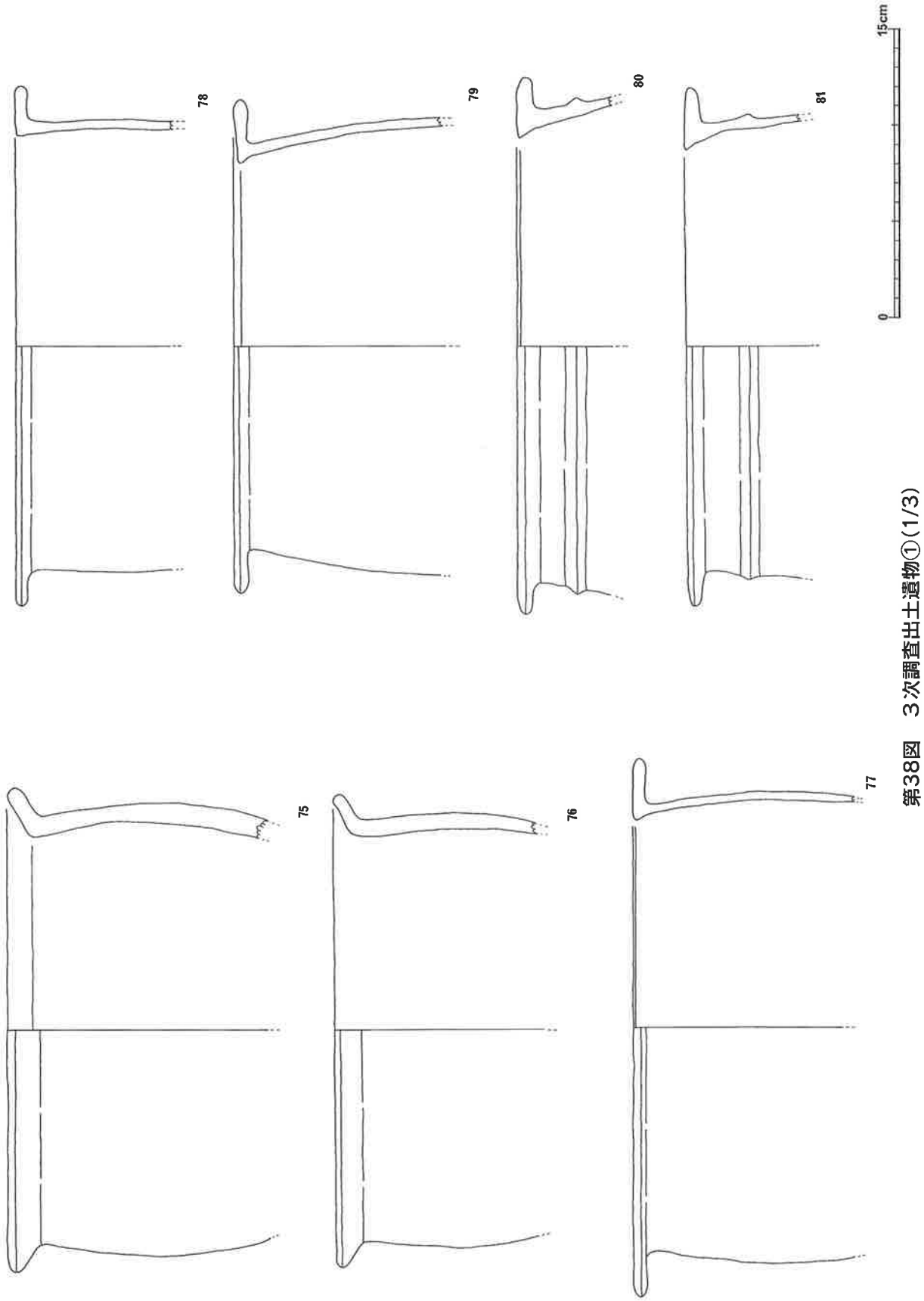
第36図　３次調査区土層図②(1/40)

が著しく調整は不明である。90は輸入陶磁器で、同安窯系青磁碗の口縁部である。口縁部はわずかに外反している。外面体部にヘラ状の施文具により片彫り風の沈線を入れている。

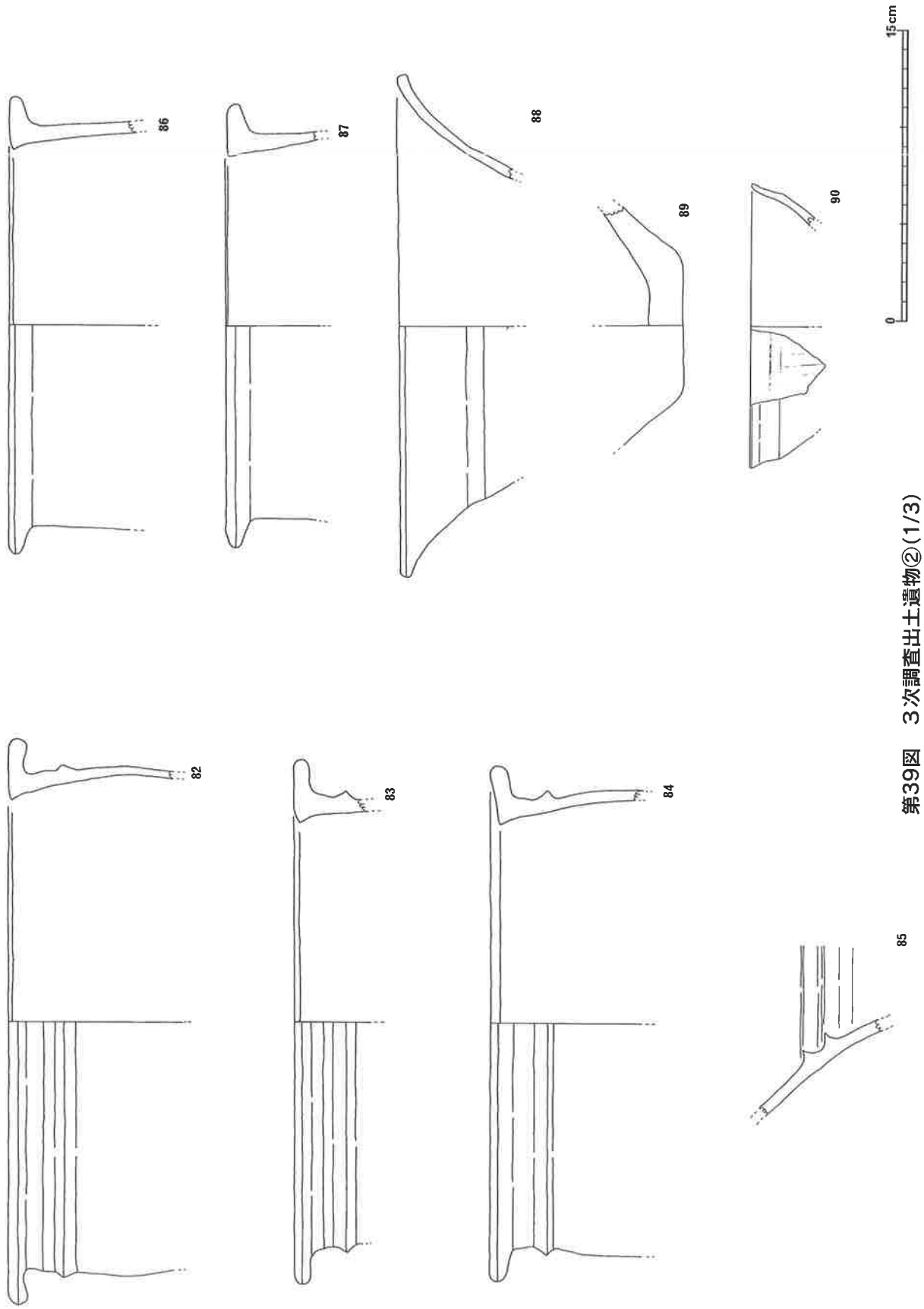
91は滑石製の石錘である。長軸部に溝を一周させるている錘で、裏面は一部傷を受けているが僅かに溝が認められる。



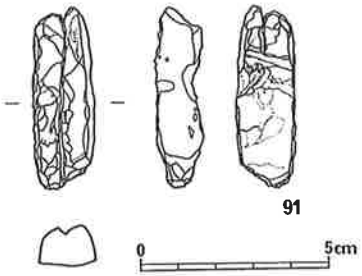
第37図　３次調査区土層図③(1/40)



第38図　３次調査出土遺物①(1/3)



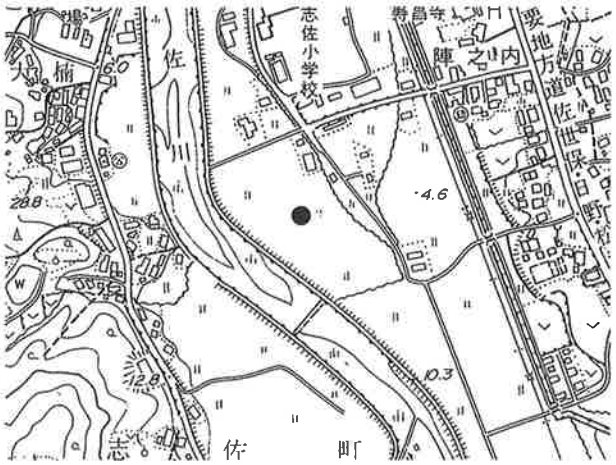
第39図　３次調査出土遺物②（1/3）



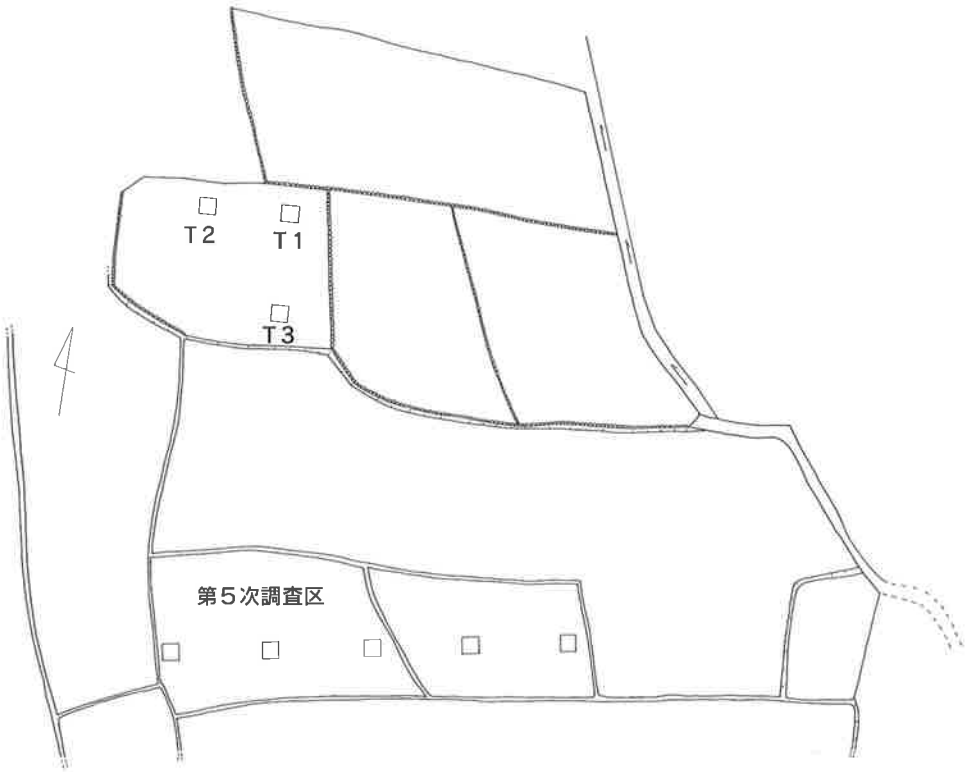
第40図　３次調査出土遺物③（1/2）

３．宮ノ下リ遺跡（第41図～第44図）

立地　市の中心部を北流する志佐川は市内最大の河川で、玄武岩溶岩台地を削って流れ、両岸には第三紀層の丘陵・山麓と河岸段丘が発達している。遺跡が営まれた頃の志佐川は現在よりも川幅が広く、河口付近には三角江状に湾入があり、河道が分流して二又川となっていたと思われている。遺跡はこの二又川を形成していた志佐川の右岸、中洲状の微高地上に位置している。標高は約４ｍから13ｍ



第41図　宮ノ下リ遺跡位置図（1/10,000）

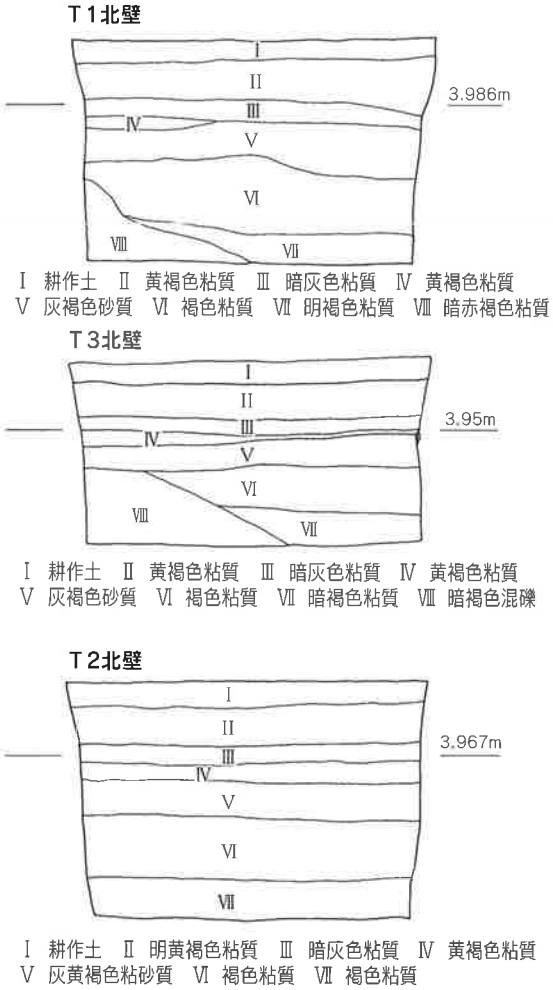


第42図　６次調査区設定図（1/900）

のなだらかな水田地帯にＡ遺跡からＥ遺跡までの５地点に広く分布している。東側の河岸段丘上には遺跡から北東の位置に陣ノ内城跡、東に久保園遺跡がある。志佐川対岸の庄野地区の水田部には庄野の六地蔵塔（天正14年建塔）、南に栢ノ木遺跡が位置している。

調査　今回の調査は個人による圃場整備事業に伴う確認調査で、昭和62年度に県営圃場整備事業に伴う確認調査で発見された５ヵ所の遺跡の内で、最も北側で確認された宮ノ下リＥ遺跡よりもさらに北側の地点、第５次調査の第２区に隣接する地点である。調査は平成14年11月25日から11月29日までの５日間実施し、３ヵ所の調査区を設定した。調査面積は12㎡である。この調査は宮ノ下リ遺跡の第６次調査にあたる。

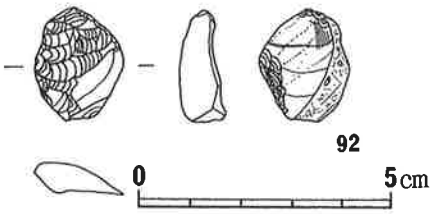
検出遺構　今回の確認調査では遺構などの検出はできなかった。第５次調査においては表土から約40㎝下に茶褐色粘質土の縄文晩期の遺物包含層を確認しているが、今回の調査では包含層の確認ができなかったため宮ノ下リ遺跡の北側の範囲は第５次調査地点までと考えた方が妥当であろう。



第43図　６次調査区土層図（1/40）

出土遺物　調査区からは134点の遺物が出土している。その内訳は黒色黒曜石製剥片・加工痕ある剥片・剥片・砕片、安山岩製石核・剥片・砕片、縄文晩期粗製土器片、弥生土器、土師器、須恵器、近世陶磁器、瓦片である。その内で図示できた遺物は92の１点のみである。

92は不定形剥片で主要剥離面のバルブを除去するために調整加工を施している。背面には自然面を有している。Ｔ２区Ⅵ層出土である。

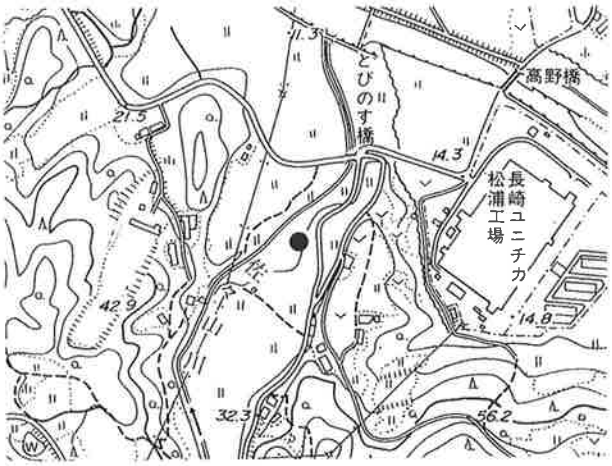


第44図　６次調査出土遺物（2/3）

4．栢ノ木遺跡（第45図～第48図）

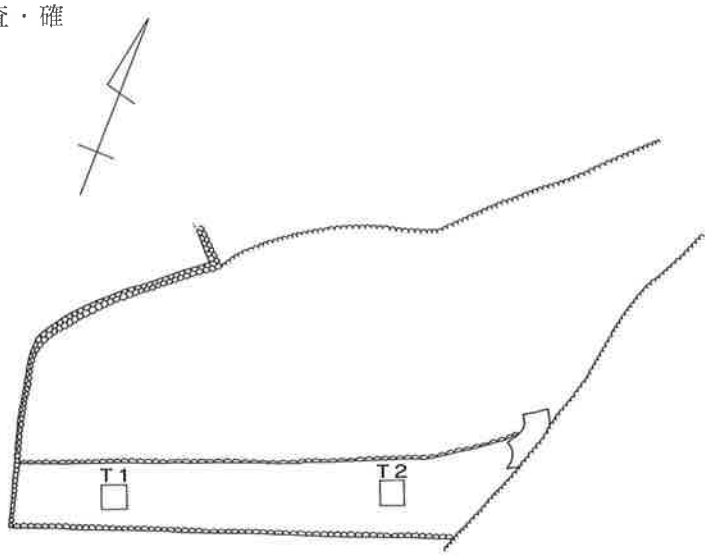
立地　栢ノ木遺跡は市の中心部で、志佐川下流域の左岸と志佐川の支流である佐々山川の流域の水田地帯に位置している。遺跡は東西約600m、南北約900mの広範囲に分布している。志佐川の対岸の沖積平野および河岸段丘上には宮ノ下リ遺跡・久保園遺跡・陣ノ内城跡が立地している。

栢ノ木遺跡は志佐川に隣接しているため、水田耕作に適した地理条件に恵まれている所である。これまで16回におよぶ本調査・確認調査・試掘調査が行われている。



第45図　栢ノ木遺跡配置図（1/10,000）

調査　今回の調査は第16次調査になる。調査地点は佐々山川の右岸の標高約20mの水田である。個人による圃場整備事業に伴う調査で、調査区は２ヵ所設定し、調査は平成14年11月25日と11月26日の２日間実施し、８㎡を調査した。河川に沿って営まれた水田であるため遺物包含層は認められなかったが二次堆積の流れ込みによる遺物が出土している。

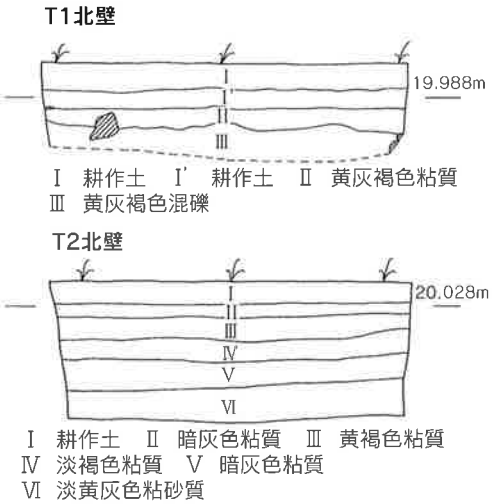


第46図　16次調査区設定図（1/900）

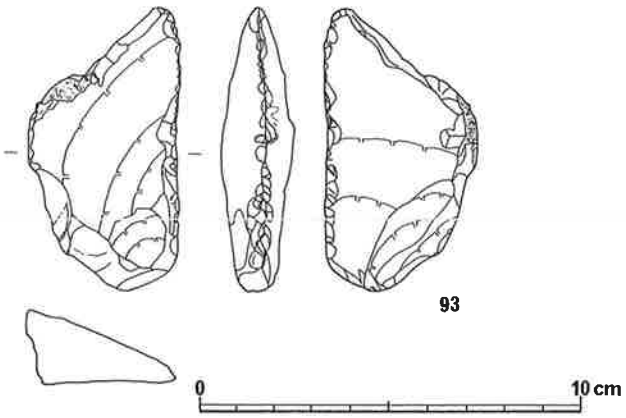
検出遺構　今回の確認調査では遺構の検出はできなかった。

出土遺物　この調査によって出土した遺物は87点であった。遺物には黒色黒曜石製石核・剥片・砕片、安山岩製スクレイパー、安山岩製石核・剥片・砕片、弥生土器、土師器、須恵器、輸入陶磁器、近世から現代の陶磁器がある。特に出土が多かったのがＴ２区　層の暗灰褐色粘質土層からである。その内で図示できたのが93のスクレイパー１点のみである。

93は刃部の調整はわずかにおさえて横長剥片のエッジを利用している。一部に自然面を有している。

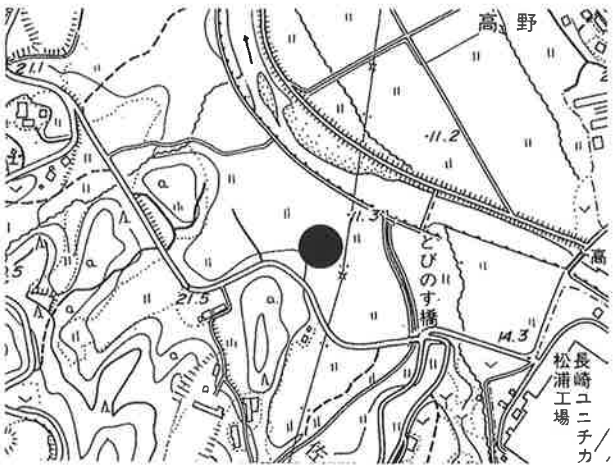


第47図　16次調査区土層図（1/40）



第48図　16次調査出土遺物（1/2）

5．栢ノ木遺跡（第49図～第63図）



第49図　栢ノ木遺跡位置図（1/10,000）

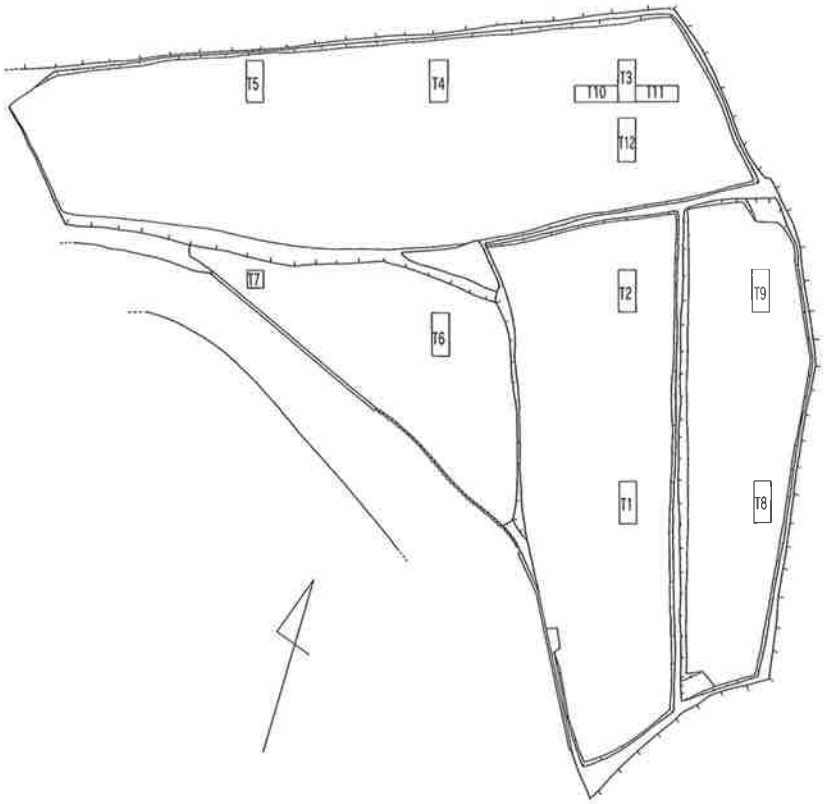
立地　栢ノ木遺跡は市の中心部で、志佐川下流域の左岸と志佐川の支流である佐々山川の流域の水田地帯に位置している。遺跡は東西約600ｍ、南北約900ｍの広範囲に分布している。志佐川の対岸の沖積平野および河岸段丘上には宮ノ下り遺跡・久保園遺跡・陣ノ内城跡が立地している。

栢ノ木遺跡は志佐川に隣接しているため、水田耕作に適した地理条件に恵まれている所である。これまで17回におよぶ本調査・確認調査・試掘調査が行われているが遺跡の中心は、昭和46年に最初の調査が行われた地点の周辺と思われる。箱式石棺墓３基、甕棺墓３基が検出されている。特に２号石棺内からは中国後漢時代の青銅鏡（内行花文鏡）が出土しており、首長クラスの存在がうかがえる遺跡として重要性が指摘されている遺跡である。

調査　今回の調査は第17次調査にあたる。栢ノ木遺跡は将来的にも個人の宅地建築等の開発が懸念されている点と、長崎県重要遺跡になっており、遺跡の範囲を確定するために範囲確認調査を実施している。本年度の調査は昭和46年に調査を行った地点の水田部とその南側の水田部周辺を対象として行った。調査は平成15年２月６日から３月14日までの37日間行った。調査区は５ｍ×２ｍを基本として設定し、最終的に12ヵ所を設けた。調査した面積は114㎡である。

検出遺構　今回の確認調査では甕棺墓２基、石棺墓３基とＴ７区を除く調査区から、掘建柱建物跡の柱穴を４基から多いところで20数基を検出した。Ｔ５区の南側で土壙を１基検出している。

甕棺墓・石棺墓の遺構番号については、昭和46年の調査の中間報告では、甕棺墓が１号から３号まで、石棺墓（石組遺構で報告）が１号から３号まで付してあるのでそのままこれを踏襲して、以下甕棺墓は４号から、石棺墓も４号から付して呼ぶことにした。



第50図　17次調査区設定図（1/900）

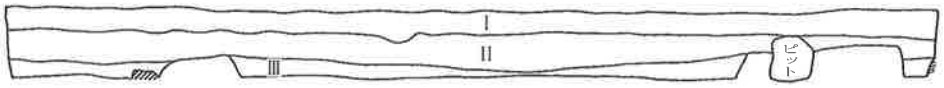
４号石棺墓（第55図）

Ｔ３区のほぼ中央で検出した。石棺の保存状態は良好とはいえず蓋石はすべて耕作時に取り除かれたものと思われる。棺材には玄武岩を使用している。棺身は石棺上面で長径102cm、短径64cm程あり南北にやや長くなっている。深さは床面上位で10cmから13cmを測る。石棺の方位はN20°Wである。西側から南側の側壁石は抜き取られたものと思われる。東側の側壁石は４枚ほどが現存している。北小口部は１枚の使用である。床面には少なくとも５枚から６枚の礫が敷かれている。石材の大きさから壁面の石が倒れたものとは考えられないため、また、後述する同じ形態である５号石棺墓から考えても本来から屍床面としてしかれていたものと考えた方が妥当である。石棺内からは副葬品・人骨の検出はできなかった。石棺の規模から屈葬の形態をなしていると思われる。この石棺に関しては実測後石材の取り上げは行わず現状で保存・埋め戻しをした。

５号石棺墓（付図）

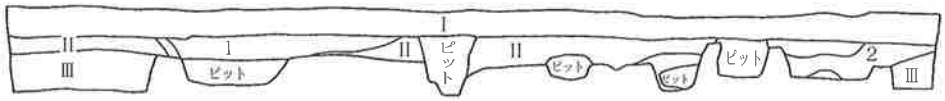
Ｔ３区南側で石棺の一部を検出したため、調査区を西側に拡張してＴ10区とした。石棺の保存状態は良好であるが本来石棺を覆っていた蓋石はすべて耕作時に取り除かれたものと思われ、下部構造のみを検出した。棺身は石棺上面で長径103cm、短径62cmあり、やや東西に長くなっている。深さは約20cm前後と思われ、ほぼ４号石棺墓と同じ規模である。南側の側壁石は土圧により内側方向に倒れている。北側の側壁石は２枚である。小口は両方とも石材の剥離が見られるが各１枚で幅は若干西側が狭くなっている。南側からの土圧を受けているため頭部の位置については今回は避けたいと思う。小

T1東壁



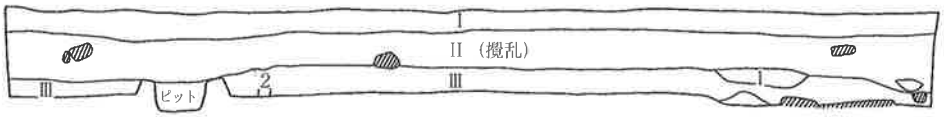
Ⅰ 耕作土 Ⅱ 黄褐色粘質 Ⅲ 茶褐色粘質

T2東壁



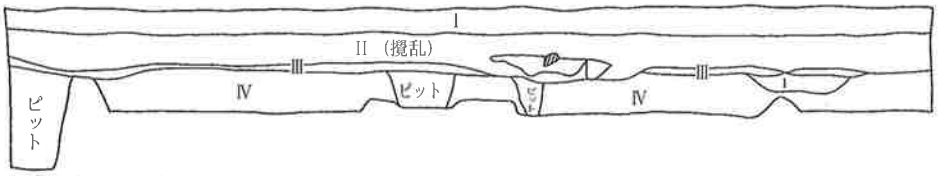
Ⅰ 耕作土 Ⅱ 暗黄褐色粘質 Ⅲ 黄褐色粘質 1 灰褐色粘質 2 淡茶灰色粘質

T3東壁



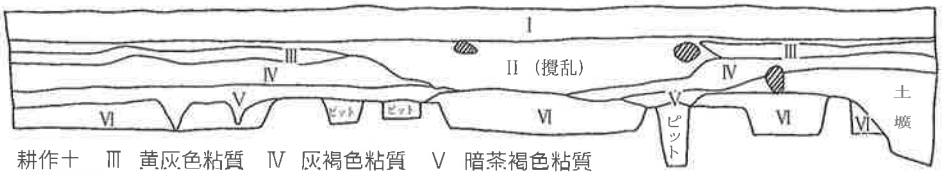
Ⅰ 耕作土 Ⅲ 黄褐色粘質 1 暗灰色粘質 2 灰色粘質

T4東壁



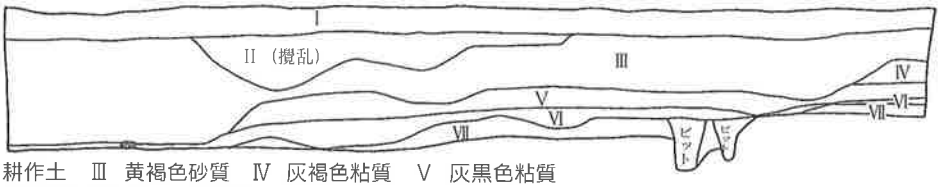
Ⅰ 耕作土 Ⅲ 濃黄褐色粘質 Ⅳ 黄褐色粘質 1 暗灰色粘質

T5東壁



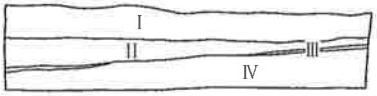
Ⅰ 耕作十 Ⅲ 黄灰色粘質 Ⅳ 灰褐色粘質 Ⅴ 暗茶褐色粘質
Ⅵ 褐色粘質

T6東壁



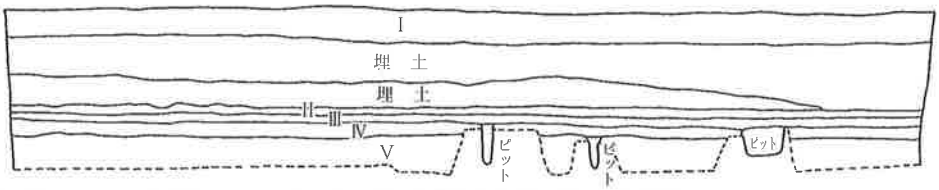
Ⅰ 耕作土 Ⅲ 黄褐色砂質 Ⅳ 灰褐色粘質 Ⅴ 灰黒色粘質
Ⅵ 暗褐色粘質 Ⅶ 褐色粘質

T7東壁



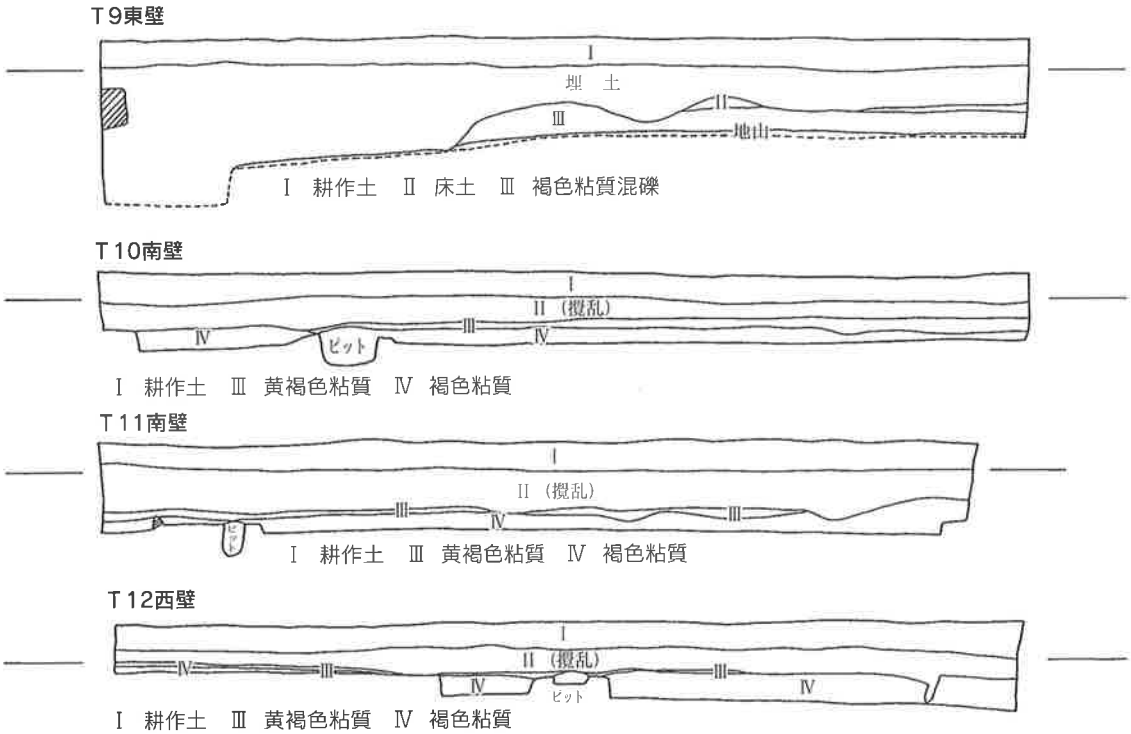
Ⅰ 耕作土 Ⅱ 黄灰色粘砂質 Ⅲ 濃黄褐色粘質 Ⅳ 淡赤褐色粘質

T8東壁



Ⅰ 耕作土 Ⅱ 旧耕作土 Ⅲ 旧床土 Ⅳ 暗茶褐色粘質 Ⅴ 褐色粘質

第51図 17次調査区土層図①(1/40)



第52図　17次調査区土層図②（1/40）

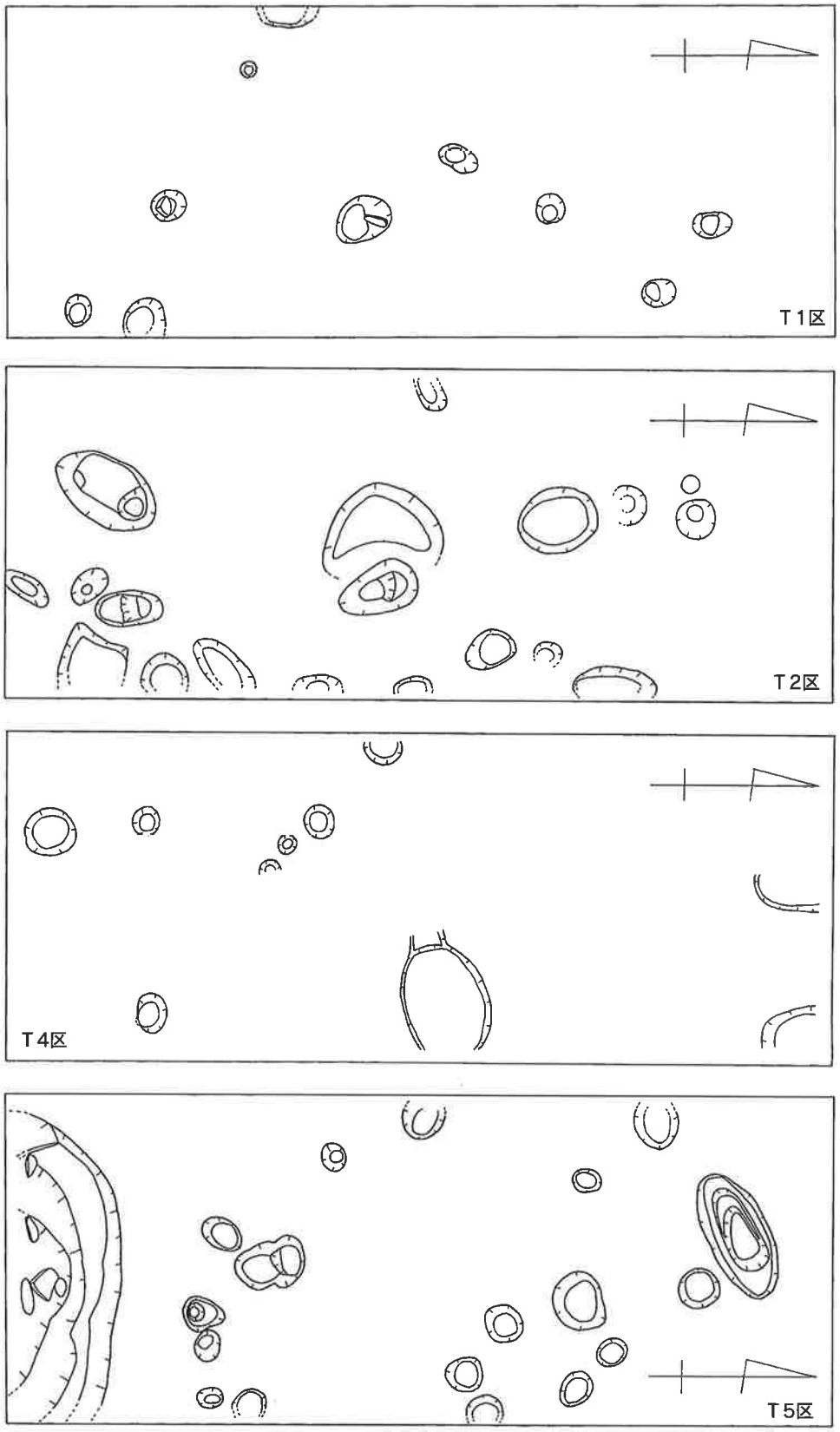
口部は補強されていないが側壁石には補強のための石が配置してあり、床面には一面に礫が敷かれて屍床面をなしている。この５号石棺墓は４号石棺墓より丁寧なつくりである。石棺内からは副葬品・人骨の検出はできなかった。被葬者は屈葬の形態をした小児である可能性がある。石材の取り上げは行わず現状で保存・埋め戻しを行っている。

６号石棺墓（付図）

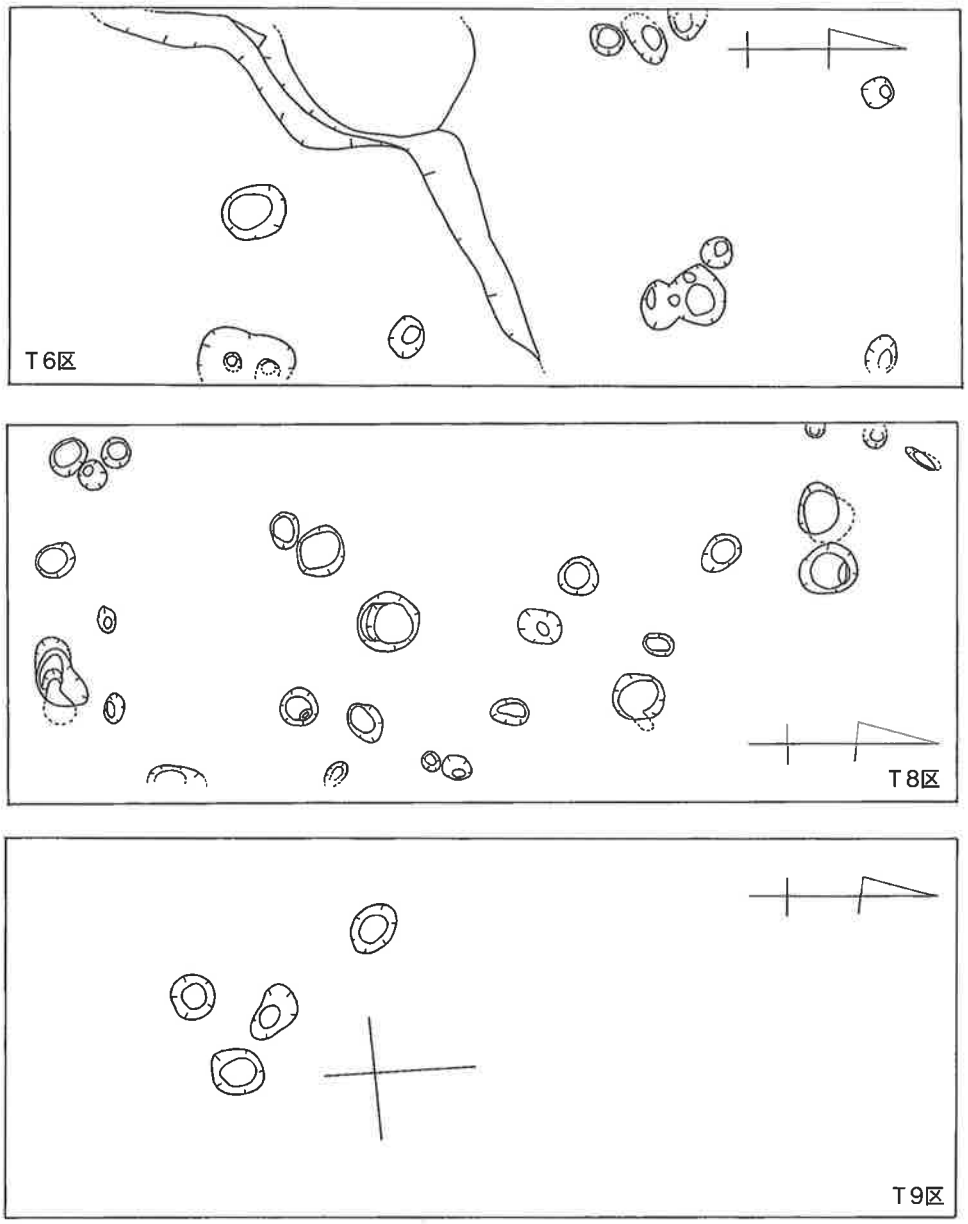
Ｔ３区と一部Ｔ11区にまたがって検出した。一応石棺墓として番号付したが、調査期間の関係で平面プランのみおさえる調査となった。大小５枚の礫（蓋石？）をもち周囲には若干掘り込みが確認されたため小型の石蓋土壙墓の可能性と石棺の屍床面のみが残存した可能性がある。一方、同じような形状の遺構として３号石棺墓があるためここでは即断を避けたい。現状で埋め戻しを行っている。更なる確認調査が必要になってきたようである。

４号甕棺墓（第56図）

今回の調査で最も北側に設定したＴ３区の東側に拡張したＴ11区の西側で４号甕棺墓を検出した。土壙上面は楕円形を呈しており長径94㎝、短径64㎝、深さは23㎝を測り、東側より西側が深くなっている。甕は口縁部分と底部が失われており、胴部の２条の突帯から下位の部分を東側で検出した。単棺で西向きに埋置されていたと思われる。棺内からは副葬品・人骨の検出はできなかった。この甕棺については実測後に取り上げている。



第53図　17次調査遺構配置図①(1/40)



第54図　17次調査遺構配置図②(1/40)

５号甕棺墓（第57図）

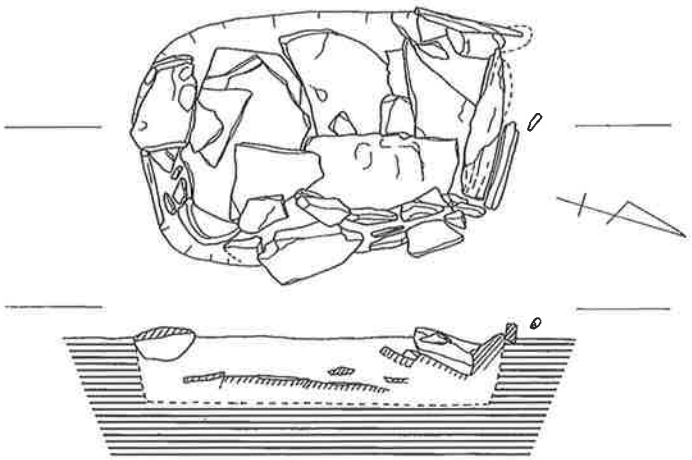
５号甕棺墓はＴ３区の南側に設定したＴ12区の南壁に接して耕作土直下で検出した。土壙上面が削平されていたため、掘り方は不明である。検出した甕は胴部から底部にかけての資料である。この甕棺についても実測後に取り上げている。

土壙（第　図）

Ｔ５区南側隅で検出した。遺構の一部しか調査していないため全体の規模は不明である。深さは約50cm程あり、覆土は暗灰黒褐色粘質土で固く締っている。中より黒曜石製石鏃、黒曜石製石核・剥片・砕片、安山岩製石核・剥片・砕片をあわせて60点、それに229点におよぶ大量の弥生土器片、焼土が出土している。ここでは一応土壙として報告し、将来の調査で遺構の名称も決定したいと思う。

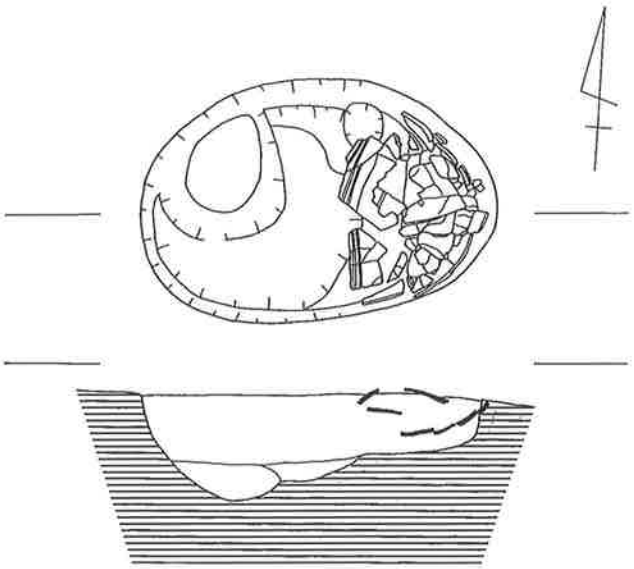
柱穴（第53図～第54図）

掘建柱建物跡を11ヵ所の調査区で検出した。最も西側で標高の高い所に設定したＴ７区の調査区を除くすべての調査区において柱穴を検出することができた。特にＴ８区では27基、Ｔ２区・Ｔ５区では19基を確認している。これらの柱穴の中には黒曜石製剥片・安山岩製剥片、弥生土器、土師器を伴う柱穴も含まれている。



第55図　17次調査４号石棺墓実測図（1/20）

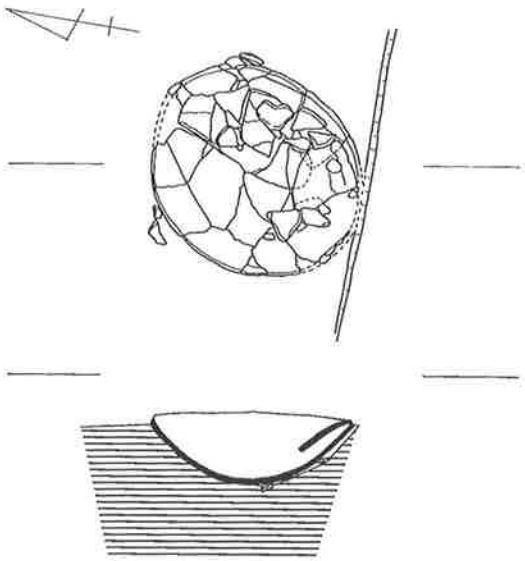
出土遺物　今回の調査によって出土した遺物は総数13,690点であった。調査区全体で出土した遺物には、黒曜石製石鏃12点、黒曜石製石核・剥片・砕片、安山岩製石鏃１点、安山岩製石核・剥片・砕片、灰青色黒曜石製剥片、弥生土器、土師器、須恵器、輸入陶磁器である龍泉窯系青磁碗、白磁碗、天目碗、近世から現代の陶磁器、瓦片などが出土している。その内の石器24点、土器18点の42点を図示した。その中で石鏃は13点、弥生土器は12点である。



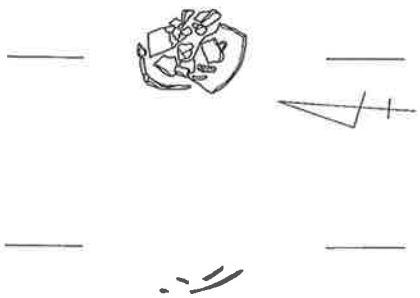
第56図　17次調査４号甕棺墓実測図（1/20）

94は旧石器の資料で安山岩製のナイフ形石器である。縦長剥片を利用し、曲線を呈する刃部を残し、刃潰し加工は二側縁にあり主要剥離面側からブランティング加工が施されている。基部の一部を欠損しているが基部調整は行われていない。刃部の長さが器長に対してほぼ半分を占めている。刃部には使用によると思われる刃こぼれが認められる。95～107は打製石鏃である。96が灰青色黒曜石、102が安山岩製の剥片を利用している。95は出土した石鏃の中では基部の抉りが一番深い。剥離調整も丁寧である。97は両脚部が欠損しており剥離調整も粗く施されている。98は小型の石鏃で、片方の基部と先端部を欠損している。99は基部の抉りが浅く二等辺三角形状を呈している。100も二等辺三角形状を呈しており、刃部には抉り込みを入れている。一部自然面を有している。101は大型の石鏃で平基無茎鏃である。先端部は鋭く作り出されている。102は

主要剥離面側より剥離調整が行われている。基部も直線的になっている。103は小型の石鏃で正三角形状を呈している。104は先端部と両脚部を欠損している。105～107は石鏃の先端部のみの資料である。105は側縁部を鋸歯状に仕上げている。108は石錐である。109・110はスクレイパーである。109は全面に剥離調整がある。110は側縁部に自然面を有している。全体にローリングを受けている。111は方柱状小型石斧である。中央部がわずかにふくらんでおり、４面とも丁寧に研磨されているが刃部を欠損している。112は方柱状片刃石斧である。使用時によるものか刃部の一部と基部を欠損している。表面は風化が著しい。113は全長約20cmを測る大型の磨製石斧である。かなり使い込まれているのか刃部は曲線を描いている。再加工が施されているが、全体に磨滅している。114は打製石斧である。刃部はあまり尖っていない。115はスクレイパーである。横長剥片を利用しており、側縁部は背面から調整剥離が行われている。116は台石と思われる。硬質砂岩の厚手の扁平礫を用いるが半分ほど欠損している。中央部が僅かに凹んでいる。

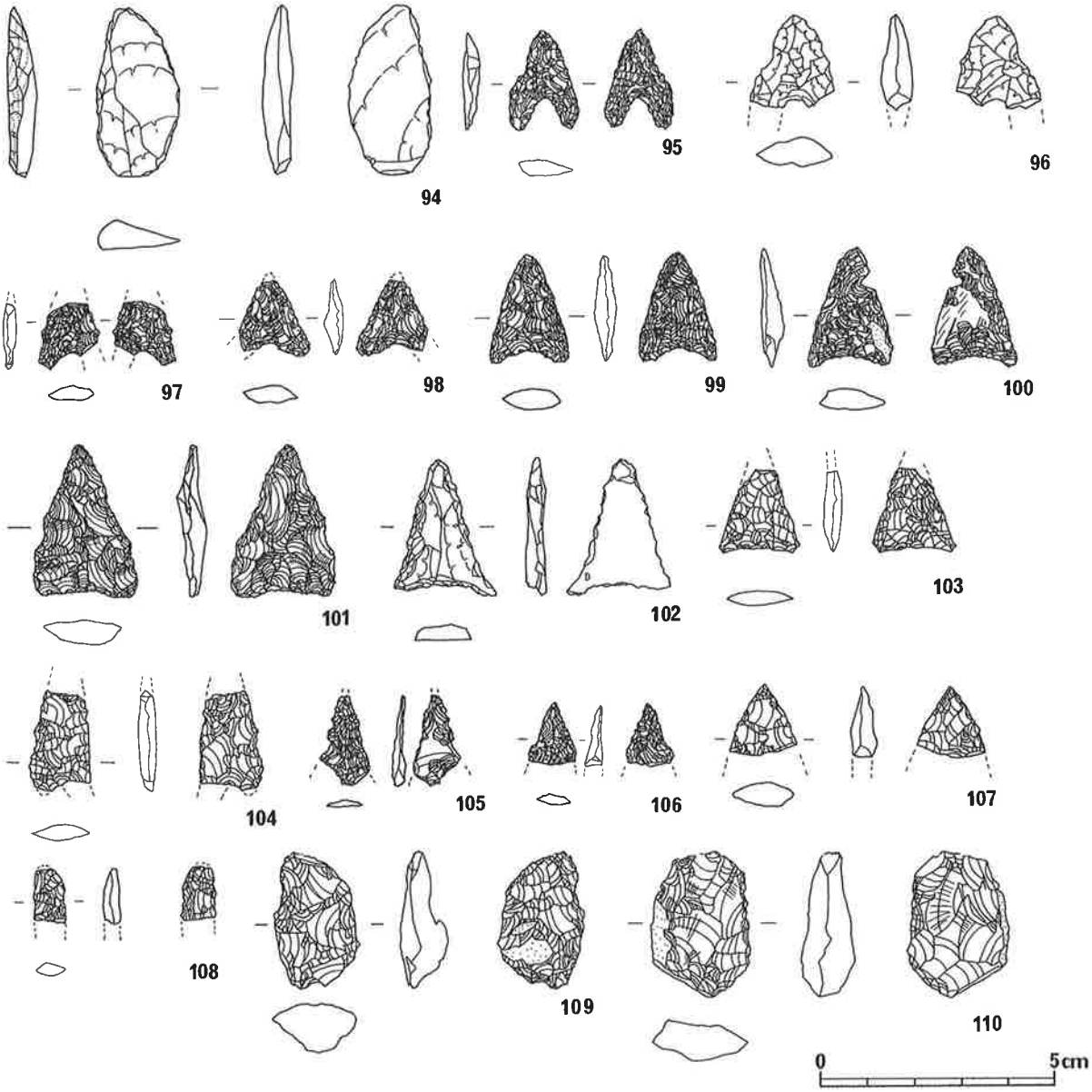


第57図　17次調査５号甕棺墓実測図(1/20)



第58図　17次調査遺物出土状況図(1/20)

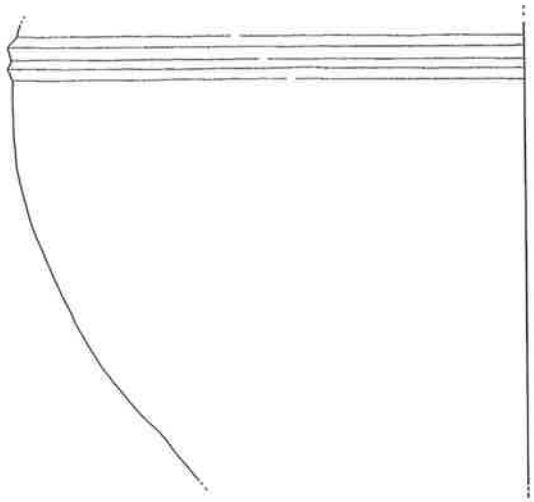
117～128は弥生土器である。123が壺でその他は甕である。117は４号甕棺墓の甕である。半球形の胴部で、２条の三角突帯部分に最大径を有している。口縁部と底部を欠損しているが、胴部から底部にかけては非常に薄く成形している。磨滅が著しく調整痕は不明である。118は５号甕棺墓の甕である。底部は非常に厚くなっており、胴部も均等な厚みを有している。肩部から口縁部を欠損している。最大径を胴部中位に設けており、器面調整はヘラミガキとナデで仕上げている。前期後半の資料であろうか。119は胴部から底部にかけての甕である。Ｔ９区Ⅲ層の褐色粘質土より出土している一括遺物である。数10片に割れていたが口縁部は含まれていなかった。平底で、底部からの立ち上げは直線的で薄く仕上げている。調整は内外面ともナデ仕上げである。120は甕の口縁部である。口縁部下位に１条の突帯を付しているが、磨滅が著しく調整痕は不明である。中期中頃から後半の資料である。121も甕の口縁部である。120と同じで口縁部下位に１条の突帯を貼付けている。器厚は薄い。122も甕の口縁部である。平坦な口縁で口縁部直下に三角突帯が貼付けられているが、すぐ下から欠損しているため

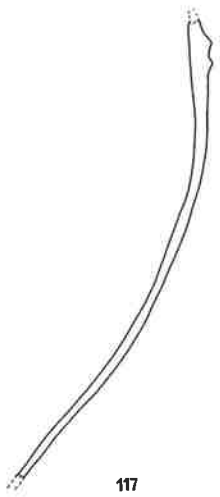


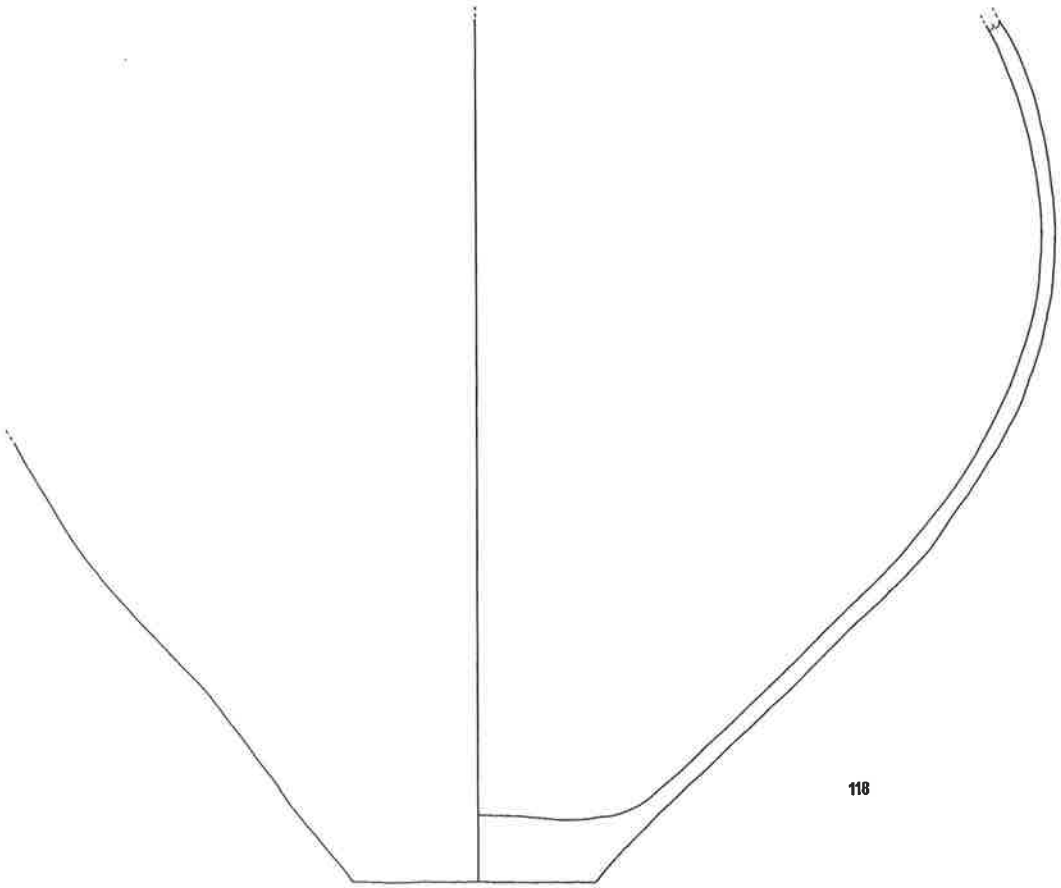
第59図　17次調査出土遺物①(2/3)

条数は不明である。口縁端部をつまみ出し丸くおさめており、器厚は厚い。123は壺の口縁部である。頸部が開き、口縁部が逆「L」字形を呈している。内外面ヨコナデである。124も甕の口縁部である。逆「L」字形口縁はやや下がり気味で１条の突帯を貼付けている。口縁端部は丸くおさめられている。125は甕の口縁部である。口縁部がほぼ平坦で外側にはあまり発達していない。突帯はもたず胴部も張らずに直行している。126は甕の底部である。磨滅しているため調整痕は観察できない。底は上げ底で、立ち上げ部分に較べて極端に薄くなっている。127も甕の底部である。上げ底で立ち上げ部分は薄く仕上げている。128も甕の底部である。平底で、胎土は精選されきめ細かい。ハケ目調整痕がわずかに確認することができる。129は白磁碗である。内面見込みに沈線状の段がついている。外面底部見込みまで一部灰白色の釉が施釉されている。大宰府分類のⅦ類。130は白磁の合子蓋である。外面には菊花弁が陽刻されている。内面天井部には施釉されていない。T12区の柱穴より出土。131

第60図　17次調査出土遺物②（1/3）





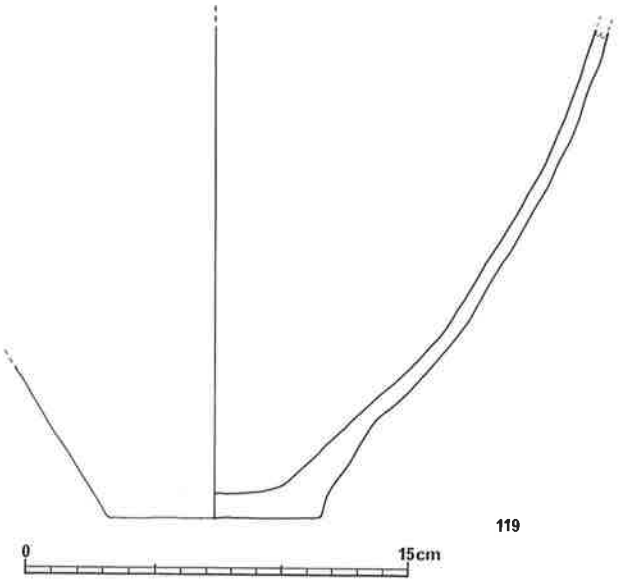


第61図　17次調査出土遺物③（1/4）

は陶器の合子身である。蓋受部と外面下位には施釉されていない。132は龍泉窯系鎬蓮弁文青磁碗である。133は陶器の合子蓋である。外面のみ施釉されており内面には施釉されていない。

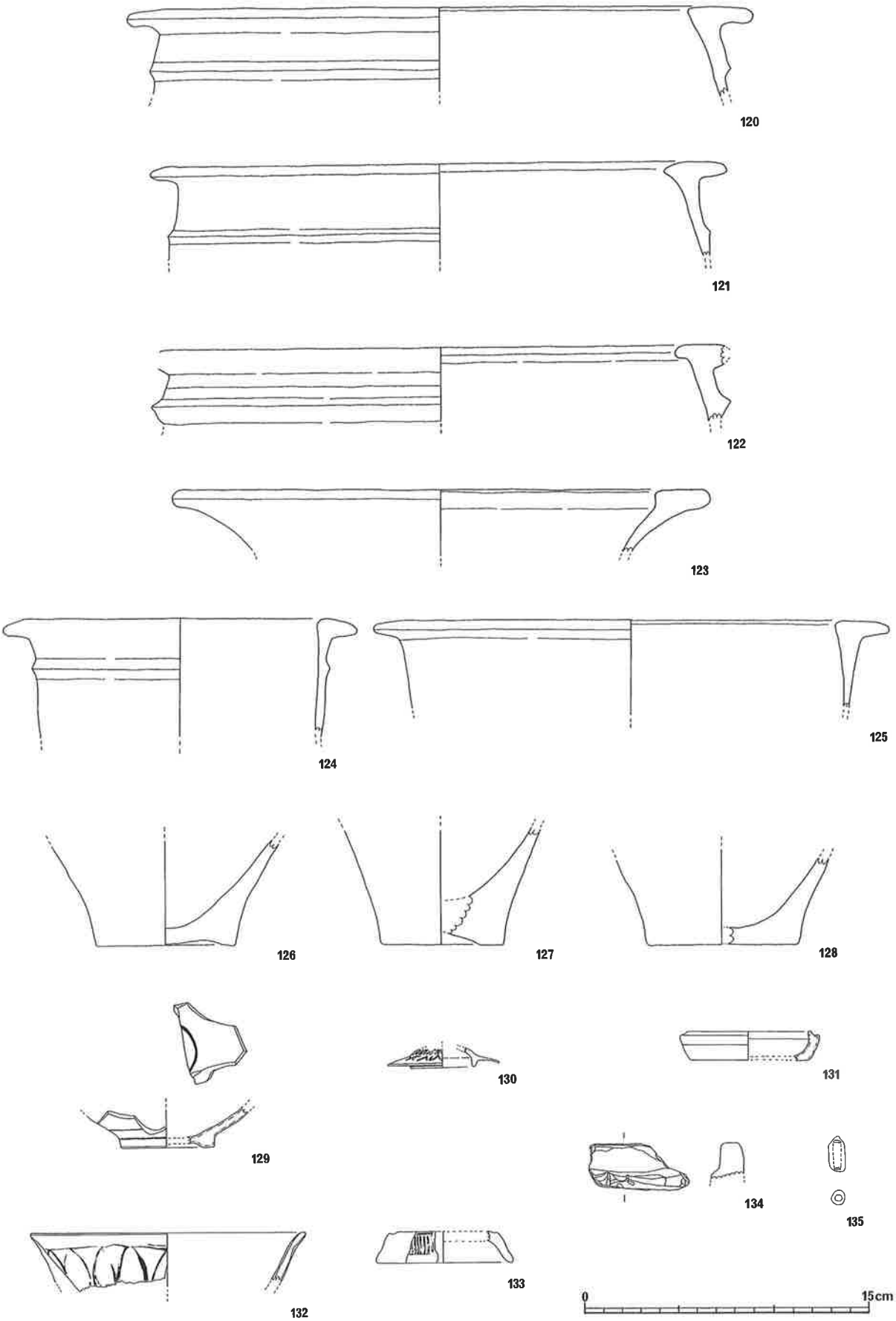
134は滑石製石鍋である。口縁部直下に鍔を持つ石鍋で、口縁直上を平坦に仕上げている。

135 は土錘である。紡錘型を呈している。



第62図　17次調査出土遺物④(1/3)

【参考文献・引用文献】
正林　護　1973　『栢ノ木遺跡（中間報告）』　松浦市教育委員会
横田賢次郎・森田勉　1978　「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」　『九州歴史資料館研究論集４』　九州歴史資料館
橋口達也　1979　「甕棺の編年的研究」　『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』ＸＸＸＩ　福岡県教育委員会
高野晋司編　1982　『中野ノ辻遺跡・里田原遺跡』　田平町文化財調査報告書第１集　田平町教育委員会
安楽勉・中田敦之編　1985　『楼楷田遺跡』　長崎県文化財調査報告書第76集　長崎県教育委員会・松浦市教育委員会
町田利幸編　1992　『中野ノ辻遺跡』　田平町文化財調査報告書第６集　長崎県田平町教育委員会
正林　護　1997　「栢ノ木遺跡」　『原始・古代の長崎県　資料編II』　長崎県教育委員会
荒谷義樹　2000　『午戌遺跡』　伊万里市文化財調査報告書第47集　佐賀県伊万里市教育委員会
馬場聖美編　2001　『里田原遺跡』　田平町文化財調査報告書第８集　長崎県田平町教育委員会
馬場聖美編　2003　『里田原遺跡』　田平町文化財調査報告書第９集　長崎県田平町教育委員会



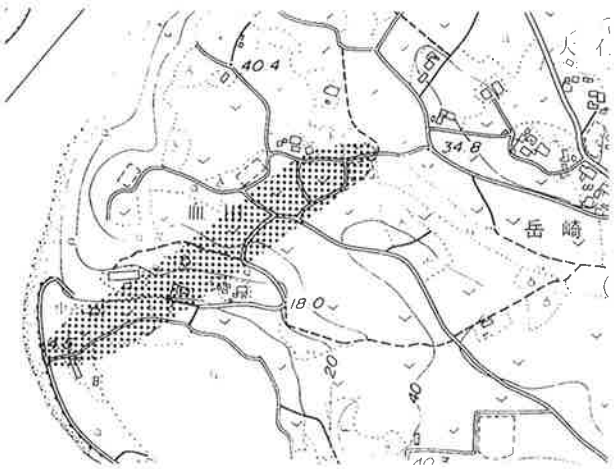
第63図　17次調査出土遺物⑤(1/3)

第Ⅵ章　平成15年度確認調査の概要

国庫補助を受けて確認調査を実施した津崎遺跡・辻ノ尾遺跡・田口高野遺跡・栢ノ木遺跡について、その調査を以下に概説する。

1．津崎遺跡（第64図～第70図）

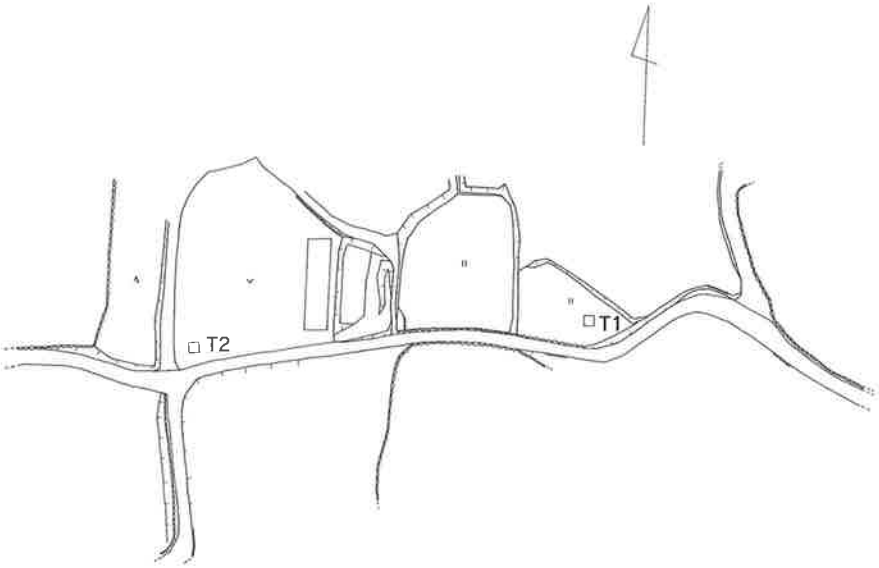
立地　遺跡は市の北西部に位置する星鹿半島の先端部の丘陵地帯の標高約30ｍの地点に分布している。付近一帯は早くから黒曜石の原産地として広く知られており、牟田産黒曜石として周知されており、半島全体が原産地といっていいほどである。津崎遺跡の付近には大石Ａ遺跡・大石Ｂ遺跡・大石Ｃ遺跡・津崎鼻遺跡・津崎鼻Ａ遺跡などが分布している。



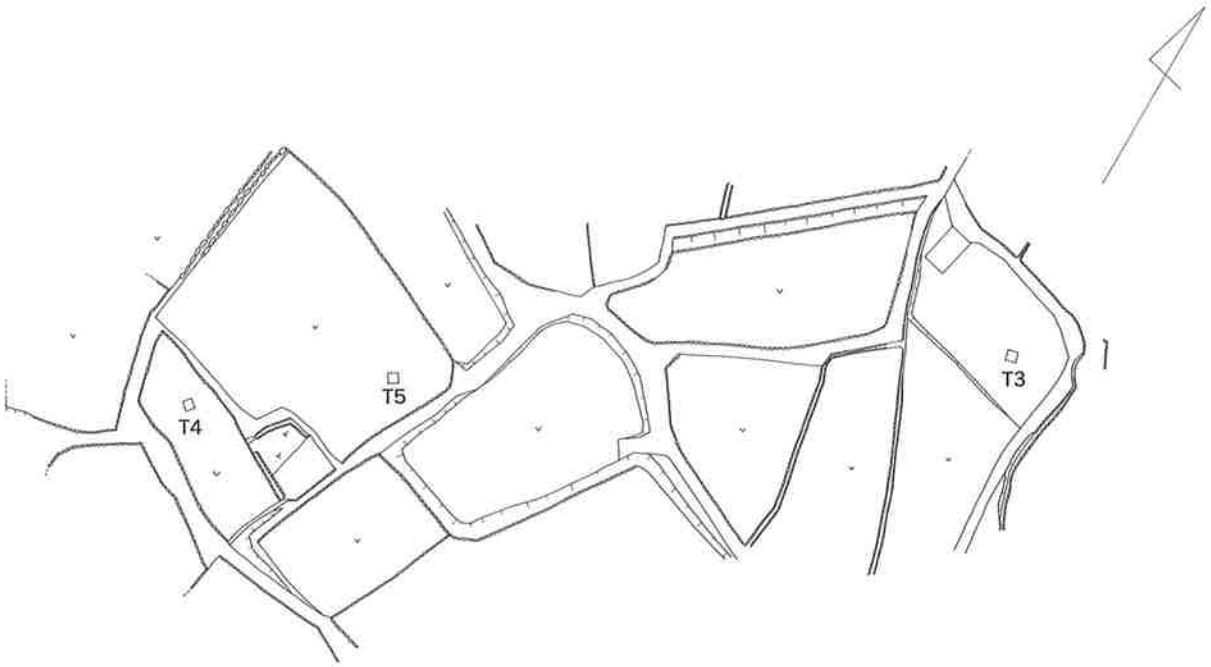
第64図　津崎遺跡位置図（1/10,000）

調査　調査は長崎県の中山間総合整備事業で、松浦市における農道整備に伴う確認調査である。津崎遺跡の範囲の中でも南側の地点にあたっており、確認調査はこの整備事業に伴う道路の路線上に限って実施した。確認調査は、６月16日から７月２日までの17日間行った。調査区は２ｍ×２ｍとし８ヵ所を設定した。なお、Ｔ８区のみ東側へ拡張している。最終的に調査した面積は36㎡であった。今回の調査は平成９年度の農道整備事業に伴う確認調査に続くため第２次調査とした。

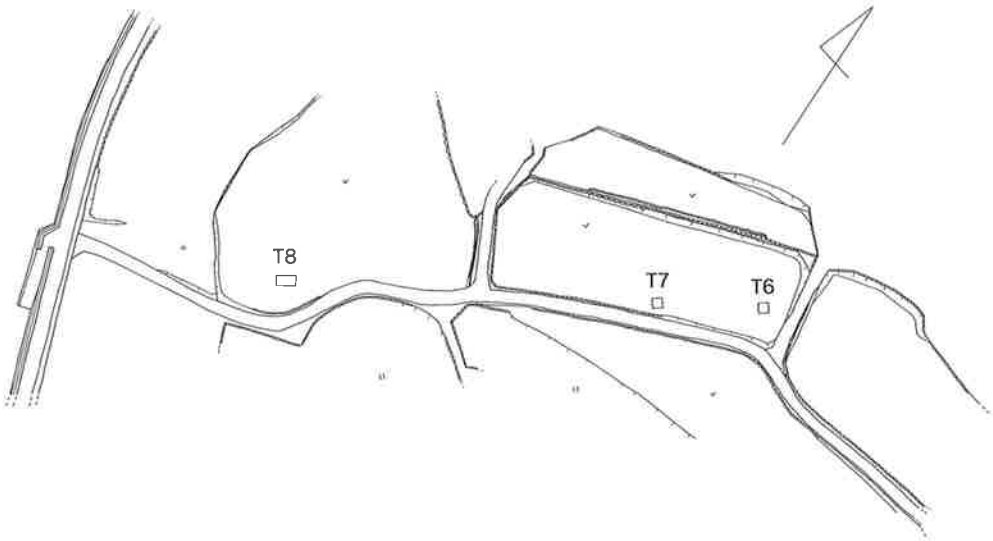
調査はまず道路工事計画地でも標高の高い地点から開始し、順次海岸部に近いところへと調査区の設定を移動させながら行った。



第65図　２次調査区設定図①（1/1,500）



第66図　２次調査区設定図②（1/1,500）

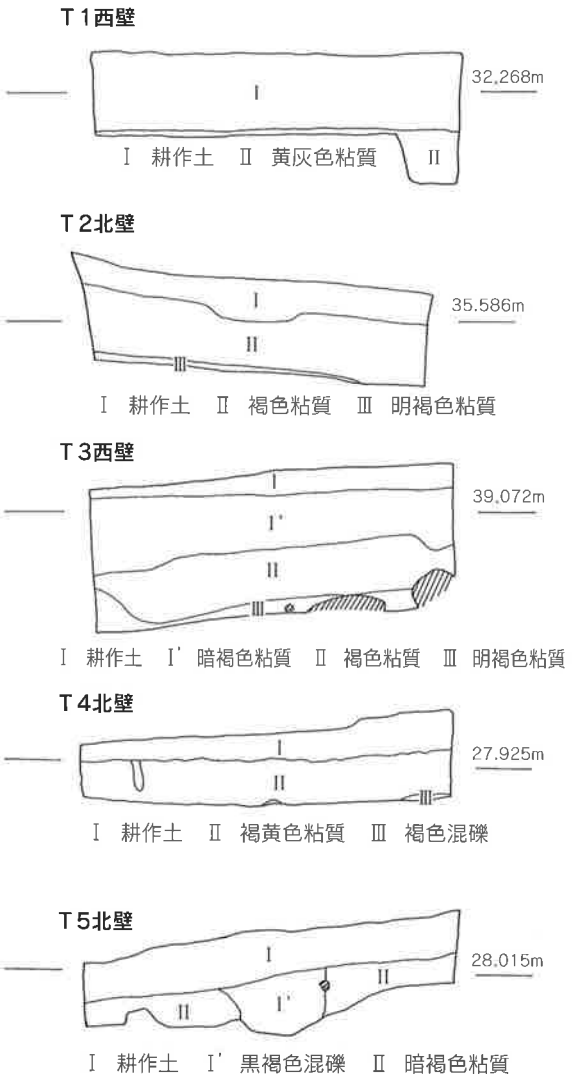


第67図　２次調査区設定図③（1/1,500）

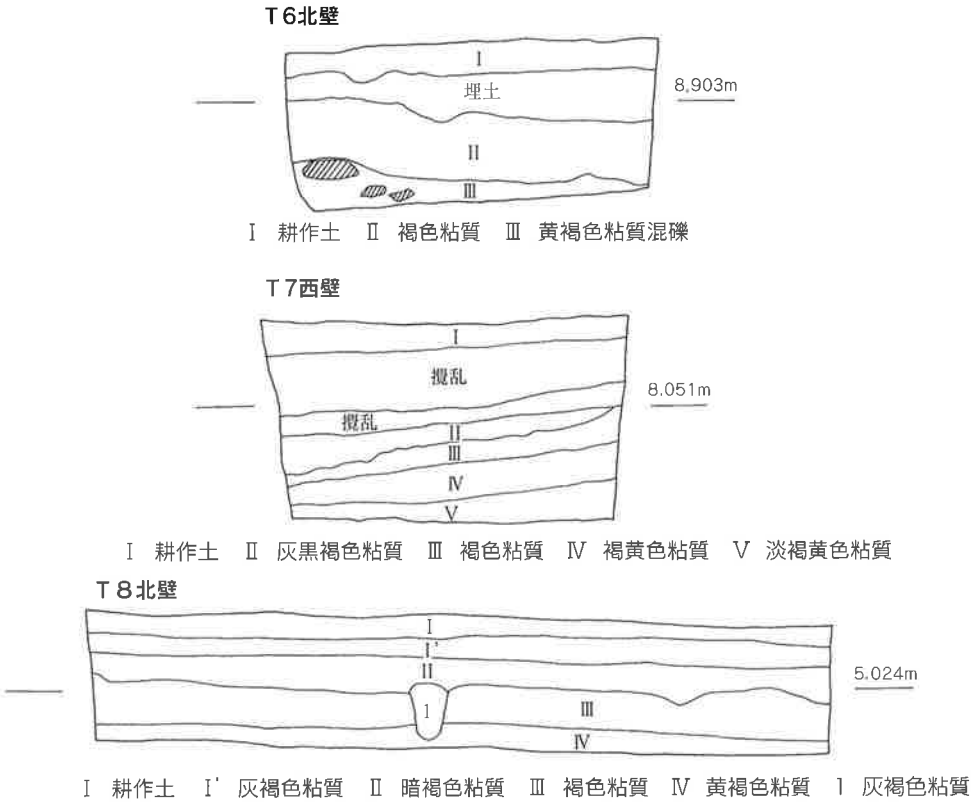
検出遺構　今回の調査ではいずれの調査区からも遺構を検出することはできなかった。Ｔ６区からＴ８区に調査区を設定した畑地からは、以前の分布調査でも須恵器が表面採集されていたため、遺構などの存在が十分予想されていたが、今回の調査では遺構を検出することはできなかった。

出土遺物　今回の第２次調査では238点の遺物が出土している。遺物には、黒色黒曜石製台形石器、黒曜石製石核・原石・剥片・砕片、安山岩製石核・砕片、灰青色黒曜石製石核・剥片、滑石の混入が認められる縄文土器片、須恵器、瓦質土器、近世から現代にかけての陶磁器、瓦片が出土している。この内で図示できた遺物は136と137の２点である。

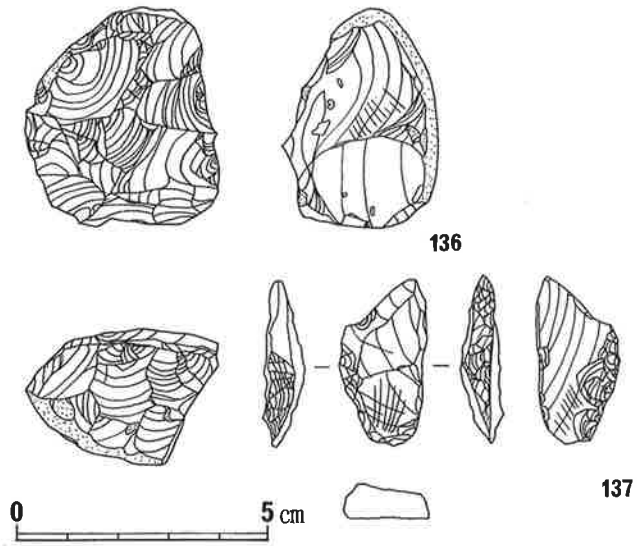
136は星鹿半島一体で表面採集されるのと同じ黒曜石製石核である。拳大の円礫の1/4程度の石核で、打面調整を２回行っている。その後に上端より不定形の剥片剥離を行っている。主要剥離面は自然面に覆われている。表面採集品である。137は黒色黒曜石製台形石器である。斜行する刃部をもち、その刃部に最大幅を有している。調整加工は主要剥離面から両側縁部にブランティング加工が施されている。主要剥離面にも平坦剥離が施されている。全面パティナに覆われている。Ｔ８区Ⅲ層出土である。



第68図　２次調査区土層図①（1/40）



第69図　２次調査区土層図②（1/40）



第70図　２次調査出土遺物（2/3）

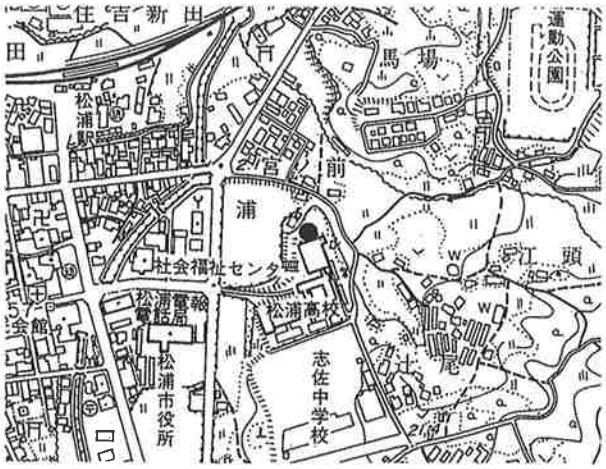
2．辻ノ尾遺跡（第71図～第74図）

立地　辻ノ尾遺跡は、松浦市の中心部の志佐町にある。背後の不老山の西麓は志佐川の河口まで達しており、低い段丘となっている。その志佐川の流れと並行した標高約15ｍから20ｍのゆるやかな舌状台地の先端部に位置している。遺跡の範囲は県立松浦高等学校から市立志佐中学校の敷地一帯に広がっていたものと思われる。遺物は駐車場（元高校体育館）北側の墓地と志佐中学校校舎（元運動場）西側の畑地と墓地周辺で表面採集することができるが、遺跡の包含層はわずかに高校駐車場北側の一区画に旧地形を残しており、しかも包含層の残存は極めて薄く10㎝程度と考えられていた。

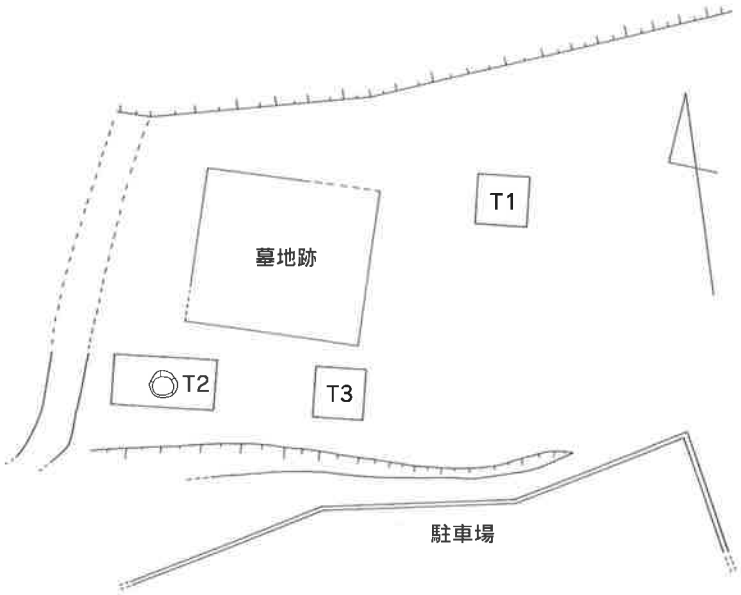
調査　辻ノ尾遺跡の調査は、これまで昭和63年度の志佐中学校校舎改築に伴う確認調査と、平成14年度の土地区画整理事業に伴う確認調査がある。今回の調査はそれに次ぐ第３次調査にあたる。

調査は、平成14年度に確認調査した地点の南側と県立松浦高等学校駐車場との境の旧墓地一帯にあたっている。確認調査は、８月20日から８月25日までの６日間行った。調査区は３ヵ所設定し、Ｔ２区のみ東側に拡張している。最終的に調査した面積は16㎡であった。

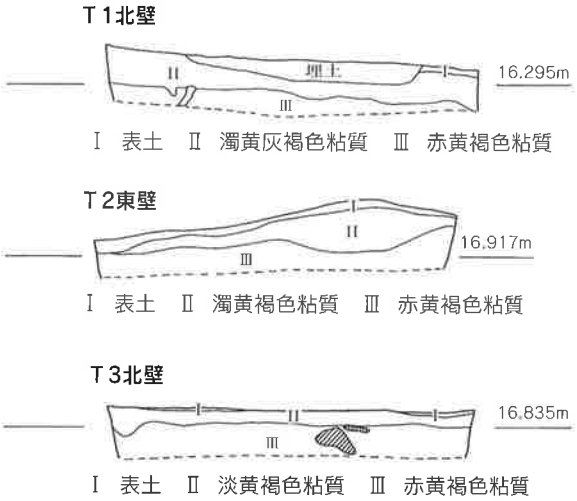
検出遺構　今回の調査ではＴ２区で掘り込み１基を検出した。遺構の上面では東西幅99㎝、南北102㎝のほぼ円形を呈しており深さは52㎝を測る。底面は平坦である。覆土より現代の遺物とともに安山岩製剥片



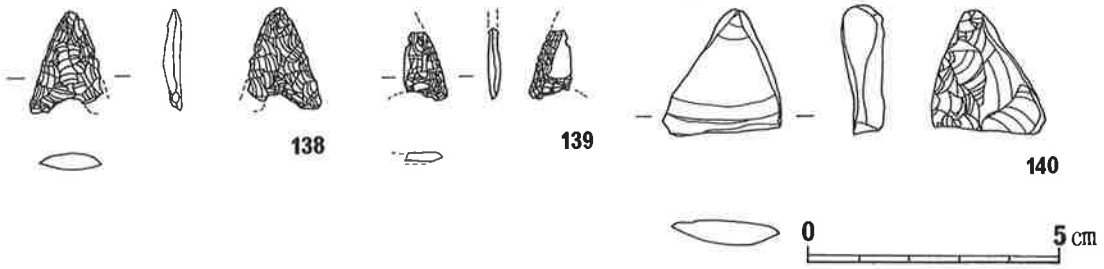
第71図　辻ノ尾遺跡位置図（1/10,000）



第72図　３次調査区設定図（1/300）



第73図　３次調査区土層図（1/40）



第74図　３次調査出土遺物(2/3)

が１点出土している。この遺構についてはかつて市内一帯でよく見られていた畑地の隅に設置されている埋甕の跡ではなかろうかと考えている。

その他に遺構の検出はできなかった。

出土遺物　遺物包含層の確認はできなかったが、調査によって出土した遺物は65点である。その内の３点を図示した。遺物には黒曜石製石鏃、黒曜石製加工痕ある剥片・剥片・砕片、安山岩製石核・剥片・砕片、近代から現代の陶磁器が出土している。

138・139は打製の石鏃で黒色黒曜石を素材としている。138は丁寧な剥離加工を施しており、片方の脚部を欠損している。139は基部の抉入部分を入念に加工しており、刃部も鋸歯状加工を施している。脚部と先端部を欠損している。140は石器の表面のパティナが古いため旧石器の遺物であろうと思われる。二側縁とも彫刀面を作り出している。

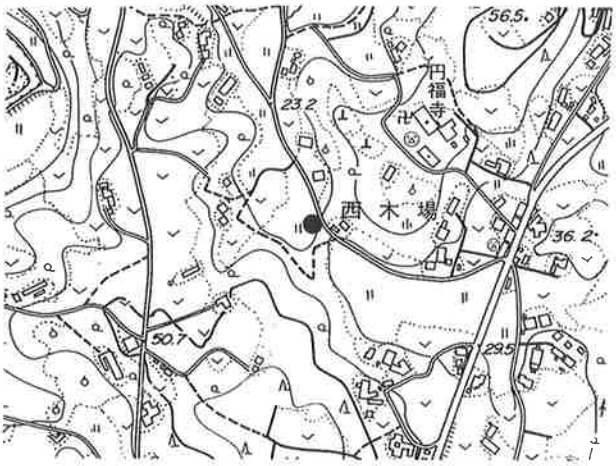
その他の遺物では、この辻ノ尾遺跡にて昭和30年代後半から昭和40年代前半にかけて松浦高校郷土社会部の部員によって遺物が表面採集されており、その中には細石刃・石鏃・加工痕ある剥片などがある。また、同校在任中に来山多助氏が表面採集された遺物も芝本一志・下川達彌両氏によって報告されている。舟底形細石核・細石刃・台形石器がある。さらに昭和59年には下川達彌氏によってナイフ形石器、彫刻刀形石器、細石刃、掻器、三稜尖頭器、石鏃が報告されている。

このように辻ノ尾遺跡からは石器の出土および表面採集の遺物の報告は多いが、現在までのところ土器を発見するまでには至っていない。

【参考文献・引用文献】
松浦高等学校郷土社会部　1965　『松浦考古』創刊号　松浦高等学校
芝本一志　1966　「辻の尾遺跡」　『松浦考古』２号　松浦高等学校
芝本一志・下川達彌　1966　「伊万里湾沿岸における無土器文化」　『古代学研究』　第46号
下川達彌　1984　「長崎県松浦市域における旧石器時代遺跡」　『長崎県北松浦地方の文化』　長崎県立美術博物館

３．田口高野遺跡（第75図～第78図）

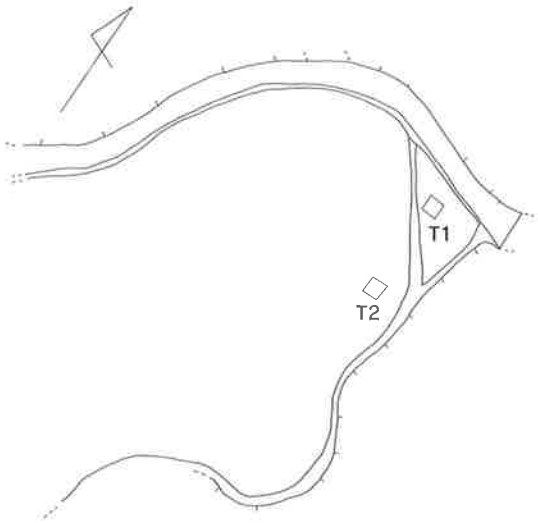
立地　田口高野遺跡は、松浦市の西部御厨町西木場免に所在し、国道204号線と接する市道西木場線の沿線にそった標高約25ｍから35ｍの丘陵上に位置している。遺跡の南西約１㎞の地点には北松浦郡田平町との境をなす坂瀬川が北流している。また、北東へ約800ｍの海岸部の加椎川の河口の水田地帯には縄文後期のドングリ貯蔵穴を検出した下谷遺跡が立地している。



第75図　田口高野遺跡位置図（1/10,000）

調査　田口高野遺跡の調査は、平成８年度に標高約28ｍから30ｍの丘陵上で国営農地再編整備事業に伴う確認調査を行っている。平成12年度には同じ地点で国営農地再編整備事業に伴う記録保存のための発掘調査を実施している。この調査では姶良Ｔｎ火山灰と鬼界アカホヤ火山灰の降灰層準が確認されている。台形石器を主体とする石器群の出土は姶良Ｔｎ火山灰の関連で重要な遺跡として周知されている。

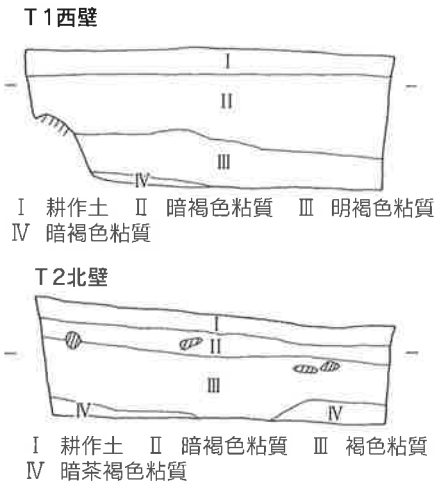
今回の調査は、平成12年度に調査した地点より北西に約100ｍ地点の畑地で、個人の宅地造成に伴う確認調査である。調査は平成16年１月14日から１月26日までの13日間実施し、２ヵ所の調査区を設定した。調査した面積は８㎡である。



第76図　３次調査区設定図（1/600）

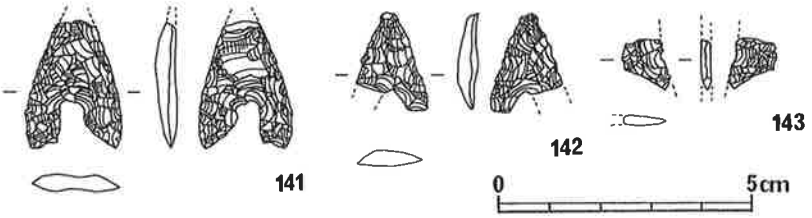
検出遺構　今回の調査では遺構の検出はできなかった。

出土遺物　２ヵ所の調査区から出土した遺物の総数は64点であった。その遺物には黒曜石製石鏃３点、黒曜石製石核・使用痕ある剥片・剥片・砕片・安山岩製剥片・近世から現代までの陶磁器が出土している。64点の出土遺物の内で図示できたものは石鏃の３点である。３点はいずれも黒色黒曜石製で、143は表面採集品である。141と142はＴ２区Ⅱ層からの出土であるが、撹乱を受けている層からの出土である。



第77図　３次調査区土層図（1/40）

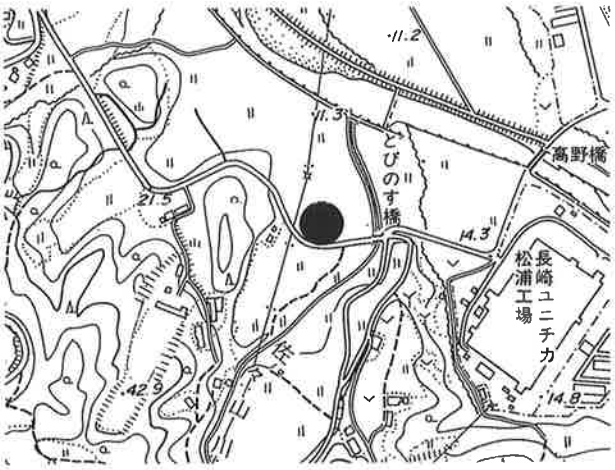
141は先端部を欠損しているが側縁の形がやや曲線を描き、脚部下端が直線を呈し、基部の抉りが深くなるように意図的に剥離調整を施している。両側縁も中央に向かって平坦剥離を施しており加工も丁寧である。142は両脚部と先端部を欠損しているが二等辺三角形状になるタイプである。143は先端部・脚部・基部の一部を欠損している石鏃で、側縁の剥離調整は粗い。



第78図　３次調査出土遺物（2/3）

４．栢ノ木遺跡（第79図～第84図）

立地　栢ノ木遺跡は市の中心部で、志佐川下流域の左岸と志佐川の支流である佐々山川の流域の水田地帯に位置している。遺跡は東西約600ｍ、南北約900ｍの広範囲に分布している。志佐川の対岸の沖積平野および河岸段丘上には宮ノ下り遺跡・久保園遺跡・陣ノ内城跡が立地している。



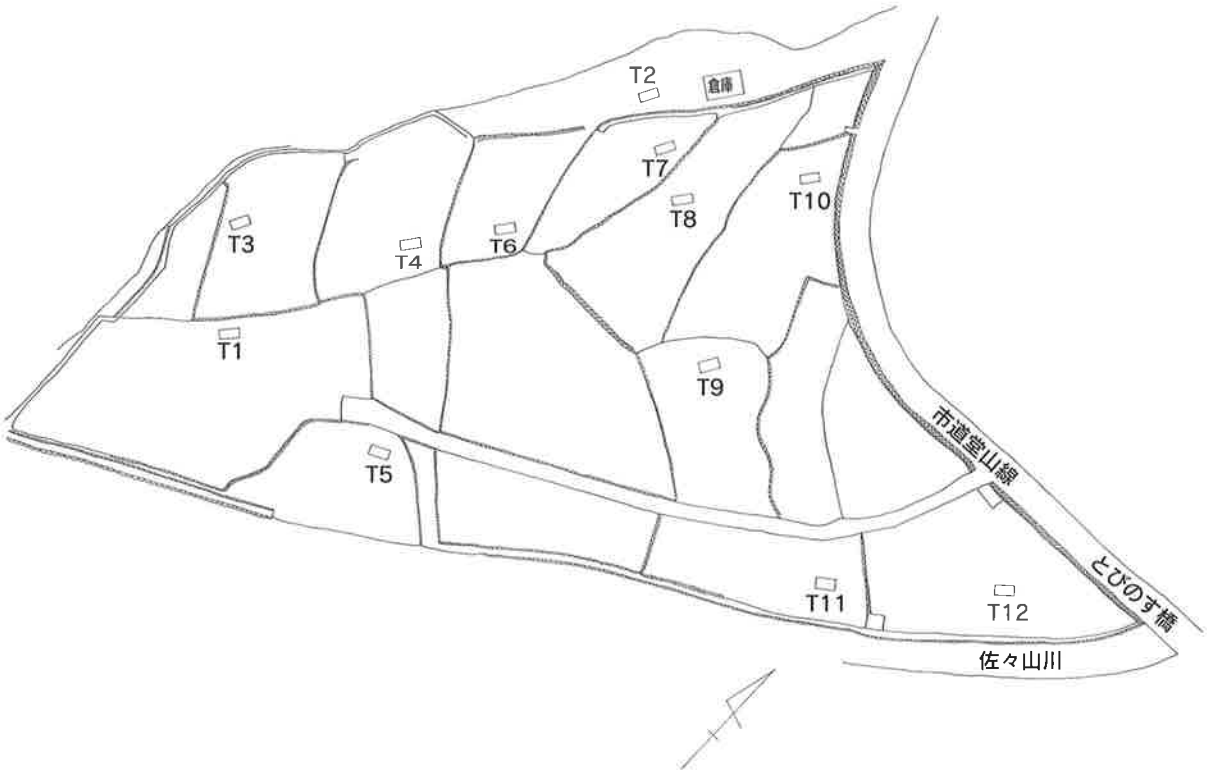
第79図　栢ノ木遺跡位置図（1/10,000）

栢ノ木遺跡は志佐川に隣接しており、水田耕作に適した地理条件に恵まれている所である。これまで18回にわたる調査が行われているが遺跡の中心は、昭和46年に最初の調査が行われた地点周辺と思われる。箱式石棺墓３基、甕棺墓３基が検出されている。特に２号石棺内からは中国後漢時代の青銅鏡である内行花文鏡が出土しており、首長クラスの存在がうかがえる遺跡として重要性が指摘されている遺跡である。

調査　栢ノ木遺跡は将来的にも個人の宅地建築などの開発が懸念されている点と、長崎県重要遺跡になっており、遺跡の範囲を確定するために範囲確認調査を実施している。本年度の調査は平成16年２月24日から３月19日までの25日間行った。今回の栢ノ木遺跡の調査は第18次調査にあたる。

調査は昭和46年に行われた地点から南に約140ｍから250ｍの志佐川に流れる佐々山川の下流域の左岸の水田地帯に12ヵ所の調査区を設定した。今回の調査は栢ノ木遺跡の第18次調査にあたり、平成11年度の農道整備事業に伴う確認調査を実施した第10次調査地点に隣接している地域である。

検出遺構　今回の調査では12ヵ所の調査区を設定したがその内のＴ７区の調査区で、Ⅶ層の灰色粘質土層からⅧ層の灰青色混砂礫層にかけて自然石を利用した配石遺構を１基検出した。検出した遺構はその一部であり遺構自体は周囲に広がっていると思われるが一段低くなった水田部に設定したＴ８区では確認されていない。配石遺構は調査時における一部の礫の抜き取りもあるが、遺構全体の規模

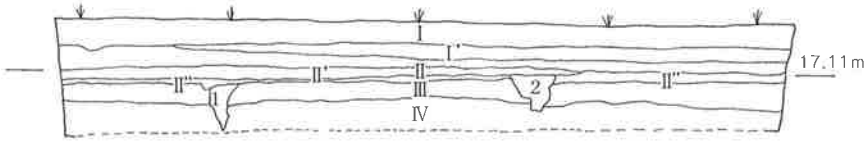


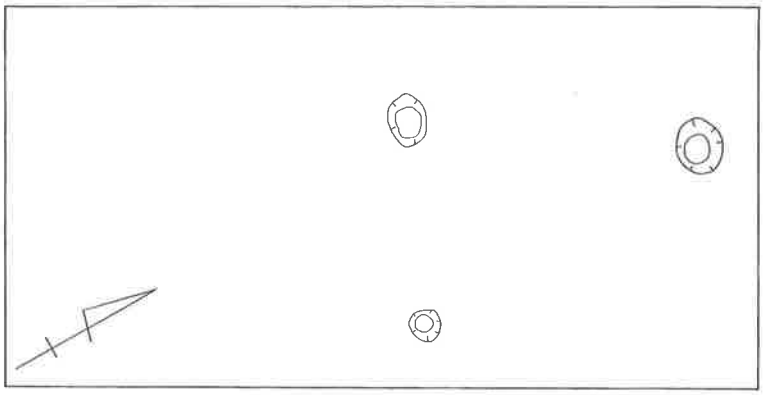
第80図　18次調査区設定図(1/1,500)

は把握できておらず、ただ自然石を敷き詰めたようにしている状況である。類例としては栢ノ木遺跡の第４次・５次調査で同様な石敷遺構が検出されている。また、志佐町白浜免の松浦火力発電所建設に伴う楼楷田遺跡の発掘調査では中世の時期の石敷道路状遺構が検出されている。これらの点を参考にすると今回検出した配石遺構は川へ下るために人工的に敷かれた道に関する遺構であろうと思われる。ただし、遺構を検出した地点は志佐川より約220m、佐々山川より約100m離れている地点で検出したため可能性としては佐々山川へ下るための石敷遺構であろうと思われる。遺構と同時に出土した遺物から６世紀後半頃には、佐々山川が現在地点より西側の丘陵にそって志佐川まで続いていたと思われる。その後、何度となく佐々山川の氾濫および周囲の水田化によって現在地を流れるようになったものであろう。今回の調査でも佐々山川が氾濫を起こした痕跡はＴ５・Ｔ11・Ｔ12区ほかでも確認することができた。

Ｔ２区では柱穴を３基検出している。覆土は灰褐色で、Ⅲ層からⅣ層の赤茶褐色粘質土層にかけて掘り込まれている。柱穴は直径18cmから28cmの大きさであった。炭化物は検出されていない。

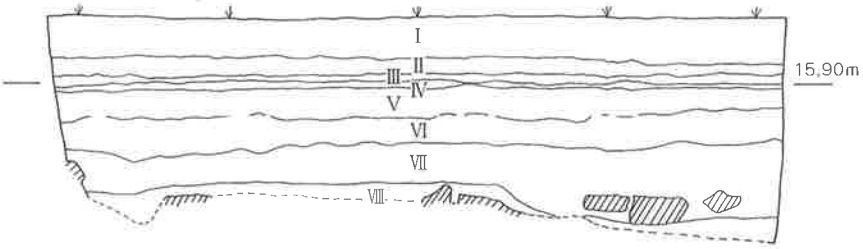
出土遺物　今回の調査によって出土した遺物は1,444点であった。しかし、遺物包含層はＴ２・Ｔ７区の調査区のみで確認できたが、その他の調査区では、河川の氾濫によるものと思われる二次堆積層からの出土であった。調査区全体で出土した遺物には、黒曜石製石鏃６点、黒曜石製石核・剥片・砕片、安山岩製石鏃１点、安山岩製石核・剥片・砕片、灰青色黒曜石製剥片、弥生土器、土師器、須恵器坏蓋・坏身・高坏、輸入陶磁器である龍泉窯系青磁碗、白磁碗、天目碗、近世から現代までの陶

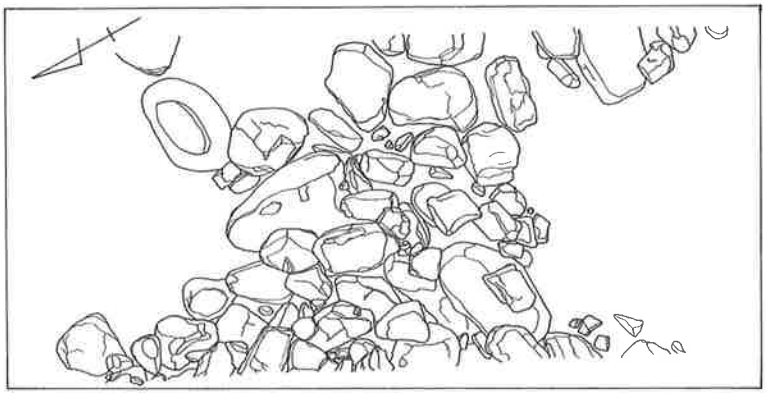




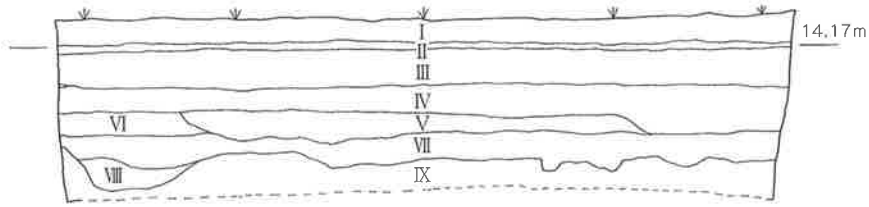
Ｔ２西壁
Ⅰ　灰黒褐色粘質
Ⅰ'　攪乱層
Ⅱ　淡黄褐色に灰色褐色混入
Ⅱ'　淡黄褐色粘質
Ⅱ"　濁黄色粘質
Ⅲ　赤茶褐色粘質に黄色斑点混入
Ⅳ　赤茶褐色粘質

1　灰褐色粘質
2　暗灰褐色粘質

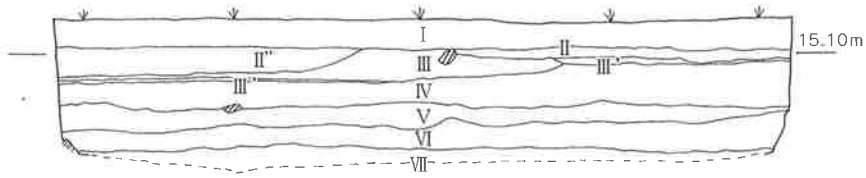




Ｔ７東壁
Ⅰ　灰黒褐色粘質
Ⅱ　濁黄褐色粘質
Ⅲ　灰黄褐色粘質
Ⅳ　濁黄褐色粘質
Ⅴ　灰褐色粘質
Ⅵ　灰白褐色粘質
Ⅶ　灰色粘質
Ⅷ　灰青色混砂礫



Ｔ９西壁
Ⅰ　灰茶褐色粘質
Ⅱ　濁黄褐色粘質
Ⅲ　濁黄茶褐色混礫
Ⅳ　灰褐色粘質
Ⅴ　灰黄褐色粘質
Ⅵ　暗黄灰褐色粘質
Ⅶ　黄灰褐色粘質
Ⅷ　濁黄茶色砂質
Ⅸ　青灰色粘質



Ｔ10東壁
Ⅰ　灰黒褐色粘質
Ⅱ　淡黄褐色粘質
Ⅱ'　濁黄褐色粘質
Ⅱ"　灰黒色に黄褐色混入
Ⅲ　淡灰黄褐色粘質
Ⅲ'　濁黄褐色粘質
Ⅳ　灰褐色粘質
Ⅴ　黄褐色粘質
Ⅵ　黄褐色混礫
Ⅶ　灰緑色混礫

第81図　18次調査区土層・遺構図(1/40)

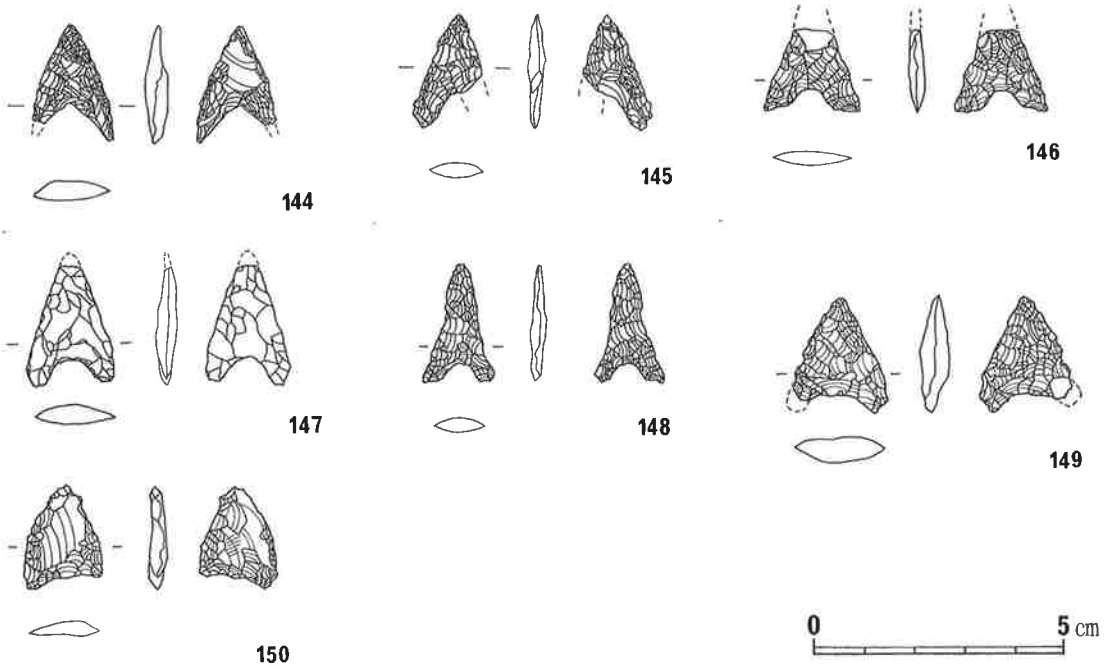
磁器、瓦片などが出土している。この内で図示できたものは石器７点、土器24点である。土器はすべてＴ７区の調査区からで、Ⅴ層の灰褐色粘質土、Ⅵ層の灰白色粘質土、Ⅶ層の灰色粘質土よりの出土である。

144から150は打製石鏃である。146が灰白色黒曜石製、147が安山岩製で、その他はすべて黒色黒曜石製である。144は片方の脚部端を欠損しているが、二等辺三角形状を呈し、基部の抉りも深い。145も脚部の一部を欠損している。146は先端部を欠損しており加工も丁寧である。脚部の先端部分が直線的である。147は先端部を一部欠損している。148は比較的薄手の剥片を利用して二等辺三角形状に調整しており加工も丁寧である。先端部は28度と鋭角に仕上げている。149は基部の抉りも浅く正三角形状を呈している。150も基部の抉りが浅い。側縁部と基部のみに加工が施されているため石鏃の未製品の可能性もある。

151から155は弥生土器である。151は甕である。逆「L」字形の口縁になるもので、外側へ強く張り出し、内側へ小さくつまみ出した形状を呈している。口縁部は平坦である。中期前半から中期中頃のものであろう。152は壺である。内部に突き出す鋤先状を呈している。内外面ともナデ調整である。中期中頃のものであろう。153も壺である。内部に突き出す鋤先状を成しており、152より突き出しは強い。内外面ナデ調整、胎土には大量の石英を含んでいる。磨滅が著しいため調整は不明である。154は甕の底部である。ハケ目調整後にナデ消している。中期中頃のものであろう。155は高坏である。坏底部と小形の脚の部分が付くもので、坏底部からゆるやかに開き気味に伸びる裾部をもつものである。脚筒内部はヘラケズリ後にハケ目調整されている。外面はハケ目の上からナデている。内外面とも丹塗りが施されていたのであろうか。一部にその痕跡が認められる。胎土は精選されきめ細かい。焼成も良好である。古式土師器に含まれるものであろうか。

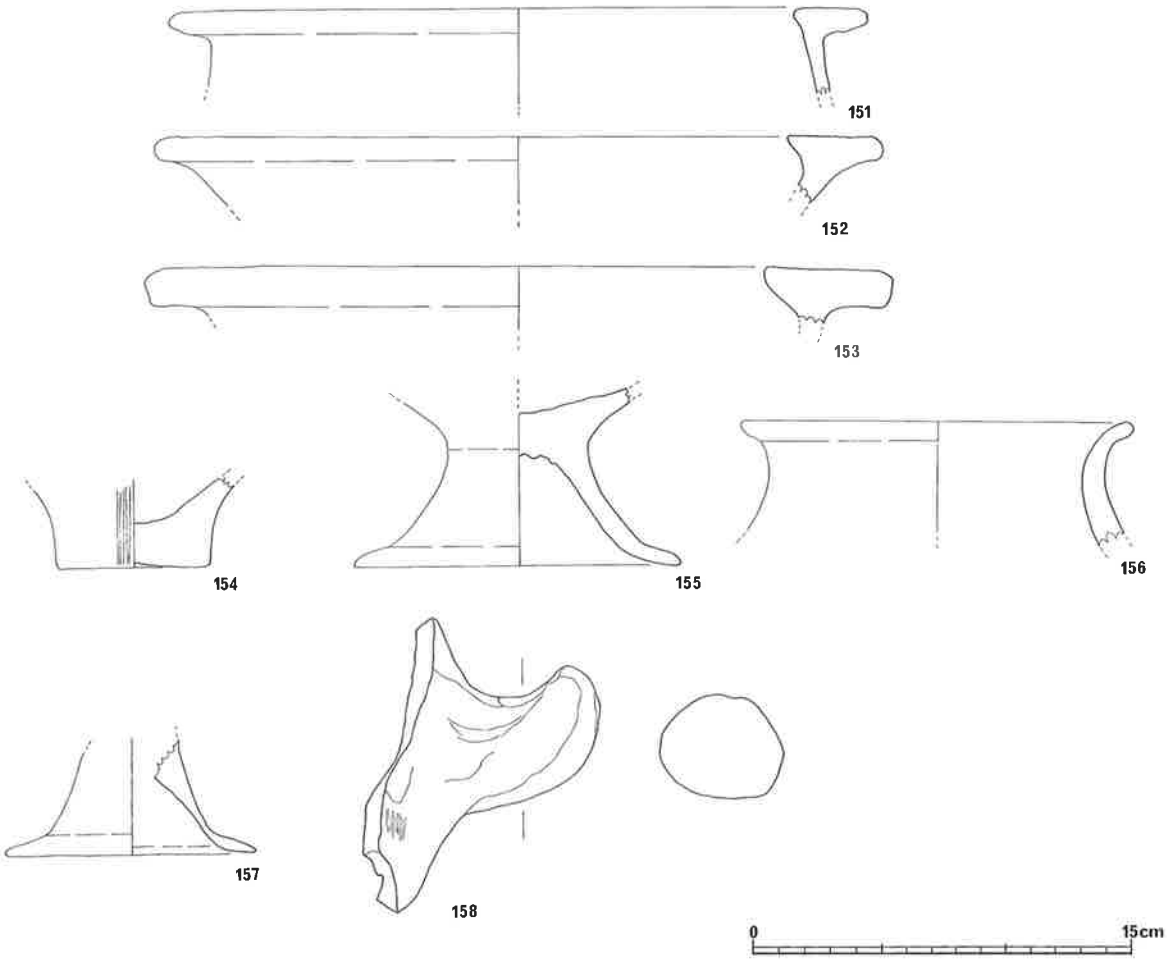
156から160は土師器である。156は甕の口縁部である。外反する口縁部の小破片で、胴部は欠損している。厚めの胴部から薄くなりつつ外反する口縁部が伸び、口縁端部は丸くおさめ外方にわずかにふくらませ気味にしている。外面には横方向へハケ目が残るがヨコナデで消している。157は高坏の脚部である。坏底部から開き気味に伸びるやや小形の脚をもっている。裾部はゆるやかに開いている。内外面ともヨコナデで仕上げている。胎土は精選されきめ細かい。茶色の粒子を含んでおり、焼成も良い。158は甑の把手である。内面はヘラケズリで、把手はあまり尖らず下端が内湾し指による調整が行われている。外面は縦方向へハケ目が残るがナデで消している。断面は扁球形である。159から162は身受けのかえりをもたない坏蓋である。159・160の形態は須恵器に似せているが。焼成・手法ともに土師器のものであり、いわゆる「擬須恵土師器」である。159は外面天井部にヘラ記号がはいっている。内面はナデ調整で、天井部には指頭痕が残っている。160は赤褐色軟粗質の坏蓋である。口縁部付近と内面は回転ナデ調整である。

171を除く161から174は須恵器である。163から167はかえりをもつもので坏身である。蓋受けの立ち上りが８㎜以内と低い器形である。161は坏蓋である。擬宝珠状というより扁平な釦状に近いつまみを有し、中央部はやや突起する。稜は角がとれ丸味をもっている。身受けかえりを有する坏蓋



第82図　18次調査出土遺物①(2/3)

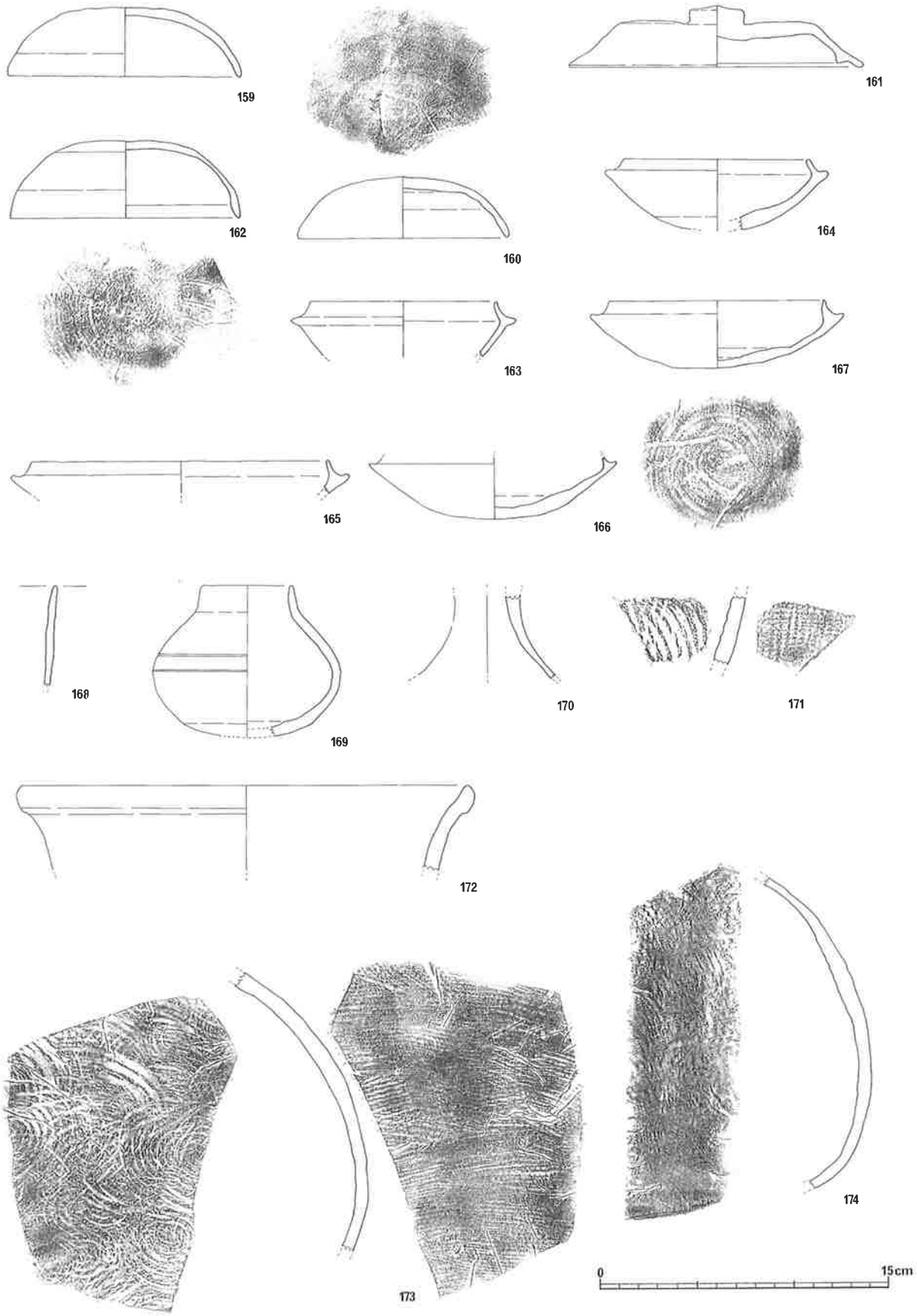
である。外面天井部は回転ヘラケズリ、他は回転ナデ調整である。162も坏蓋である。左回転で平坦な天井部から屈曲して丸味を帯ながら口唇部へと続くもので、天井部は回転ヘラケズリをし、口縁部付近では回転ヘラケズリ後にナデ調整をしている。外面天井部にヘラ記号がある。内面はナデ調整である。163はかえりの立ち上りが短く内傾する。口縁端に至るほど薄く仕上げている。かえり部と胴部の境は、内面でも明瞭な稜線がめぐる。内外面とも回転ヨコナデである。164はかえりの立ち上りが163より短く内傾する。かえり部と胴部の内面の境は明瞭でない。165はかえりの立ち上りが短く内傾し、薄手である。口縁端部はやや尖らせている。166はかえりの立ち上りが短く内傾し、かえり部と胴部の内面の境は明瞭でない。回転ヘラケズリは1/2程度の範囲に施されている。底部にはヘラ記号がある。167はかえりの立上りはやや直立気味でわずかに外反している。かえり部と胴部の境は、内面でも明瞭でない。回転ヘラケズリは底部から1/3程までに施されている。168は直線的にやや外方へ開く口縁部の資料である。器種については不明である。169は直口する壺であろうか。口縁部は短く直口する。口縁端部は丸く仕上げられる。肩部はなで肩である。底部は回転ヘラケズリを施し、丸底に仕上げている。調整は外面底部のヘラケズリ以外は回転ナデを施している。外面には自然釉がかかっている。170は高坏である。小形の脚で、筒部から開き気味に裾部にかけて伸びている。外面回転ナデ仕上げで、内外面には一部自然釉がかかっている。171は土師器の甕の胴部片である。外面に連節平行条線文叩き、内面に同心円文の当て具痕が残っている。172は甕の口縁部である。口縁部は外反し、端部が脹らんだ形態を呈している。口縁直下にはヘラ記号がある。調整は内外面とも回転ヨコナデである。173は甕の胴部片である。内面には同心円文の当て具痕が残っているが、下位は一部ナデ消している。174も甕の胴部片である。外面が細かい平行条線文叩き、内面は同心円文の当て具痕が残る。出土している須恵器ではⅢB期からⅣ期で、絶対年代としては６世紀後半から７世紀初



第83図　18次調査出土遺物②(1/3)

頭を主体としているようである。

【参考文献・引用文献】
正林　護　1973　『栢ノ木遺跡（中間報告）』　松浦市教育委員会
宮井善朗　1989　『羽根戸古墳群』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第198集　福岡市教育委員会
石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白石太一郎編　1991　『古墳時代の研究６　土師器と須恵器』　雄山閣出版
舟山良一・平田定幸　1993　「牛頸」　『季刊考古学第42号』　雄山閣出版
萩原博文・加藤有重編　1993　『山口古墳　長崎県平戸市度島所在』　山口古墳調査会
正林　護　1997　「栢ノ木遺跡」　『原始・古代の長崎県　資料編Ⅱ』　長崎県教育委員会
中田敦之・明石拡子編　2001　『田口高野遺跡』　松浦市文化財調査報告書第17集　松浦市教育委員会



第84図　18次調査出土遺物③(1/3)

表３　出土石器観察表１

挿図番号	遺跡名	出土地点	器種	石材	計測値（cm・g）			
					全長	最大幅	厚さ	重量
1	栢ノ木	14-C・D-Ⅰ	打製石鏃	黒色黒曜石	1.50	1.40	0.40	0.65
2	栢ノ木	14-B３-Ⅳ	打製石鏃	黒色黒曜石	1.70	1.30	0.30	0.57
3	栢ノ木	14-C・D-Ⅰ	加工痕ある剥片	黒色黒曜石	3.50	1.20	0.70	2.41
4	栢ノ木	14-C２-Ⅴ	打製石鏃？	黒色黒曜石	1.00	1.30	0.30	0.41
5	栢ノ木	14-B１-S1	扁平片刃石斧	頁岩	6.20	2.25	0.65	21.80
6	栢ノ木	14-C１-Ⅱ	石庖丁	硬質砂岩	4.40	2.20	0.45	6.70
7	栢ノ木	14-C・D-Ⅰ	打製石斧	玄武岩	10.20	5.85	3.10	245.00
8	栢ノ木	14-B１-Ⅱ	打製石斧	安山岩	6.40	4.40	2.25	86.12
17	横久保	Ｔ１-Ⅲ	打製石鏃	黒色黒曜石	1.80	1.40	0.35	0.61
18	横久保	Ｔ１-Ⅲ	使用痕ある剥片	黒色黒曜石	4.25	2.90	0.75	5.85
19	栢ノ木	15-Ｔ１-Ⅳ	打製石鏃	黒色黒曜石	2.60	1.70	0.60	1.30
20	栢ノ木	15-Ｔ２-Ⅴ	打製石鏃	灰青色黒曜石	2.70	1.20	0.50	1.11
21	栢ノ木	15-Ｔ10-Ⅲ	打製石鏃	黒色黒曜石	2.10	1.80	0.50	1.32
22	栢ノ木	15-Ｔ２-Ⅶ	打製石鏃	黒色黒曜石	2.80	1.90	0.50	1.82
23	栢ノ木	15-Ｔ５-Ⅶ	打製石鏃	安山岩	2.00	1.50	0.40	1.10
24	栢ノ木	15-Ｔ８-Ⅴ	打製石鏃	黒色黒曜石	2.20	1.40	0.40	0.98
25	栢ノ木	15-Ｔ５-Ⅱ	打製石鏃	黒色黒曜石	1.80	0.80	0.30	0.40
26	栢ノ木	15-Ｔ11-Ⅰ	打製石鏃	黒色黒曜石	2.00	2.30	0.50	2.01
27	栢ノ木	15-Ｔ２-Ⅲ	打製石鏃	黒色黒曜石	1.50	1.50	0.40	0.70
28	栢ノ木	15-Ｔ８-Ⅱ	打製石鏃	黒色黒曜石	1.40	1.30	0.35	0.59
29	栢ノ木	15-Ｔ11-Ⅳ	打製石鏃	黒色黒曜石	1.40	0.80	0.30	0.33
30	栢ノ木	15-Ｔ９-Ⅲ	スクレイパー	安山岩	2.50	2.40	0.80	4.50
31	栢ノ木	15-Ｔ７-Ⅰ	打製石鏃	黒色黒曜石	2.00	1.55	0.35	0.92
32	栢ノ木	15-Ｔ５-Ⅵ	加工痕ある剥片	黒色黒曜石	2.20	1.00	0.55	0.85
33	栢ノ木	15-Ｔ１-Ⅳ	石錐	黒色黒曜石	1.40	0.50	0.30	0.17
34	栢ノ木	15-Ｔ11-Ⅱ	石錐	黒色黒曜石	1.50	0.70	0.40	0.32
35	栢ノ木	15-Ｔ５-Ⅵ	スクレイパー	黒色黒曜石	2.20	2.20	1.00	4.08
36	栢ノ木	15-Ｔ５-Ⅵ	加工痕ある剥片	黒色黒曜石	3.30	1.70	0.65	3.48
37	栢ノ木	15-Ｔ５-Ⅲ	使用痕ある剥片	黒色黒曜石	4.80	1.80	0.60	3.01
38	栢ノ木	15-Ｔ５-Ⅶ	使用痕ある剥片	黒色黒曜石	3.50	2.35	0.75	6.09
39	栢ノ木	15-Ｔ９-Ⅴ'土	加工痕ある剥片	黒色黒曜石	2.30	1.80	0.90	3.58
40	栢ノ木	15-Ｔ11-Ⅱ	磨製石斧	安山岩	13.80	4.10	1.50	134.40
41	栢ノ木	15-Ｔ６-Ⅱ	スクレイパー	玄武岩	9.00	5.10	2.00	73.22
42	栢ノ木	15-Ｔ９-土39	砥石	硬質砂岩	4.25	5.40	3.40	90.00
43	栢ノ木	15-Ｔ９-Ⅴ'土	打製石斧	安山岩	6.50	6.90	2.40	103.10
44	栢ノ木	15-Ｔ５-Ⅶ	凹石	玄武岩	9.70	10.40	6.80	275.00
45	栢ノ木	15-Ｔ９-土5	凹石	玄武岩	12.05	9.80	5.10	985.00
73	辻ノ尾	２-Ｔ２-Ⅱ	打製石鏃	黒色黒曜石	2.00	1.10	0.40	0.70
74	辻ノ尾	２-Ｏ	加工痕ある剥片	黒色黒曜石	2.75	2.20	0.85	4.70
91	中ノ瀬	３-Ｔ３-Ⅱ	石錘	滑石	4.80	1.60	1.25	13.55
92	宮ノ下リ	６-Ｔ２-Ⅵ	加工痕ある剥片	黒色黒曜石	2.20	1.75	0.55	2.13

表４　出土石器観察表２

挿図番号	遺跡名	出土地点	器種	石材	計測値（㎝・g）			
					全長	最大幅	厚さ	重量
93	栢ノ木	16-T２-Ⅳ	スクレイパー	安山岩	7.50	3.90	2.00	46.47
94	栢ノ木	17-T10-Ⅲ	ナイフ形石器	安山岩	3.70	1.80	0.60	3.57
95	栢ノ木	17-T11-Ⅱ	打製石鏃	黒色黒曜石	2.15	1.50	0.35	0.78
96	栢ノ木	17-T15-Ⅳ	打製石鏃	灰青色黒曜石	2.10	1.70	0.70	1.50
97	栢ノ木	17-T12-Ⅱ	打製石鏃	黒色黒曜石	1.40	1.35	0.30	0.51
98	栢ノ木	17-T６-Ⅳ	打製石鏃	黒色黒曜石	1.65	1.55	0.40	0.76
99	栢ノ木	17-T３-Ⅳ	打製石鏃	黒色黒曜石	2.35	1.70	0.45	1.31
100	栢ノ木	17-T９-Ⅱ	打製石鏃	黒色黒曜石	2.60	1.85	0.50	1.58
101	栢ノ木	17-T５-SK	打製石鏃	黒色黒曜石	3.25	2.30	0.65	2.92
102	栢ノ木	17-T４-Ⅱ	打製石鏃	安山岩	2.95	2.25	0.45	2.27
103	栢ノ木	17-T８-Ⅱ	打製石鏃	黒色黒曜石	1.80	1.80	0.30	0.70
104	栢ノ木	17-T８-Ⅱ	打製石鏃	黒色黒曜石	2.20	1.30	0.30	1.12
105	栢ノ木	17-T３-Ⅰ	打製石鏃	黒色黒曜石	1.95	1.05	0.25	0.40
106	栢ノ木	17-T４-Ⅱ	打製石鏃	黒色黒曜石	1.35	1.00	0.35	0.28
107	栢ノ木	17-T８-Ⅳ	打製石鏃	黒色黒曜石	1.50	1.40	0.50	0.71
108	栢ノ木	17-T６-Ⅳ	石錐	黒色黒曜石	1.20	0.80	0.30	0.30
109	栢ノ木	17-T12-H	スクレイパー	黒色黒曜石	3.00	1.80	1.00	4.00
110	栢ノ木	17-T６-Ⅵ	スクレイパー	黒色黒曜石	3.20	2.10	1.20	7.30
111	栢ノ木	17-T６-Ⅴ	方柱状小型石斧	硬質砂岩	7.50	1.55	1.45	28.21
112	栢ノ木	17-T６-S7	方柱状片刃石斧	頁岩	7.50	2.50	2.40	44.43
113	栢ノ木	17-T11-埋土	磨製石斧	安山岩	20.70	8.15	4.40	980.00
114	栢ノ木	17-T６-Ⅲ	打製石斧	玄武岩	13.70	8.05	4.70	875.00
115	栢ノ木	17-T10-Ⅱ	スクレイパー	安山岩	7.40	5.50	1.55	60.00
116	栢ノ木	17-T６-S2	台石	硬質砂岩	13.20	12.30	6.40	930.00
134	栢ノ木	17-T10-Ⅱ	石鍋	滑石	5.40	2.45	1.75	28.68
136	津崎	２-O	石核	黒色黒曜石	4.30	3.80	2.70	34.49
137	津崎	２-T８-Ⅲ	台形石器	黒色黒曜石	3.30	1.65	0.80	3.13
138	辻ノ尾	３-T１-Ⅱ	打製石鏃	黒色黒曜石	2.00	1.40	0.30	0.71
139	辻ノ尾	３-O	打製石鏃	黒色黒曜石	1.30	0.80	0.20	0.28
140	辻ノ尾	３-T２-Ⅰ	彫器	黒色黒曜石	2.40	2.20	0.80	3.38
141	田口高野	３-T２-Ⅱ	打製石鏃	黒色黒曜石	2.50	1.70	0.40	1.59
142	田口高野	３-T２-Ⅱ	打製石鏃	黒色黒曜石	2.00	1.30	0.35	0.80
143	田口高野	３-O	打製石鏃	黒色黒曜石	1.00	0.80	0.20	0.21
144	栢ノ木	18-T10-Ⅱ	打製石鏃	黒色黒曜石	2.30	1.50	0.50	0.89
145	栢ノ木	18-T１-Ⅱ	打製石鏃	黒色黒曜石	2.30	1.10	0.30	0.57
146	栢ノ木	18-T７-Ⅴ	打製石鏃	黒色黒曜石	1.60	1.50	0.30	0.70
147	栢ノ木	18-T７-Ⅴ	打製石鏃	安山岩	2.30	1.60	0.40	1.20
148	栢ノ木	18-T７-Ⅱ	打製石鏃	黒色黒曜石	2.30	1.10	0.30	0.50
149	栢ノ木	18-T７-Ⅶ	打製石鏃	黒色黒曜石	2.30	1.80	0.50	1.48
150	栢ノ木	18-T10-Ⅳ	打製石鏃	黒色黒曜石	2.00	1.60	0.30	1.10

表５　出土土器観察表１

挿図番号	遺跡名	出土地点	種　別	器種	径・器高(cm)	色　調	胎　土
9	栢ノ木	14-C２-P10	弥生土器	壺	復元口径28.6	内面淡灰橙褐色、外面淡灰橙色	長石・石英・雲母・角閃石
10	栢ノ木	14-C３-P12	弥生土器	壺		内外面橙色	長石・石英・雲母・角閃石
11	栢ノ木	14-C１-P5	弥生土器	甕	復元底径5.7	内面淡橙褐色、外面橙色	長石・石英・雲母
12	栢ノ木	14-C３-P5	須恵器	坏蓋	復元口径14.0	内外面淡灰色	灰色
13	栢ノ木	14-C３-P10	須恵器	坏身	復元口径12.2	灰青色	茶褐色
14	栢ノ木	14-C１-P1	土錘		長径4.2、短径1.4	淡橙褐色	長石
15	栢ノ木	14-O	粉青沙器	碗	復元底径5.6	釉淡灰青色	灰色
16	栢ノ木	14-C１-P2	陶器	合子身	復元底径5.8	内面淡黄褐色	淡黄白色
46	栢ノ木	15-T５-II	弥生土器	甕		内面にぶい橙色、外面黒橙褐色	長石・石英・雲母
47	栢ノ木	15-T５-II	弥生土器	甕		内面灰橙色、外面淡橙褐色	長石・石英
48	栢ノ木	15-T11-II	弥生土器	甕	復元口径37.8	内外面灰橙褐色	長石・石英・雲母
49	栢ノ木	15-T10-II土	弥生土器	甕	復元口径24.6	内面淡橙色、外面淡橙褐色	長石・石英・雲母
50	栢ノ木	15-T７-V	弥生土器	甕	底部径6.4	内外面橙褐色	長石・石英・雲母
51	栢ノ木	15-T５-VII	弥生土器	甕	復元底径6.4	内面橙褐色、外面橙色	長石・石英・雲母
52	栢ノ木	15-T11-II	弥生土器	甕	復元底径6.7	内外面灰橙褐色	長石・石英・雲母
53	栢ノ木	15-T７-土	弥生土器	甕	復元口径25.6	内面淡灰橙色、外面淡灰橙褐色	長石・石英・雲母
54	栢ノ木	15-T９-土13	弥生土器	甕	復元口径32.0	内面淡灰橙色、外面淡灰橙褐色	長石・石英・雲母
55	栢ノ木	15-T９-土26	弥生土器	甕	復元口径26.6	内面淡灰橙色、外面淡灰橙褐色	長石・石英・雲母
56	栢ノ木	15-T９-土	弥生土器	甕	復元口径25.4	内面淡灰橙褐色、外面橙褐色	長石・石英・雲母
57	栢ノ木	15-T９-土24	弥生土器	甕	復元口径24.6	内面淡橙色、外面淡灰橙褐色	長石・石英・雲母
58	栢ノ木	15-T９-土21	弥生土器	甕	復元口径19.6	内面淡橙色、外面橙色	長石・石英・雲母
59	栢ノ木	15-T９-V	弥生土器	甕	復元口径23.2	内面淡灰橙色、外面淡橙褐色	長石・石英・雲母
60	栢ノ木	15-T９-土2	弥生土器	甕	底部径 6.2	内面淡灰橙褐色、外面淡橙褐色	長石・石英・雲母
61	栢ノ木	15-T11-IV	土師質土器	甕		内外面灰橙褐色	長石・石英・角閃石
62	栢ノ木	15-T11-II	白磁	碗	復元口径11.2	釉濁灰白色	灰白色
63	栢ノ木	15-T５-VII	龍泉窯系青磁	蓮弁文碗	復元口径15.2	釉淡緑色	灰色
64	栢ノ木	15-T５-V	龍泉窯系青磁	蓮弁文碗		釉淡緑色	灰色
65	栢ノ木	15-T５-V	龍泉窯系青磁	碗	復元底径 5.5	釉淡空色	灰色
66	栢ノ木	15-T５-V	同安窯系青磁	碗		釉淡緑灰色	灰色
67	栢ノ木	15-T５-VI	青白磁	合子蓋		釉淡空色	灰白色
68	栢ノ木	15-T５-V	青磁	合子蓋	復元口径4.8	釉灰緑色	灰色
69	栢ノ木	15-T５-V	陶器	皿？	復元口径11.2	釉淡黄灰色	灰色
70	栢ノ木	15-T11-IV	景徳鎮窯青花	碗	復元口径11.6	釉白色	灰白色
71	栢ノ木	15-T11-II	土錘		長径3.9、短径0.9	赤褐色	
72	栢ノ木	15-T11-II	東播系須恵質土器	捏鉢		内外面淡灰青色	灰青色
75	中ノ瀬	中３-T５-II	弥生土器	甕	口径25.2	内面黒橙褐色、外面橙褐色	長石・石英・雲母
76	中ノ瀬	中３-T５-II	弥生土器	甕	復元口径24.6	内面黄橙褐色、外面橙褐色	長石・石英・雲母
77	中ノ瀬	中３	弥生土器	甕	復元口径28.0	内外面灰橙褐色	長石・石英・雲母
78	中ノ瀬	中３	弥生土器	甕	復元口径27.2	内外面淡橙褐色	石英・雲母・角閃石
79	中ノ瀬	中３	弥生土器	甕	復元口径25.8	内外面淡灰橙褐色	長石・石英・雲母
80	中ノ瀬	中３	弥生土器	甕	復元口径28.0	内面橙褐色、外面灰橙褐色	長石・石英・雲母
81	中ノ瀬	中３	弥生土器	甕	復元口径27.1	内外面橙褐色	長石・石英・雲母
82	中ノ瀬	中３	弥生土器	甕	復元口径29.6	内面橙褐色、外面黒褐色	長石・石英・雲母
83	中ノ瀬	中３	弥生土器	甕	復元口径27.2	内面灰橙褐色、外面灰橙褐色	長石・石英・雲母
84	中ノ瀬	中３	弥生土器	甕	復元口径26.8	内外面橙褐色	長石・石英・雲母・角閃石
85	中ノ瀬	中３	弥生土器	壺		内外面橙褐色	長石・石英・雲母
86	中ノ瀬	中３	弥生土器	甕	復元口径23.7	内面灰橙褐色、外面淡灰橙褐色	長石・石英・雲母

表６　出土土器観察表２

挿図番号	遺跡名	出土地点	種　別	器 種	径・器高(cm)	色　調	胎　土
87	中ノ瀬	中３	弥生土器	甕	復元口径22.4	内外面灰橙褐色	長石・石英・雲母
88	中ノ瀬	中３	弥生土器	甕	復元口径26.0	内外面橙褐色	長石・石英・雲母
89	中ノ瀬	中３-O	弥生土器	甕	底径7.2	内面淡黄橙色、外面淡赤橙色	長石・石英・雲母
90	中ノ瀬	中３	同安窯系青磁	碗		釉淡緑灰色	灰色
117	栢ノ木	17-T12-5号	弥生土器	甕	突帯径56.2	内外面褐色	長石・石英・雲母
118	栢ノ木	17-T11-4号	弥生土器	甕	器高47.0、底径13.15	内外面淡褐色	長石・石英・雲母
119	栢ノ木	17-T９-Ⅲ	弥生土器	甕	底径8.6	内面黄橙褐色、外面橙褐色	長石・石英・雲母
120	栢ノ木	17-T６-P22	弥生土器	甕	復元口径33.2	内面淡灰橙色、外面淡橙褐色	長石・石英・雲母
121	栢ノ木	17-T６-P19	弥生土器	甕	復元口径30.6	内外面淡橙褐色	長石・石英・雲母
122	栢ノ木	17-T５-Ⅳ	弥生土器	甕		内外面淡灰橙褐色	長石・石英・雲母
123	栢ノ木	17-T５-Ⅳ	弥生土器	壺	復元口径28.6	内外面淡橙褐色	長石・石英・雲母
124	栢ノ木	17-T６	弥生土器	甕	復元口径18.7	内外面橙色	長石・石英・雲母
125	栢ノ木	17-T６-P4+P6	弥生土器	甕	復元口径17.4	内外面橙褐色	長石・石英・雲母
126	栢ノ木	17-T６-P10	弥生土器	甕	復元底径7.6	内外面淡橙褐色	長石・石英・雲母
127	栢ノ木	17-T６-P20	弥生土器	甕	復元底径6.6	内面にぶい橙褐色、外面淡橙褐色	長石・石英・雲母
128	栢ノ木	17-T６-P2	弥生土器	甕	復元底径8.2	内面にぶい橙色、外面橙褐色	長石・石英・雲母
129	栢ノ木	17-T６-Ⅳ	白磁	碗	復元底径6.0	釉灰白色	白色
130	栢ノ木	17-T12-pit13	白磁	合子蓋	復元口径3.4	釉白灰色	灰色
131	栢ノ木	17-T６-Ⅳ	陶器	合子身	復元底径6.2	内外面淡青橙色	灰黄色
132	栢ノ木	17-T６-Ⅳ	龍泉窯系青磁	蓮弁文碗	復元口径14.6	釉淡緑色	灰色
133	栢ノ木	17-T６-Ⅱ	陶器	合子蓋	復元口径7.4	釉黄灰色	灰白色
135	栢ノ木	17-T５-Ⅱ	土錘		長径1.9、短径0.9	褐色	褐色
151	栢ノ木	18-T７-Ⅵ	弥生土器	甕	復元口径27.8	内外面淡黄褐色	長石・石英・雲母
152	栢ノ木	18-T７-Ⅴ	弥生土器	壺	復元口径29.0	内外面淡茶褐色	長石・石英
153	栢ノ木	18-T７-Ⅶ	弥生土器	壺	復元口径29.8	内外面淡茶褐色	長石・石英
154	栢ノ木	18-T７-Ⅶ	弥生土器	甕	復元底径6.0	内面淡暗褐色、外面橙色	長石・石英・雲母
155	栢ノ木	18-T７-Ⅶ	弥生土器	高坏	復元脚端径13.0	内外面淡褐色	石英
156	栢ノ木	18-T７-Ⅶ	土師器	甕	復元口径15.2	内外面淡褐色	石英
157	栢ノ木	18-T７-Ⅷ	土師器	高坏	復元底径10.0	内外面橙色	石英
158	栢ノ木	18-T７-Ⅶ	土師器	把手		内外面淡橙色	長石・石英・雲母
159	栢ノ木	18-T７-Ⅵ	土師器	坏蓋	復元口径11.0、器高3.2	内外面淡橙色	
160	栢ノ木	18-T７-Ⅶ南	土師器	坏蓋	復元口径12.0、器高3.6	内外面暗赤褐色	長石・石英
161	栢ノ木	18-T７-Ⅴ	須恵器	坏蓋	復元口径15.4、器高3.2	内外面淡灰色	微砂粒若干
162	栢ノ木	18-T７-Ⅶ南	須恵器	坏蓋	復元口径12.0、器高4.0	内外面灰色	砂粒多
163	栢ノ木	18-T７-Ⅶ南	須恵器	坏身	復元口径11.6、受径9.4	内外面暗灰色	
164	栢ノ木	18-T７-Ⅴ	須恵器	坏身	復元口径11.8、受径9.6	内外面淡灰色	
165	栢ノ木	18-T７-Ⅴ	須恵器	坏身	復元口径17.8、受径15.4	内外面淡褐灰色	微砂粒若干
166	栢ノ木	18-T７-Ⅵ	須恵器	坏身	復元口径13.0	内外面淡褐灰色	砂粒多
167	栢ノ木	18-T７-Ⅵ	須恵器	坏身	復元口径13.2、受径13.2	内外面灰色	砂粒多
168	栢ノ木	18-T７-Ⅴ	須恵器	壺？		内外面暗灰色	砂粒多
169	栢ノ木	18-T７-Ⅵ	須恵器	壺	復元口径6.6、器高8.0	内外面灰青色	
170	栢ノ木	18-T７-Ⅶ	須恵器	高坏		内外面灰色	砂粒多
171	栢ノ木	18-T７-Ⅶ	土師質	甕		内面灰褐色、外面黒色	
172	栢ノ木	18-T７-Ⅶ	須恵器	甕	復元口径23.2	内外面暗灰色	微砂粒若干
173	栢ノ木	18-T７-Ⅶ	須恵器	甕		内外面暗灰色	微砂粒若干
174	栢ノ木	18-T７-Ⅶ	須恵器	甕		内外面灰色	

第Ⅶ章　栢ノ木遺跡について

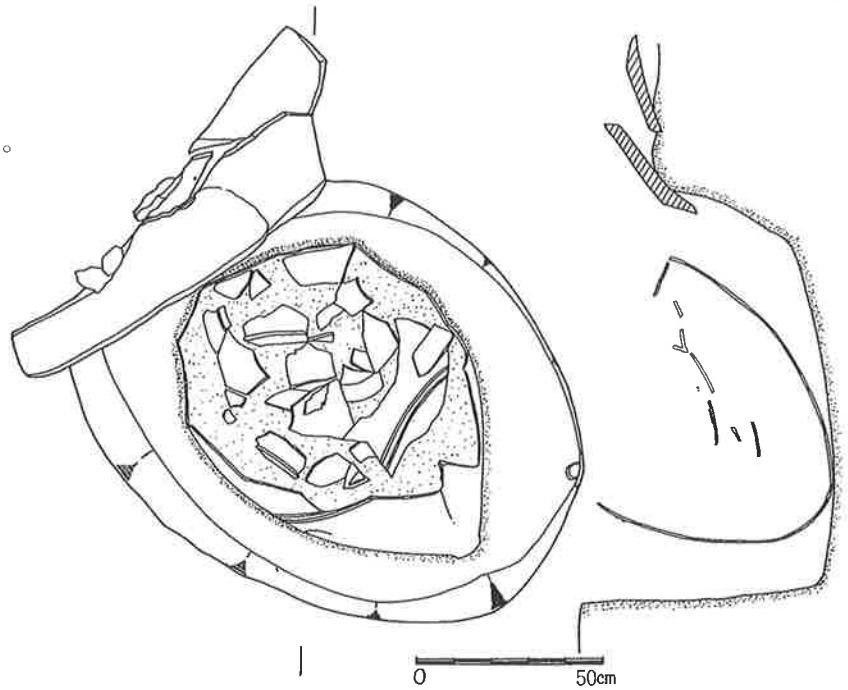
1．発見に至る経緯

栢ノ木遺跡の発見は古く昭和45年秋のことである。松浦市志佐町栢木免字小久保20番地において、水田の区画整理工事中に大型の土器を発見したと土地所有者より松浦市教育委員会へ報告がなされた。当時の担当者が現地におもむくと報告があった大型の土器の甕棺が２基露出していた。ただちに市教育委員会は長崎県文化財課（現学芸文化課）に報告して指示を求めた。その後、県教育委員会・市教育委員会・土地所有者との間で工事の延期と発掘調査について協議し、昭和46年３月の発掘調査終了まで工事を延期していただくことになり、３月３日から３月９日まで発掘調査を行っている。発掘調査は、松浦市教育委員会が主体となり、調査は当時の県文化財課の正林護指導主事（現長崎県考古学会会長）が行っている。調査期間中には松浦市社会科研究会の教職員や教育委員会の職員などが発掘調査に参加・協力をしているようである。

調査は発見当初から露出しているこの２基の甕棺の記録措置を行う予定であったが、所有者より、かつてから付近にある巨大石の埋没を除きたい意向もあって、調査区を15m×15mに設定して、そのうち36㎡を調査している。この調査で検出された遺構はさきに発見された甕棺墓２基を含めて甕棺墓３基、石棺墓３基であった。

１号甕棺墓（第85図）

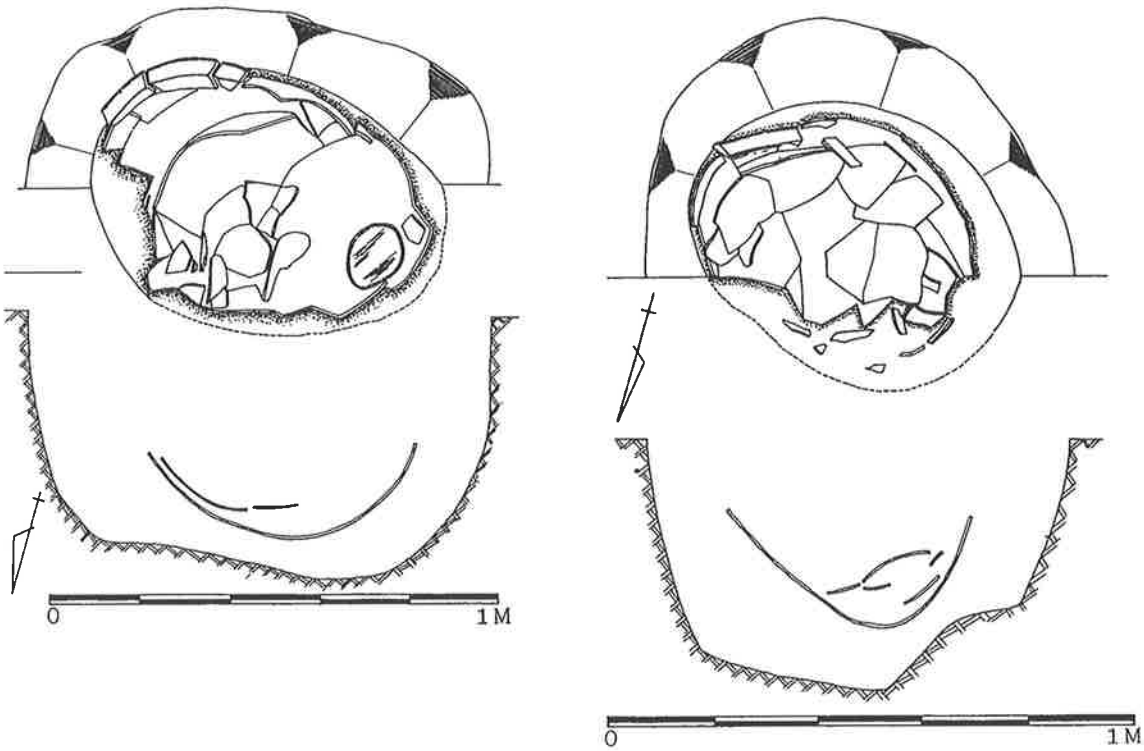
２号石棺墓の北西側に接する甕棺墓で、斜めに掘られた土壙に大形の甕形土器を70度の角度に倒して埋設していた。角閃石安山岩の板石で蓋がなされている。甕は高さ1.1m、口縁部の直径60㎝、底部の直径12㎝で、口縁部は断面が逆「L」字形で胴部に２条の突帯を巡らしている。弥生時代前期後半の土器である。棺内より管玉が15個出土している。



第85図　１号甕棺墓実測図

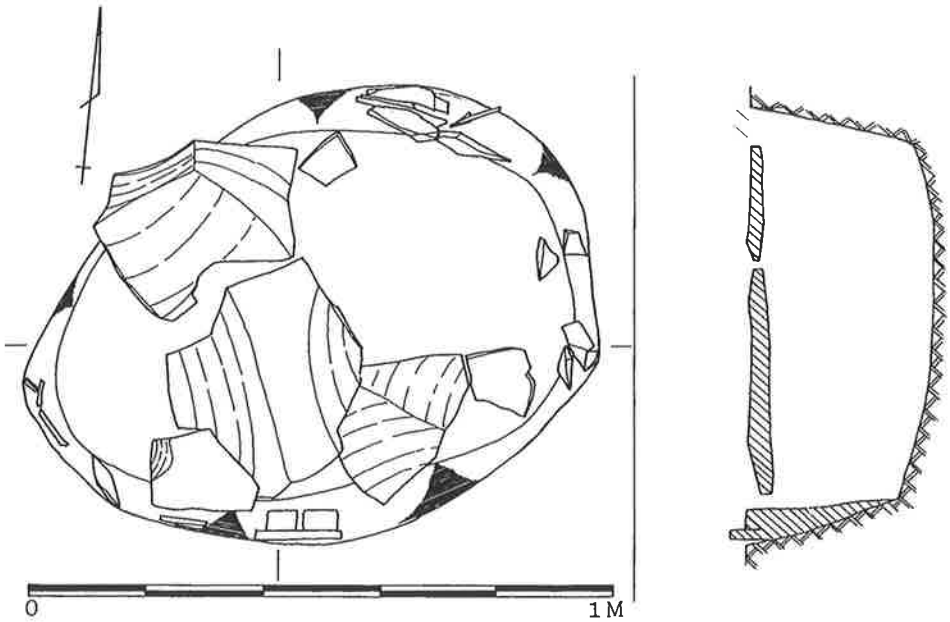
２号甕棺墓（第86図）

遺跡発見のきっかけとなった甕棺２基のうちの１基である。水田の畦を改修する作業によって縦に半割された状態で発見された。１号甕棺とほぼ同じ角度で斜めに埋設され、蓋石は発見



第86図　２号・３号甕棺墓実測図

されなかったものの、単甕に石蓋をしていたことは確実である。１号甕棺よりやや小型の土器が用いられており、高さは約80cmである。口縁はやや内に低く傾斜し、口唇部の上下には刻目を施し、口縁直下および胴部中位に３条の浅い沈線を巡らしている。底部は大きく器厚も厚い。棺内には人骨は残っておらず、副葬品も出土していない。



第87図　１号石棺墓実測図

３号甕棺墓（第86図）

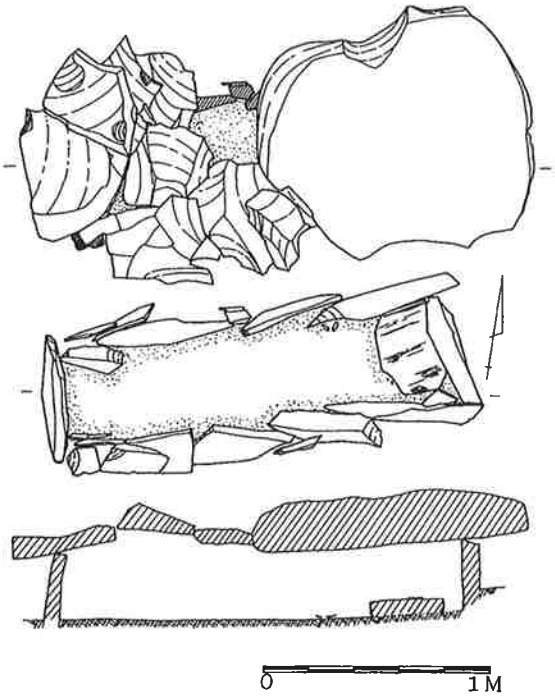
２号甕棺のすぐ西側で検出されており、土壙内に70度の斜度で埋置されていた。石蓋をもっていたと考えられる。人骨は残っておらず、副葬品も検出されていない。

１号石棺墓（第87図）

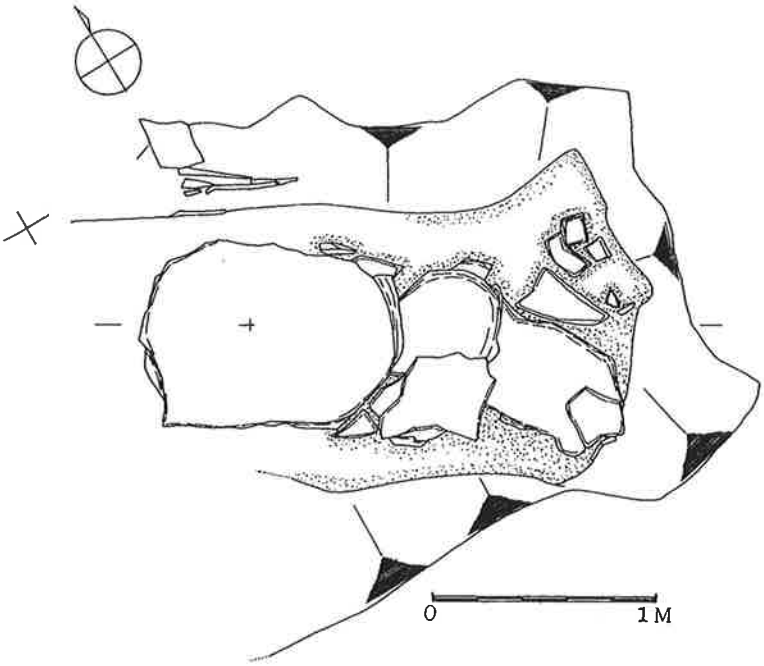
東西約１ｍ、南北約80㎝の楕円形の土壙を掘り、内側に角閃石安山岩の板石を立てたもので、同じ石材の蓋石が数枚残っていた。長方形の石棺が一般的であるが、この石棺は特異な形状をしており、蓋石については不明であるが、支石墓の下部構造の可能性がある。

２号石棺墓（第88図）

１号石棺のすぐ西側で発見されたもので、ほぼ東西に主軸をとっている。棺身の長さ約1.8ｍで内側の東端に枕石を配し、東頭位になっている。石材は角閃石安山岩の板石であるが、東半分を覆う蓋石は80㎝の楕円形で厚みが約30㎝の安山岩の自然石を用いている。石棺の石材は全て同じ石材を用いることが多いことからして、この自然石の蓋材は本来２号石棺のものでなかったかもしれない。副葬品は少ないが、枕石の上で中国後漢時代の青銅鏡片が発見され、枕石に近い棺床面では約350個以上のガラス製小玉と淡緑色の軟玉製管玉２個が発見されている。被葬者の胸元を飾っていたものと考えられるが、人骨は全く残っていなかった。



第88図　２号石棺墓実測図



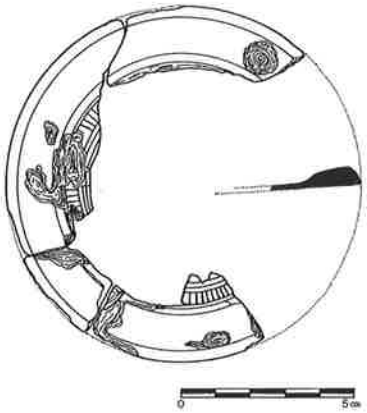
第89図　３号石棺墓実測図

３号石棺墓（第89図）

２号石棺墓より北西へ約６ｍの地点にあり、角閃石の板石を棺材に用い、主軸を東西にとっている。長さ約1.8ｍで人骨は残っておらず、副葬品もない。石棺墓としては側壁石および小口部が失われ、屍床面の敷石だけが残った可能性が考えられる。

出土遺物（第90図）

栢ノ木遺跡から出土した副葬品及び周辺で表面採集された遺物は少ない。第90図は２号石棺の枕石の上で発見された青銅鏡片である。図上で復元してみると直径10.3㎝である。外縁は厚く作られているが内区の大部分と紐はなくなっている。一部が残った内区の状況からすると内行花文鏡であることはほぼ確実であり、青銅の質もよく中国からの舶載品であろう。わずかに朱が残っている。その他では２号石棺墓の枕石に近い棺床面で集中的に発見されたガラス製小玉と淡緑色の軟玉製管玉２個がある。１号甕棺墓出土の管玉15個も２号石棺墓のものと同じ石材が利用されている。



第90図　２号石棺墓内出土遺物

（『原始・古代の長崎県　資料編II』「栢ノ木遺跡」に一部加筆）

以上が、昭和45年の栢ノ木遺跡の発見から昭和46年の調査までの経緯である。その後、長崎県教育委員会では、この調査を踏まえて、周知の遺跡として新に登録し、長崎県内における重要遺跡として周知されることとなった。

【参考文献・引用文献】
正林　護　1973　『栢ノ木遺跡（中間報告）』　松浦市教育委員会
正林　護　1997　「栢ノ木遺跡」『原始・古代の長崎県　資料編II』　長崎県教育委員会

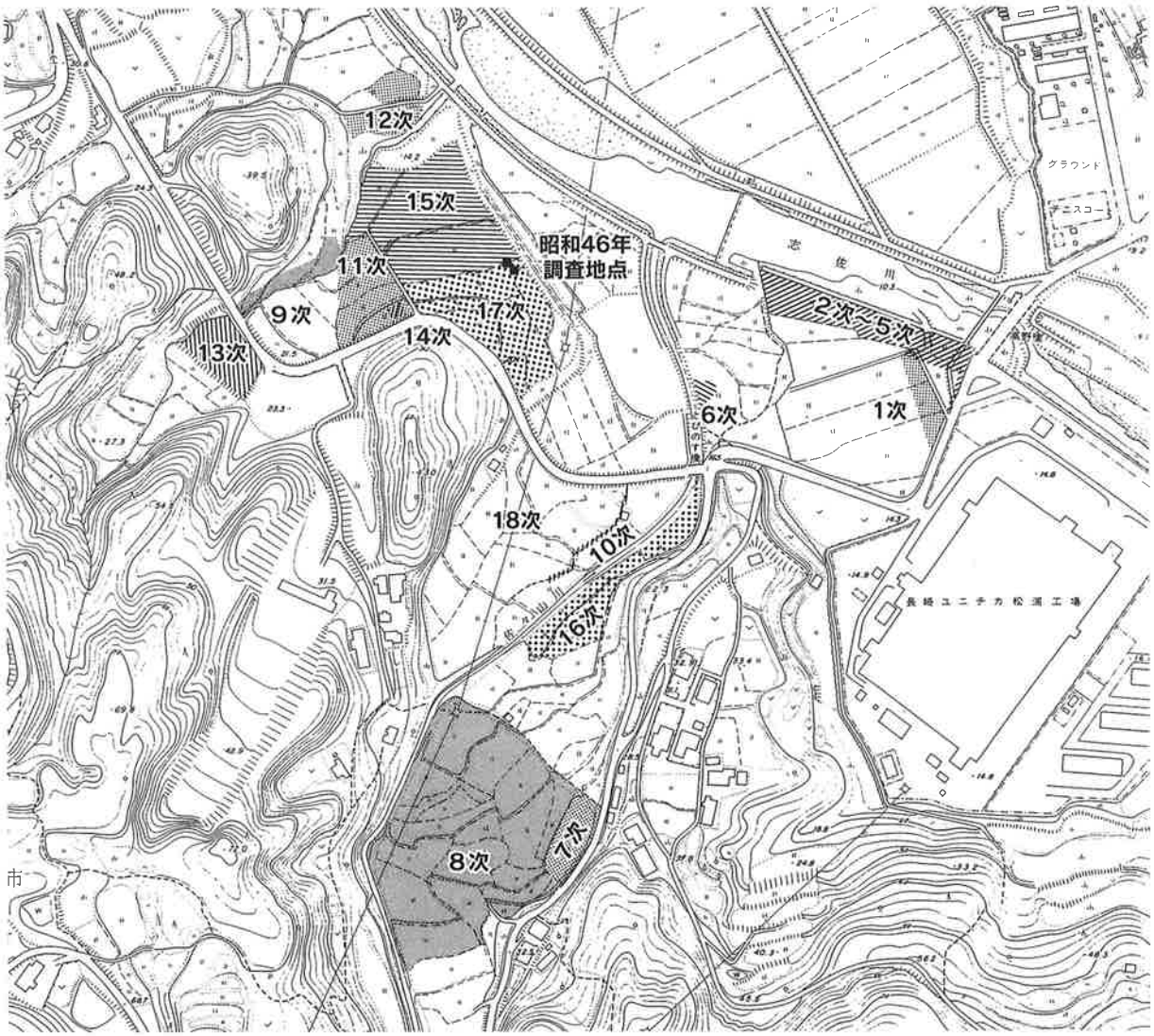
２．調査経緯（表７・第91図）

昭和46年の調査（０次調査と呼ぶ）後、栢ノ木遺跡の発掘調査は表７のとおりこれまでに20回におよぶ確認および本調査・立会調査を実施している。なお、国庫・県費補助事業として実施した調査である第７次から第14次調査については松浦市内遺跡確認調査（２）、松浦市内遺跡確認調査（３）として報告書を刊行しているが、第７次調査以前の調査分については現在までのところ報告書を刊行していない。ここでその調査の概要について報告する。

松浦市教育委員会が主体となって栢ノ木遺跡の発掘調査を行ったのは、平成元年度からである。昭和46年の調査地点より東へ約300ｍの地点で、民間の工場建設計画があったため、平成２年３月に試掘調査を行っている。なお、幸いにして工場建設は中止されている。この調査を第１次調査と呼ぶこ

表7　栢ノ木遺跡発掘調査一覧表

次数	年度	調査地（志佐町）	調査	調査期間	調査面積	検出遺構	調査原因
0	45	栢木免小久保	本	46.03.03～46.03.09	36㎡	石棺墓・甕棺墓	区画整理
1	元	池成免猿喰	試掘	02.03.20～02.03.28	38㎡	落ち込み	試掘調査
2	3	池成免猿喰	確認	03.10.31～03.11.15	52㎡	柱穴	河川改修工事
3	4	池成免猿喰	本	04.06.16～04.08.22	124.5㎡	柱穴	局部改良工事
4	4	池成免猿喰	確認	04.08.24～04.09.14	42㎡	石敷遺構	河川改修工事
5	4	池成免猿喰	本	05.02.04～05.03.08	170㎡	石敷遺構	局部改良工事
6	8	池成免濱井手	本	08.08.26～08.10.11	127㎡	無	簡易水道新設工事
7	9	栢木免佐々山	確認	09.06.19～09.06.24	16㎡	柱穴	簡易水道新設工事
8	9	栢木免佐々山	確認	09.10.15～09.10.22	44㎡	無	圃場整備
9	10	栢木免山浦	確認	10.06.15～10.06.16	8㎡	無	個人住宅
10	11	栢木免小久保	確認	12.01.11～12.01.19	24㎡	無	農道整備
	12	栢木免小久保	立会	12.05.01～12.05.02	－	石棺墓	圃場整備
11	12	栢木免山浦	確認	12.08.07～12.09.05	56㎡	柱穴	保育所建設
12	12	栢木免高尾本	試掘	12.12.18～12.12.19	12㎡	無	圃場整備
13	12	栢木免山浦	試掘	12.12.20～12.12.22	8㎡	無	個人住宅
14	12	栢木免小久保	本	13.01.10～13.02.05	98.5㎡	柱穴	保育所建設
15	13	栢木免小久保	確認	14.03.01～14.03.25	110㎡		確認調査
16	14	栢木免佐々山	確認	14.11.25～14.11.26	8㎡		圃場整備
17	14	栢木免小久保	確認	15.02.06～15.03.14	114㎡	石棺墓・甕棺墓	確認調査
18	15	栢木免小久保	確認	16.02.24～16.03.19	96㎡	柱穴	確認調査

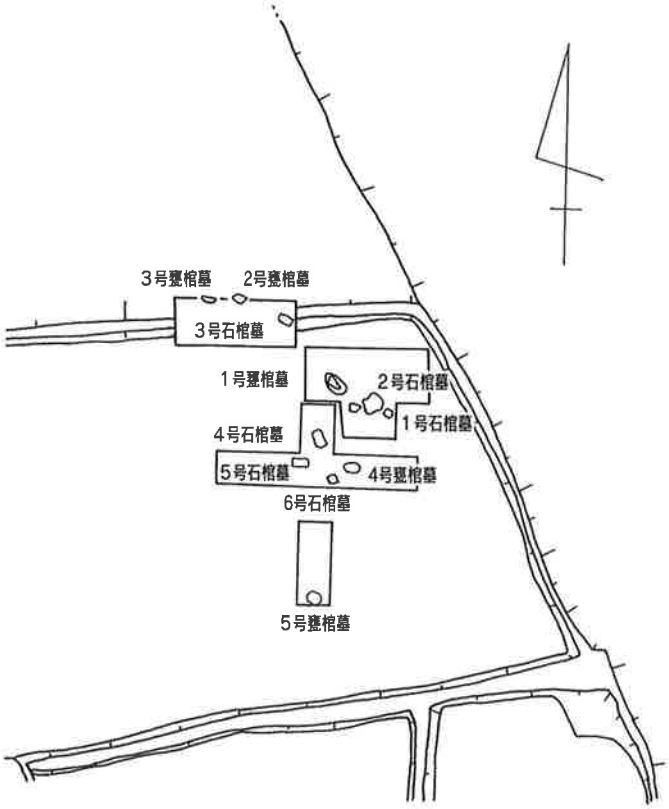


第91図　栢ノ木遺跡調査地点図（1/5,000）

とにしている。調査では、縄文晩期末（弥生早期）の刻目突帯文土器から中世の輸入陶磁器（青磁・白磁・青花など）までの遺物が258点出土しており、複合遺跡であることが確認されている。なお、調査区内において、黒色黒曜石の剥片・砕片のみを57点出土している遺構を１基検出している。遺構は長径60㎝、短径50㎝、深さ７㎝で、ほぼ歪な円形状を呈しており覆土は茶褐色粘質土で、浅く掘り込んでいた。この遺構には石器製作の工程で必要になる台石は出土しなかったが剥片・砕片の大量出土から石器製作に関連する遺構ではないかと考えている。

第２次調査から第５次調査は、平成元年度に確認調査を実施した地点より東側で、長崎県北振興局田平土木事務所による志佐川中小河川改修工事に伴う確認調査を実施している。第２次調査では52㎡を調査し、栢ノ木遺跡の東側のラインを確認することができた。ひき続き関連事業である志佐川局部改良事業に伴う栢ノ木遺跡の第３次調査を実施している。この調査は２次調査で掘建柱建物跡の柱穴が確認された地点の本調査で124.5㎡を調査している。第４次調査は第３次調査より下流域で河川改修工事に伴う確認調査で表土下1.4ｍで石敷遺構が検出された。遺構は自然石の拳大から大型の礫を

集めたもので礫を並べて敷いたような状況の部分があるため河川に下るための道路状遺構ではないかと考えている。第５次調査は前回の第４次調査で検出した石敷遺構の周辺の170㎡の本調査である。石敷遺構は幅約２ｍ、長さ約５ｍまでは確認できているが南側に延びる部分は調査地区外であるため確認はできていない。この志佐川の改修工事・局部改良工事に伴う栢ノ木遺跡の第２次調査から第５次調査では2,058点の遺物が出土している。時期的には縄文前期の曽畑式土器、晩期末（弥生早期）の刻目突帯文土器、黒曜石製石鏃、安山岩製石鏃、黒曜石製石核・剥片、安山岩製スクレイパー、安山岩製石核・剥片、弥生土器、須恵器、東播系須恵質捏鉢、輸入陶磁器の龍泉窯系青磁碗、天目碗、景徳鎮窯青花碗などが出土している。この調査では、遺跡の活用が縄文前期からであることが確認された。この第２次調査から第５次調査については本報告は未刊である。



第92図　栢ノ木遺跡遺構配置図（1/450）

第６次調査は、松浦市志佐町西部地区の簡易水道需用の安定供給のための西部地区簡易水道新設工事に伴う本調査である。昭和46年の調査地点より南東側へ約160ｍの佐々山川に隣接している地点である。調査は松浦市単独事業として実施している。最終的に調査した面積は127㎡であった。この調査では遺構などの検出には至らなかった。表土下約2.5ｍまで掘り下げたが、河川のすぐ側ということもあり、湧水の問題と壁面の崩落が予想されたため安全性を考慮して地山まで調査を実施しなかった。この調査では431点の遺物が出土している。この調査に係る報告書は未刊である。

平成12年５月には、昭和46年に本調査した地点を含む水田で、個人による圃場整備が行われており、その工事は無届であったため、急遽、文化財保護法に基づく届出の提出および立会い調査を行っている。その結果、石棺墓２基・土壙（？）４基・柱穴約40基・溝状遺構、遺物では弥生土器や輸入陶磁器である中世の白磁碗や青磁碗が出土している。これらの遺構は現状で埋め戻しを指導している。しかし、残念ながらこの工事で削平を受け遺構の底面のみ依存していたり、消滅したりしている。この時に検出した石棺墓が地形測量図より照合すると位置的に15年度に調査した５号石棺墓の可能性をもっている。

以上が栢ノ木遺跡に係る０次調査を含む第１次調査からの発掘調査の経緯である。遺跡発見からす

でに34年も経過しており、この間の調査は、松浦市における弥生時代から中世にかけての歴史解明に重要な資料を提供してくれている。

3．甕棺墓・石棺墓について

栢ノ木遺跡では、昭和45年度の調査から平成15年度までの発掘調査によって甕棺墓５基、石棺墓６基の合計11基が確認されている。埋葬遺構に使用された大型の成人用甕棺の１号甕棺・２号甕棺は弥生前期後半の年代が与えられる資料である。２号石棺墓からは副葬品として中国後漢時代の青銅鏡である内行花文鏡片とガラス製小玉約350点が出土している。

北部九州では、弥生後期に甕棺墓から石棺墓へという墓制の変化があることを指摘されている。栢ノ木遺跡でも、出土遺物より甕棺の時期の下限が後期前半であったので、２号石棺墓の上限は後期初頭以降と考えられる。また、この２号石棺墓は箱式石棺墓の形態をしており、箱式石棺墓は弥生文化における松浦地方の主要な墓制であったが、後期になると石棺の長大化が認められ、石棺材が小口と側壁端で揃うか小口材を外側へ出す傾向が強くなる。これは伸展葬の普及に伴う埋葬形態と思われる。よって、北部九州でも内行花文鏡を墓に副葬する時期は後期後半に入って認められるように、栢ノ木遺跡の２号石棺墓の時期は、後期後半として差し支えないと思われるが、石棺の形態変化による編年は、埋葬者の身長や葬法築造法を考慮して詳細な検討を加えなければならない。これについては今後の研究課題としたい。

栢ノ木遺跡における支石墓？（１号）・石棺墓（４号・５号は小児用？）→甕棺墓（１号・２号）→から石棺墓（２号）への変遷は、栢ノ木遺跡の有力家族墓から有力特定個人墓への変化を現していると思われる。４号・５号石棺墓が支石墓の下部構造の箱式石棺である可能性もないではないが、耕作の邪魔になるため上部構造である撑石・支石と下部構造の蓋石が取り除かれた状況で下部構造の石棺だけが残ったものとも考えられる。しかし、支石墓そのものが弥生期の主要墓制になることはなかったようである。他の新しい文物は積極的に吸収する松浦地方の人たちも葬制に関しては極めて保守的な観念をすてきれなかったものと思われる。

現在までのところ栢ノ木遺跡の中心は、これらの甕棺墓、石棺墓が検出された地点と平成14年度に行った調査地点の水田部一帯であると思われる。住居跡は発見されてはいないが石棺墓・甕棺墓からなる墓域の周辺であると思われる。しかし、包含層からと墓域の周辺からは多数の掘建柱建物跡の柱穴が検出されている。また、柱穴からは12世紀後半から14世紀にかけての輸入陶磁器である白磁碗・青磁碗なども出土していることから、弥生期と中世期の掘建柱建物跡の存在がうかがえる。このため弥生期の遺構および住居跡などを削平して中世の集落が営まれた可能性もあり、今後さらに分析と検討を進めていきたいと考えている。

第Ⅷ章　ま　と　め

松浦市では、平成７年度から３ヵ年ずつの継続事業として市内での圃場整備・農道整備事業、宅地造成・建築などに伴う埋蔵文化財の確認調査を実施している。現在、市内に分布している旧石器時代から周知されている遺跡数は104ヵ所になっている。学術的に随時確認調査が実施されればよいが現在のところは開発に伴う確認調査が主体を占めている。そんな中でも確認調査によって遺跡の範囲が広がっていることが確認されたり、最小限の記録保存に努めた例もある。このように確認調査はますます重要性を帯びてくることは言うまでもない。今後も確認調査が必要であること、また、緻密な調査を行っていくことが重要である。更なる確認調査を行うことによって遺跡の持つ特性や重要性も確認されると考えている。

今回の報告に掲載した遺跡は、平成13年度に実施した横久保遺跡・栢ノ木遺跡、平成14年度に実施した辻ノ尾遺跡・中ノ瀬遺跡・宮ノ下リ遺跡・栢ノ木遺跡（２件）、平成15年度に実施した津崎遺跡・辻ノ尾遺跡・田口高野遺跡・栢ノ木遺跡である。この３年分の報告の中で、重要と思われることについて検討すべき課題を挙げてまとめとする。

栢ノ木遺跡は、昭和46年の調査で甕棺墓３基・石棺墓３基が検出され、周囲にはさらに遺構が残っている可能性が強いことが指摘されていた。13年度の調査では土壙３基と掘建柱建物跡、14年度には新たに甕棺墓２基、石棺墓３基、土壙１基、掘建柱建物跡が追加されることになった。これらの遺構および遺物から時期的には前期後半から甕棺墓・石棺墓による墓地の形成が始まり、後期前半まで甕棺墓が営まれている。後期後半には箱式石棺が長大化し、石棺材が小口と側壁端で揃うか、小口材を外側へ出す傾向が強くなるタイプの箱式石棺へと引き継がれていく。２号石棺墓のように内行花文鏡とガラス製小玉をもつような有力な首長の出現までうかがえるのである。その後は後期後半から終末にかけての遺物が検出されていないが、急速に衰退したのか。志佐川対岸に位置する４世紀後半から５世紀代の竪穴住居跡や箱式石棺墓を検出した宮ノ下リ遺跡との関連性を含めて、集落のあり方とともに古代国家統一への過度期的な時期における栢ノ木遺跡の存在は重要な意味をもつものである。

弥生文化形成期の北部九州を特徴づける墓制の代表的なものとして支石墓がある。その下部構造としては初期に石棺、前期に入って土壙が主流を占めるが、この時期に甕棺も見られるようになる。支石墓は中期前半になると鹿児島県まで分布するようになる。特に唐津市周辺では支石墓の下部構造は土壙であるが、松浦地方をはじめ長崎県下では下部構造に石棺を用いるものが多く土壙は極端に少ない。支石墓をもつ県内の13遺跡の中で北松浦郡宇久町宇久松原遺跡で７基、同郡鹿町町大野台支石墓群で１基、諫早市風観岳支石墓群で５基、南高来郡有家町西鬼塚遺跡で１基、同郡北有馬町原山支石墓群で14基に土壙を用いている。栢ノ木遺跡の１号石棺墓はこの土壙をもつ支石墓の可能性を正林護氏は指摘している。これを含めると、栢ノ木遺跡は北部九州の新しい墓制制度を受け入れた成人の埋葬形態の甕棺墓と、西北九州の箱式石棺墓の墓制が同時に検出されるなど埋葬施設には複雑な要素が認められる。今後、総合的な検討が必要である。

弥生時代の墓制は、集団墓地を形成し、埋葬施設において階層差が顕著になってくる。特に北部九州の先進地域では、前漢鏡や銅利器をはじめとする青銅器を支石墓や甕棺墓などに多数副葬している。ところが、すぐ近くにある墓地では200基に近い甕棺墓が検出されているが、青銅器を副葬した墓が見い出されていない。墓地に見られるこのような格差は地域の核になる集落と、これに従属する集落との間に明瞭な階層差が生じてきたことの反映であろう。この点を含めて栢ノ木遺跡は、松浦地方の墓制制度を研究する上で重要な意義を提供するものである。これまでの調査に加えて墓地全体を調査すればさらにその数は増えることが予想される。ではその財力を考えたとき、平野部が少ない松浦市において志佐川流域は唯一の水田地帯である。やはり生活の基盤としていたものは稲作であったと考えられる。これまでの確認調査でも水田遺構や木製品の検出および竪穴住居跡群などの検出ができていないため、栢ノ木遺跡の集落の規模・構造、採集経済から農業生産、狩猟・採集・漁撈社会から定住生活への変化に伴う社会組織の実態を解明するまでには至っていない。次年度以降の確認調査に期待したいと思う。

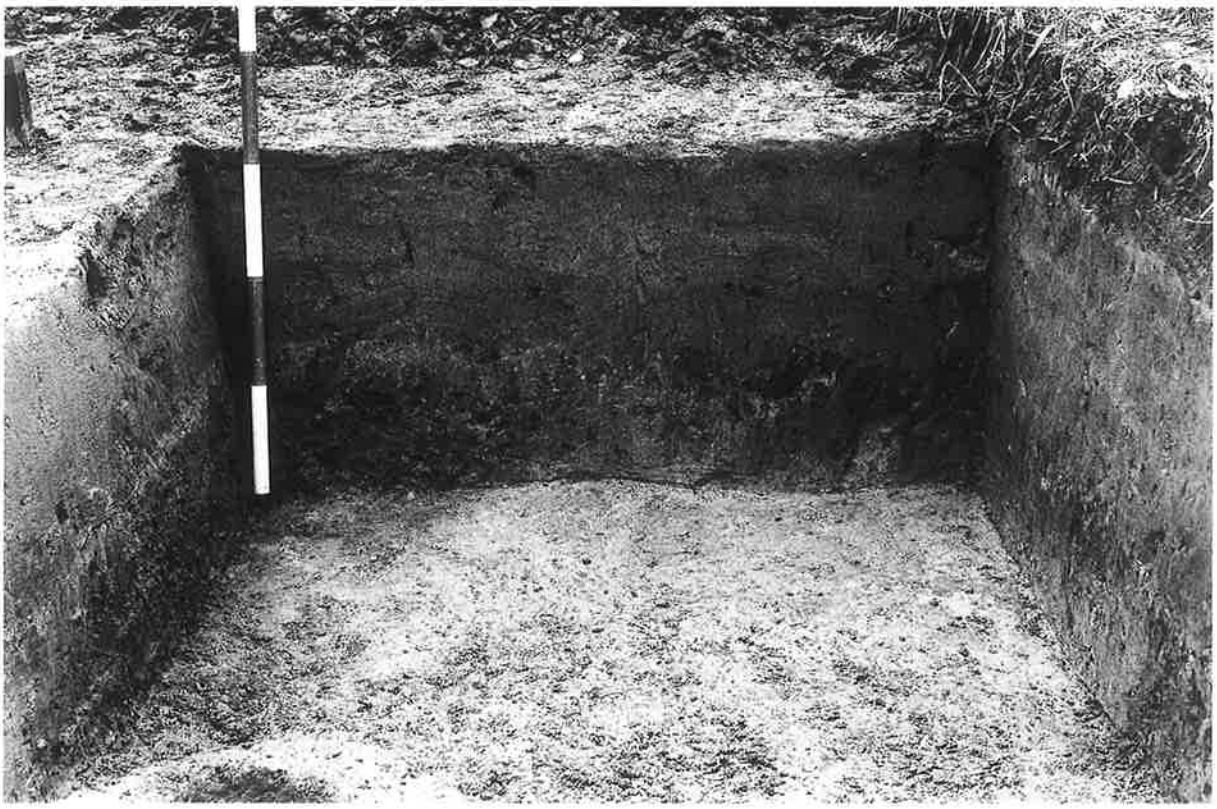
【参考文献・引用文献】

正林　護　1973　『栢ノ木遺跡（中間報告）』　松浦市教育委員会
田川肇編　1976　『風観岳支石墓群調査報告書』　諫早市文化財調査報告書第１集　諫早市教育委員会
正林護・高野晋司編　1981　『国指定史跡原山支石墓群　環境整備事業報告書』　北有馬町教育委員会
正林　護　1983　『大野台遺跡』　鹿町町文化財調査報告書第１集　鹿町町教育委員会
町田利幸　1992　『中野ノ辻遺跡』　田平町文化財調査報告書第６集　長崎県田平町教育委員会
平戸市史編さん委員会　1995　『平戸市史　自然・考古編』　平戸市
正林　護　1997　「栢ノ木遺跡」『原始・古代の長崎県　資料編Ⅱ』　長崎県教育委員会
川道　寛　1997　『宇久松原遺跡』　宇久町文化財調査報告書第４集　宇久町教育委員会
村川逸朗　1997　『西鬼塚支石墓・石棺群』　有家町文化財調査報告書第３集　有家町教育委員会
西谷　正　1997　『東アジアにおける支石墓の総合的研究』　九州大学文学部考古学研究室
荒谷義樹　2000　『午戻遺跡』　伊万里市文化財調査報告書第47集　佐賀県伊万里市教育委員会
川瀬雄一　2002　『風観岳支石墓群』　諫早市文化財調査報告書第15集　諫早市教育委員会

図　　版

図版1

栢ノ木遺跡14次Ｂ３区西土層



栢ノ木遺跡14次Ｃ３区西土層

図版2

栢ノ木遺跡14次Ｄ２区西土層

栢ノ木遺跡14次Ｂ２区遺構検出状況

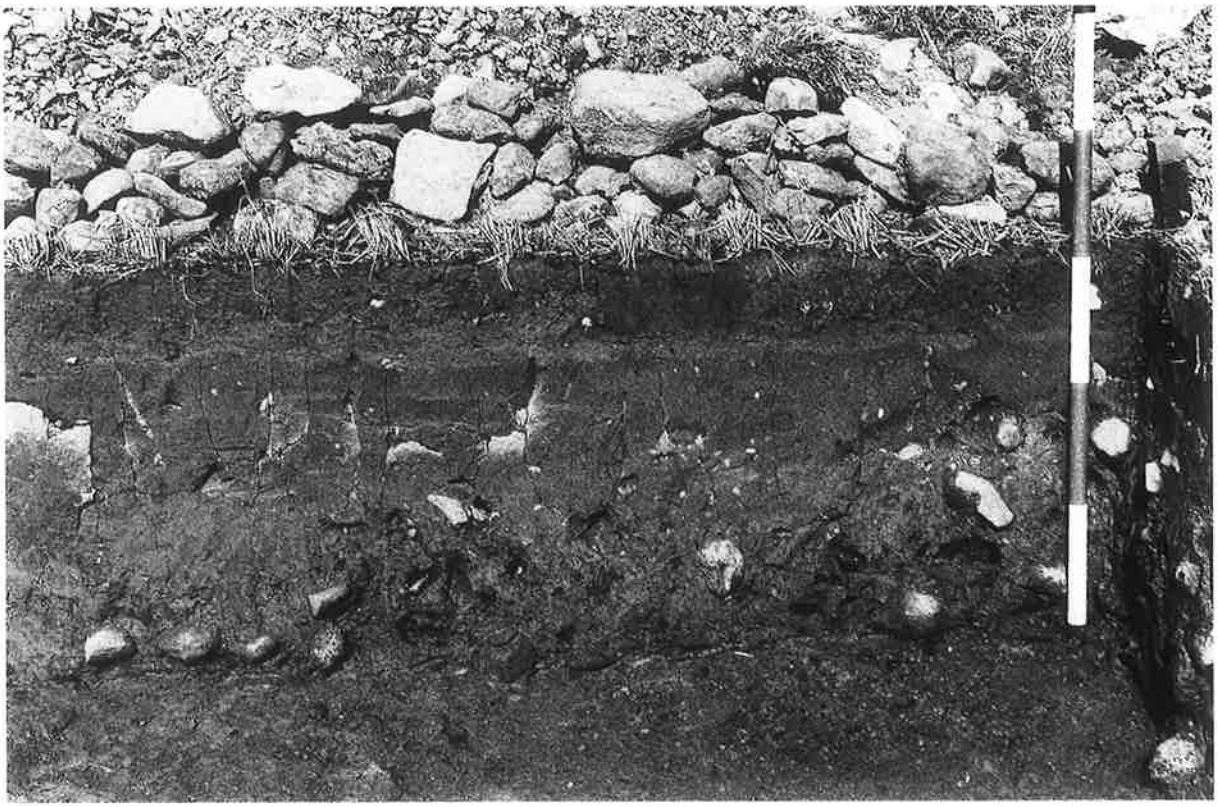
図版3

横久保遺跡Ｔ１西土層

横久保遺跡Ｔ２西土層

図版4

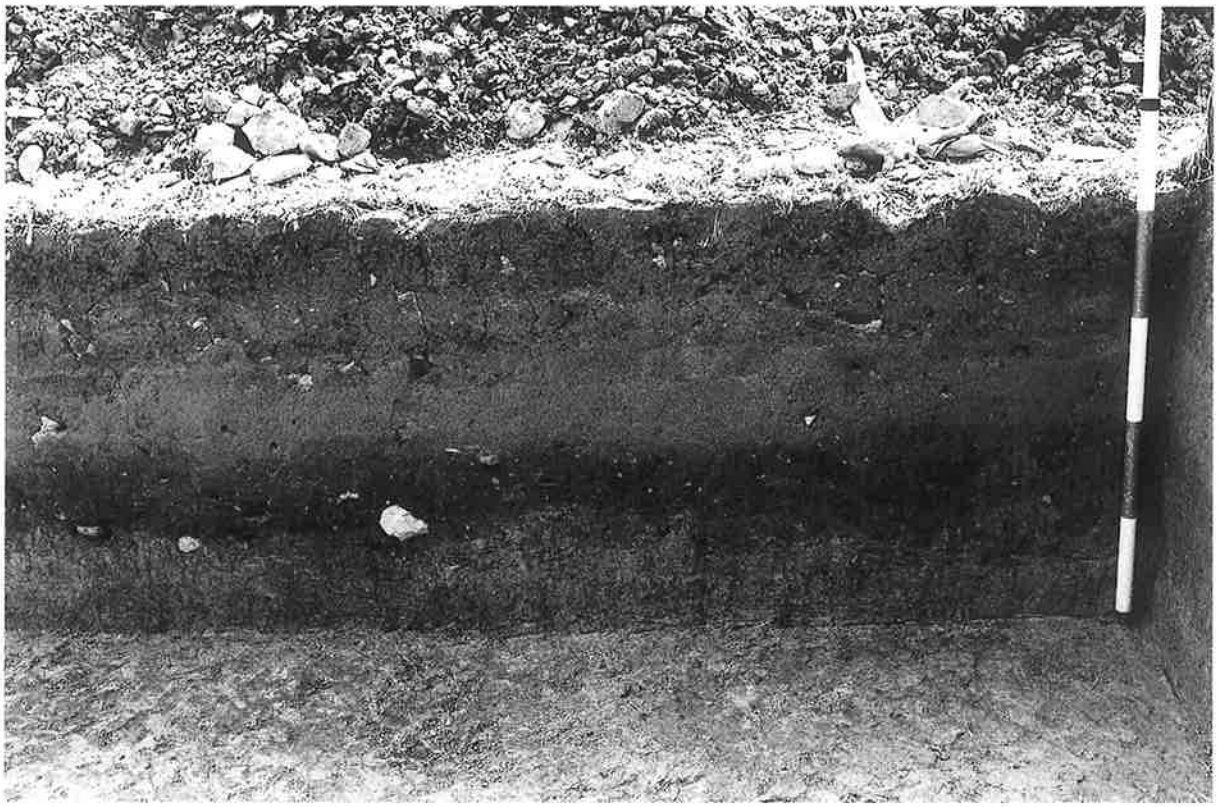
栢ノ木遺跡15次調査風景



栢ノ木遺跡15次Ｔ１西土層

図版5

栢ノ木遺跡15次Ｔ２北土層



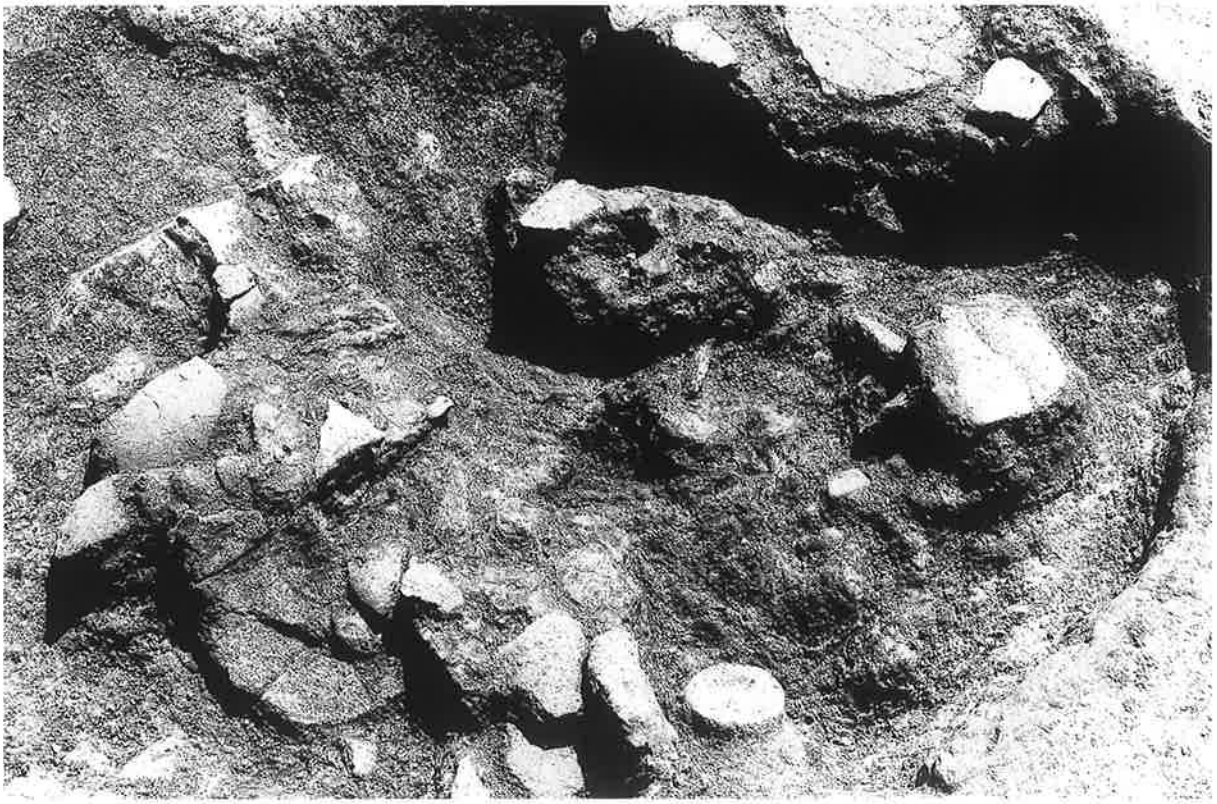
栢ノ木遺跡15次Ｔ５東土層

図版6

栢ノ木遺跡15次調査Ｔ11西土層

栢ノ木遺跡15次Ｔ８土壙検出状況

図版7

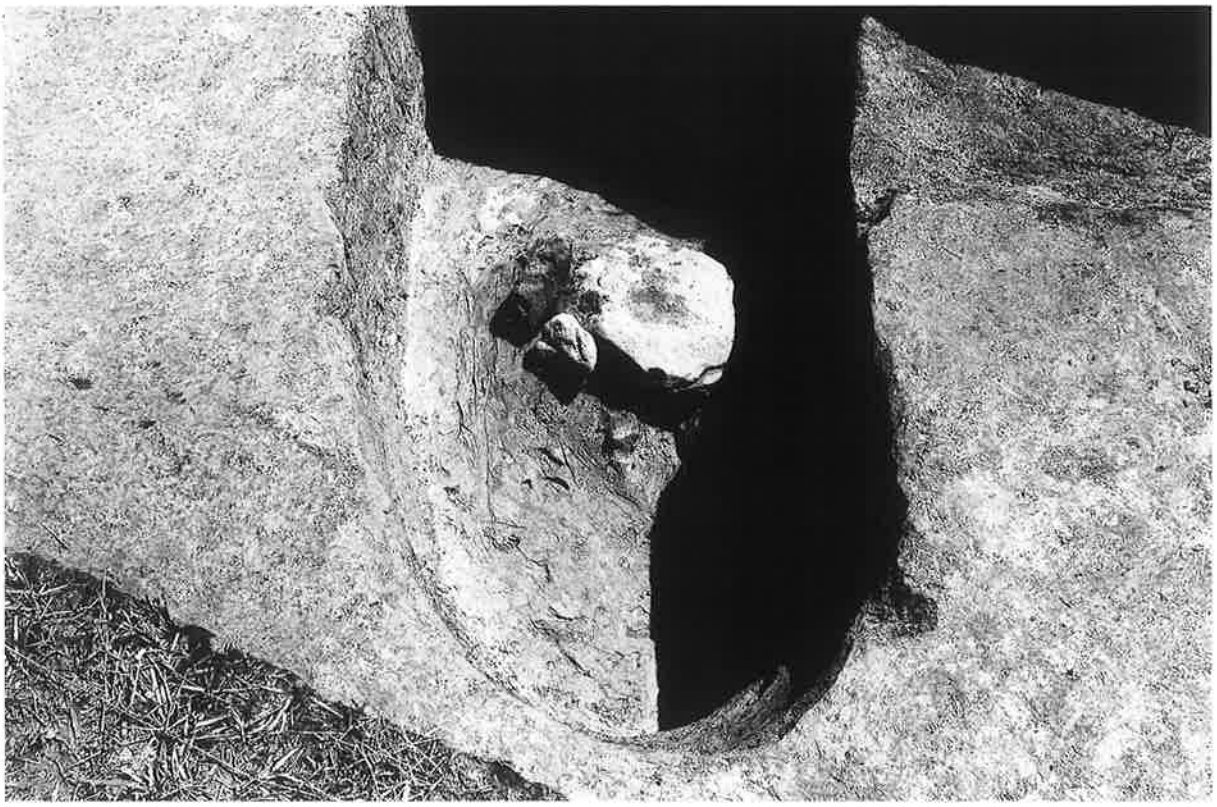


栢ノ木遺跡15次Ｔ８土壙検出状況

栢ノ木遺跡15次Ｔ９土壙検出状況

図版8

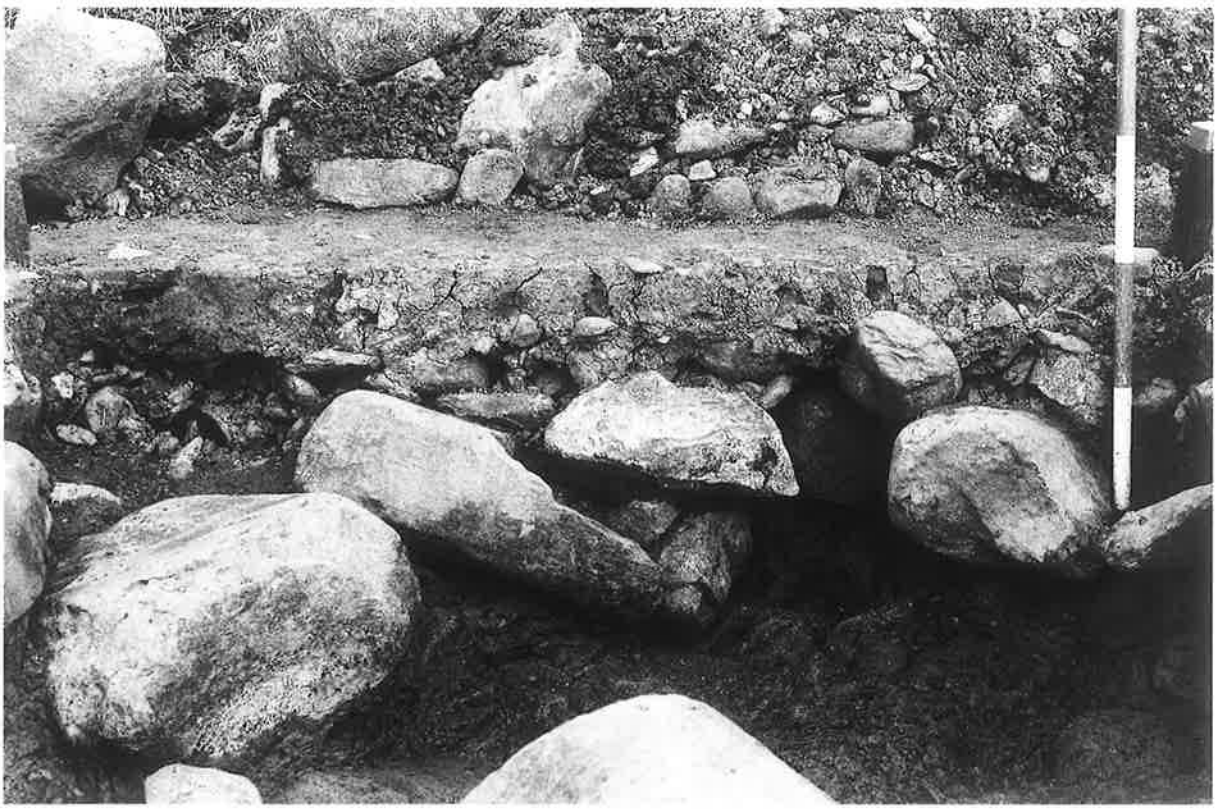
栢ノ木遺跡15次Ｔ９土壙検出状況



栢ノ木遺跡15次Ｔ10土壙検出状況

図版9

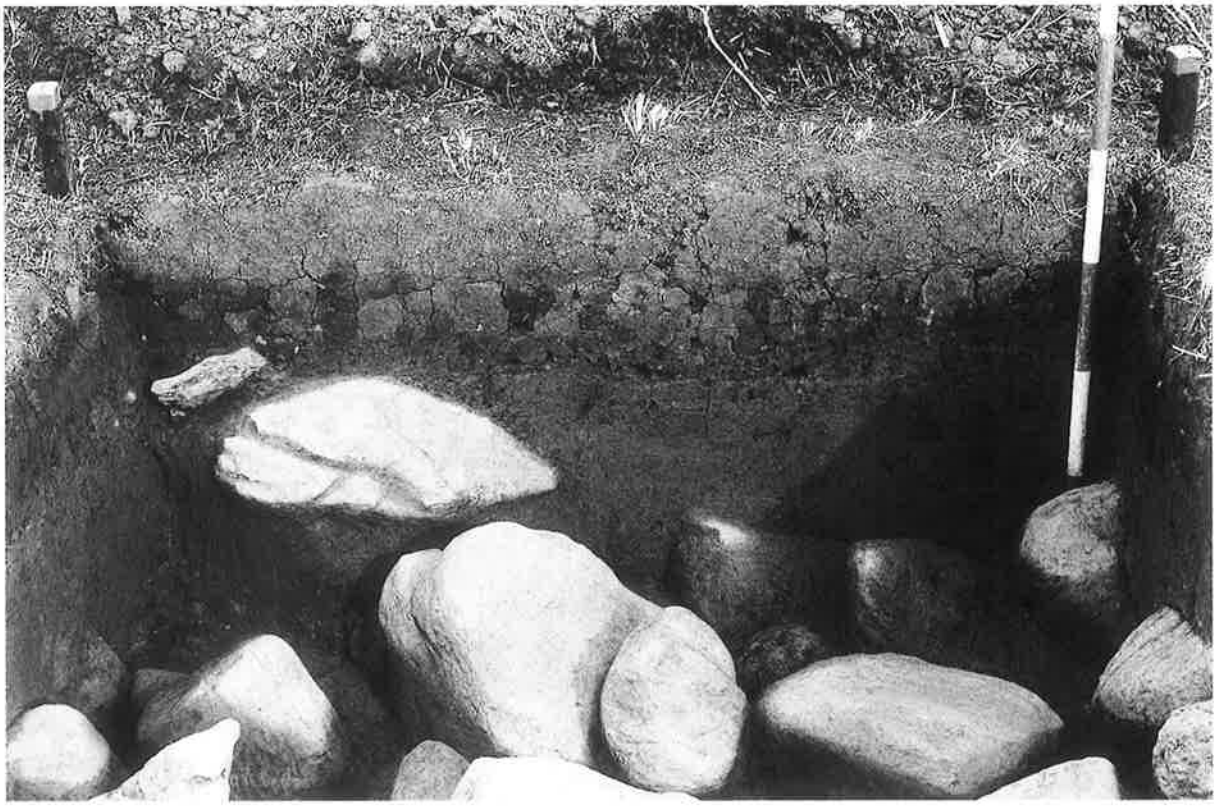
辻ノ尾遺跡２次Ｔ４北土層



中ノ瀬遺跡３次Ｔ１北土層

図版10

中ノ瀬遺跡３次Ｔ４北土層



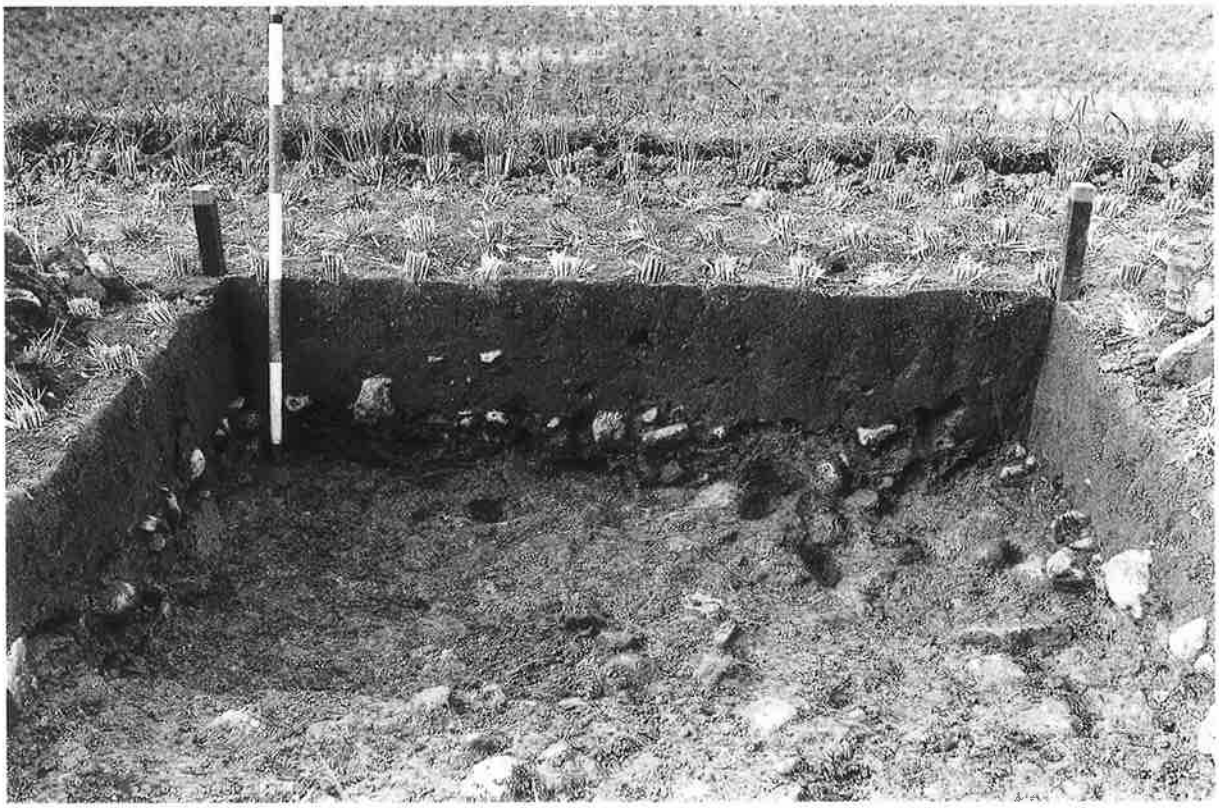
中ノ瀬遺跡３次Ｔ７北土層

図版11

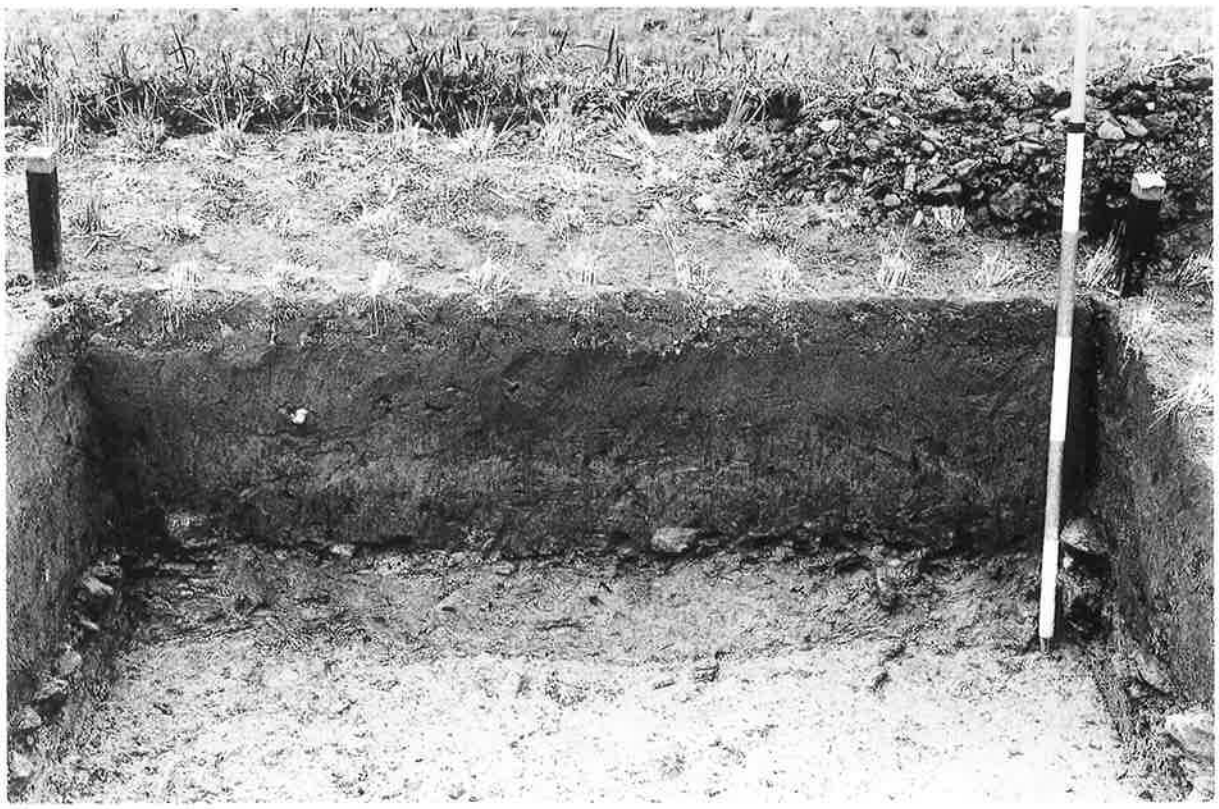
宮ノ下リ遺跡６次Ｔ１北土層

宮ノ下リ遺跡６次Ｔ３北土層

図版12



栢ノ木遺跡16次Ｔ１北土層



栢ノ木遺跡16次Ｔ２北土層

図版13

栢ノ木遺跡17次Ｔ１東土層

栢ノ木遺跡17次Ｔ２東土層

図版14

栢ノ木遺跡17次Ｔ８東土層

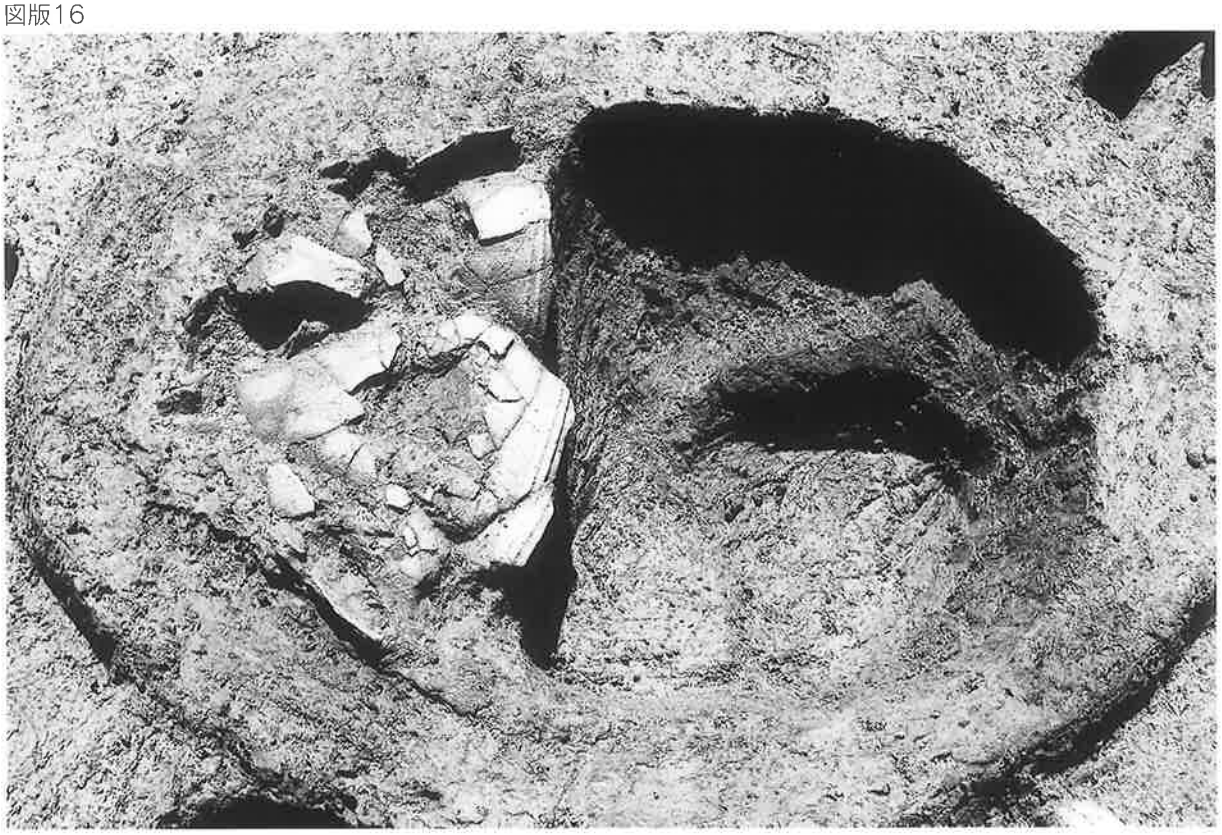
栢ノ木遺跡17次Ｔ３遺構検出状況

図版15

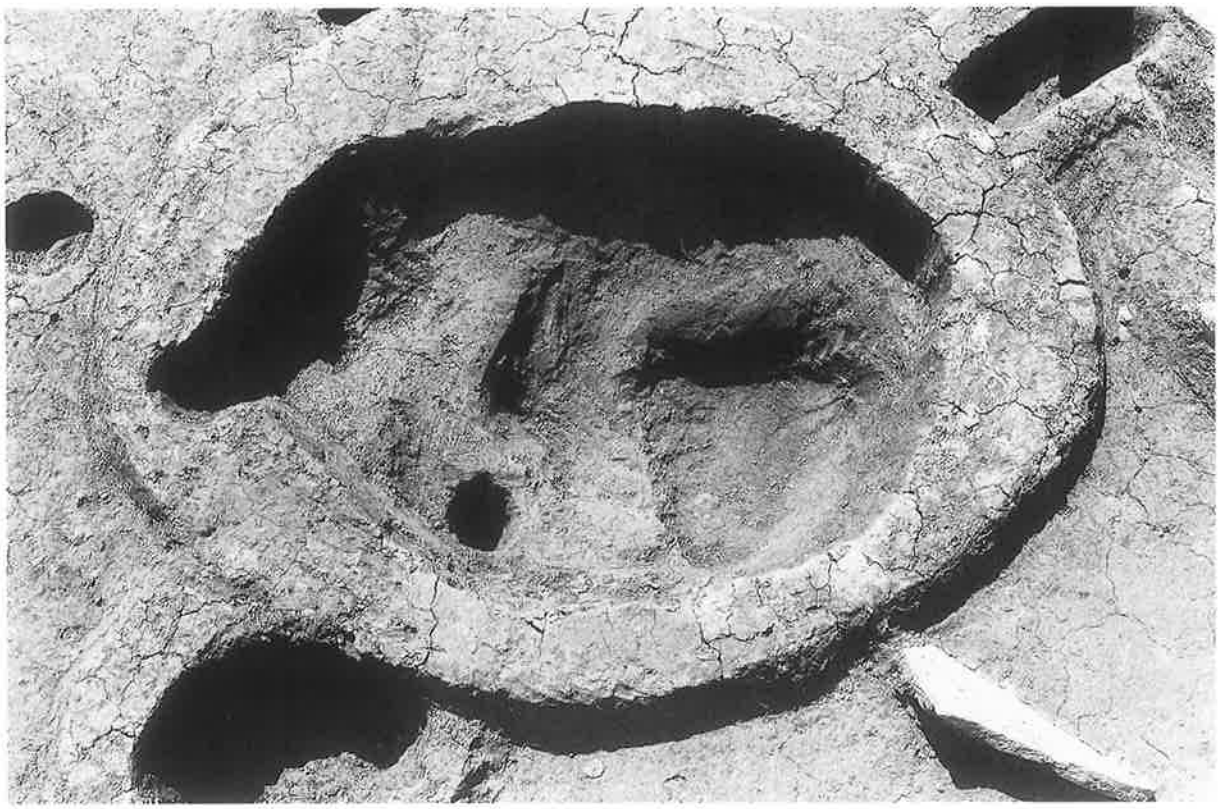
栢ノ木遺跡17次４号石棺墓検出状況

栢ノ木遺跡17次５号石棺墓検出状況

図版16



栢ノ木遺跡17次４号甕棺墓検出状況



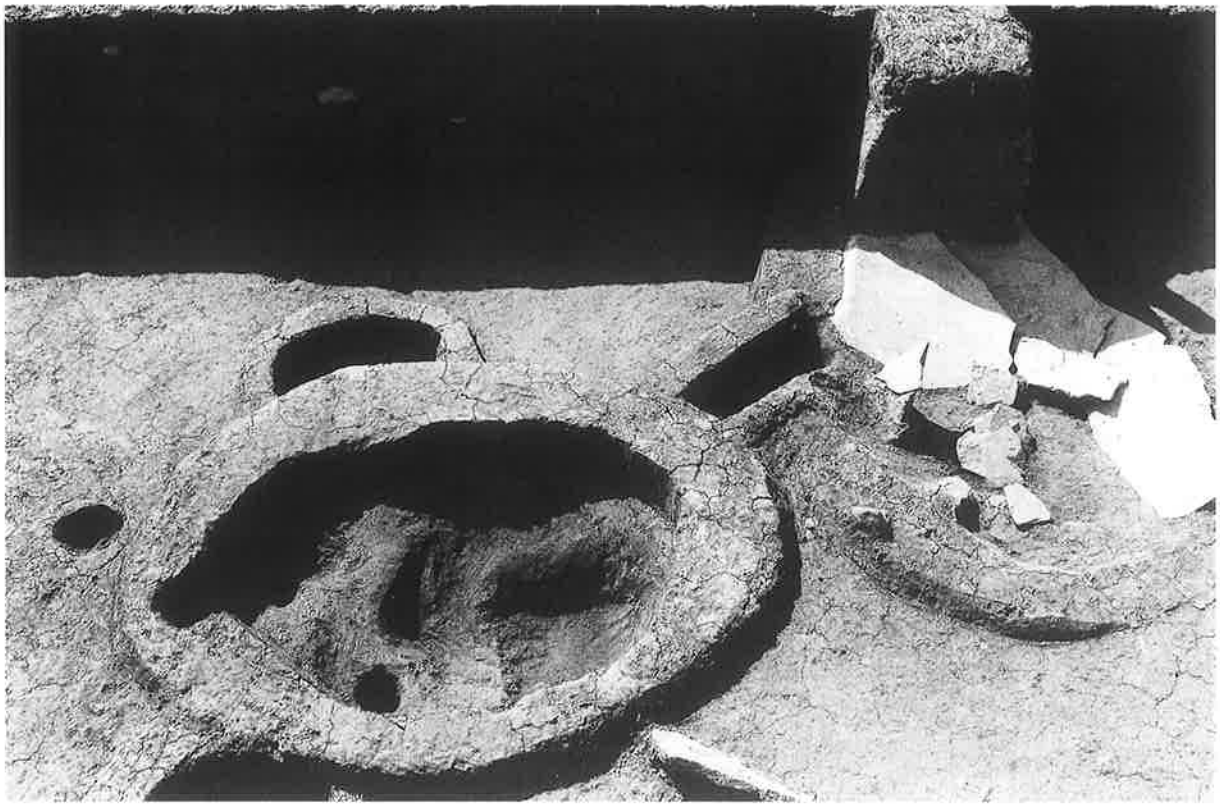
栢ノ木遺跡17次４号甕棺墓土壙検出状況

図版17

栢ノ木遺跡17次５号甕棺墓検出状況

栢ノ木遺跡17次５号甕棺墓土壙検出状況

図版18



栢ノ木遺跡17次４号甕棺墓・６号石棺墓検出状況

栢ノ木遺跡17次Ｔ８遺構検出状況

図版19

津崎遺跡２次Ｔ３西土層

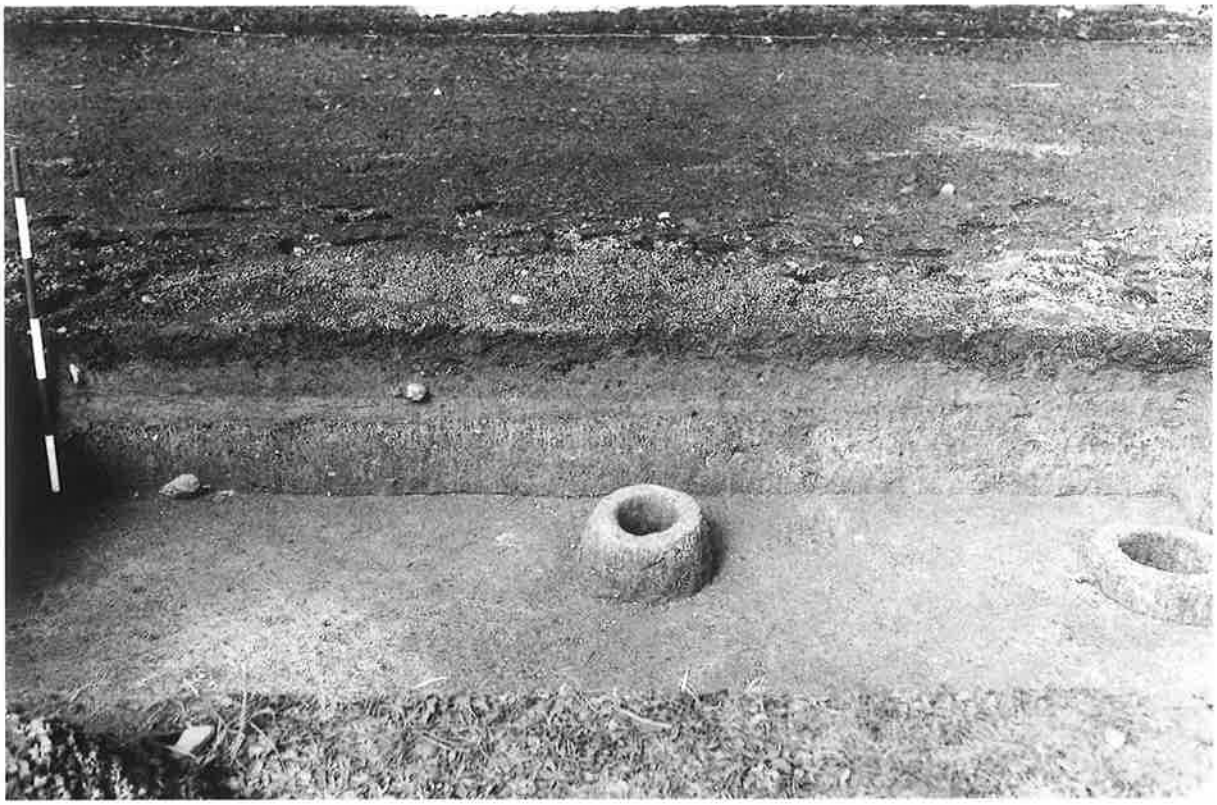
津崎遺跡２次Ｔ６北土層

図版20

辻ノ尾遺跡３次Ｔ１北土層

田口高野遺跡３次Ｔ２北土層

図版21



栢ノ木遺跡18次Ｔ２西土層

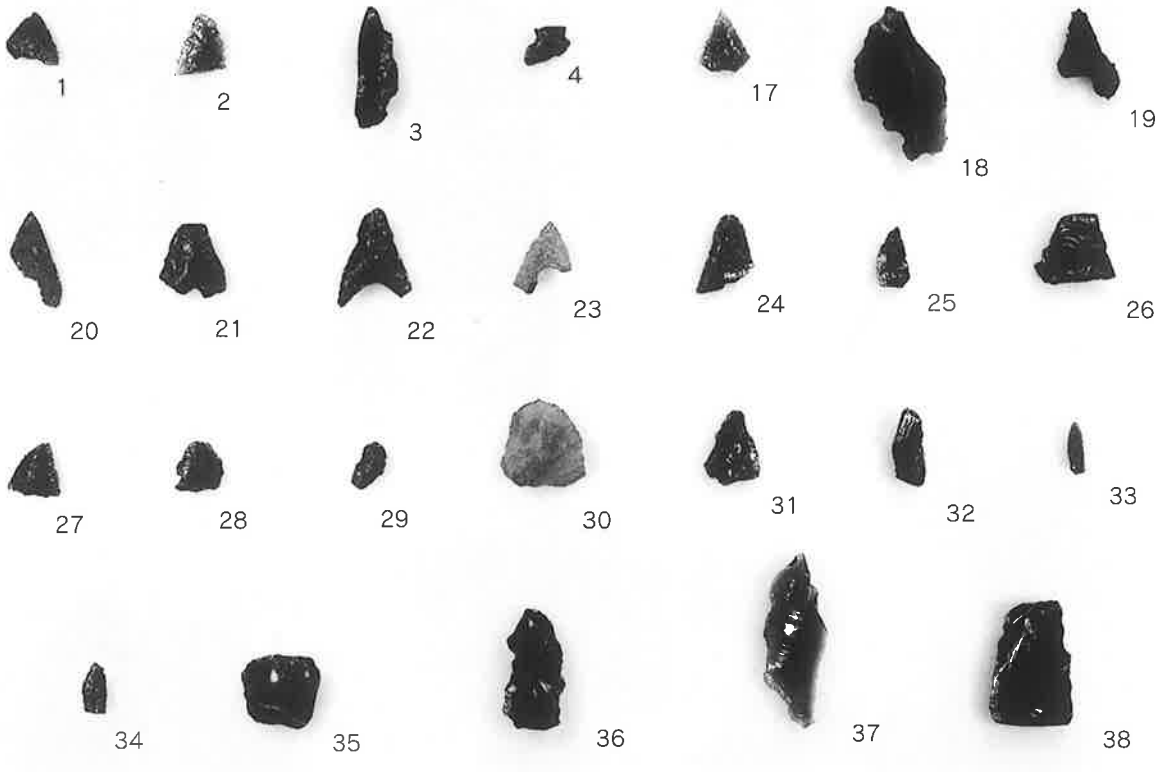
栢ノ木遺跡18次Ｔ７東土層

図版22

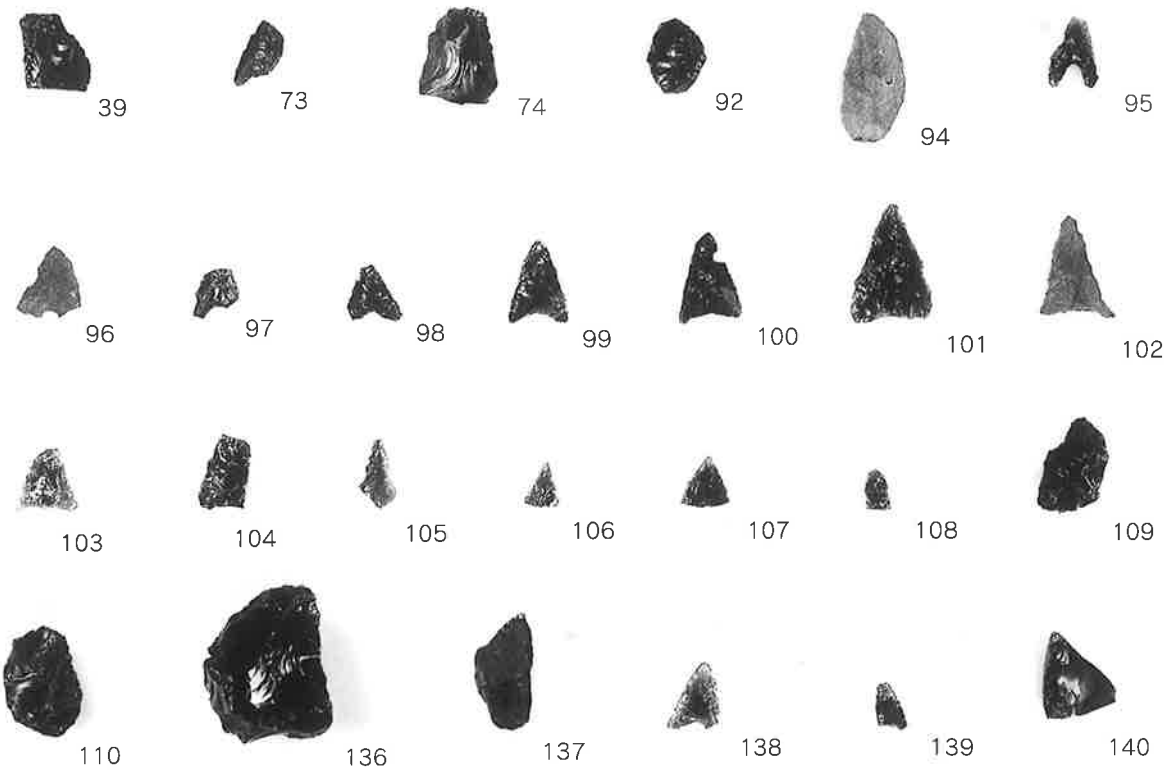
栢ノ木遺跡18次Ｔ９西土層

栢ノ木遺跡18次Ｔ７配石遺構検出状況

図版23

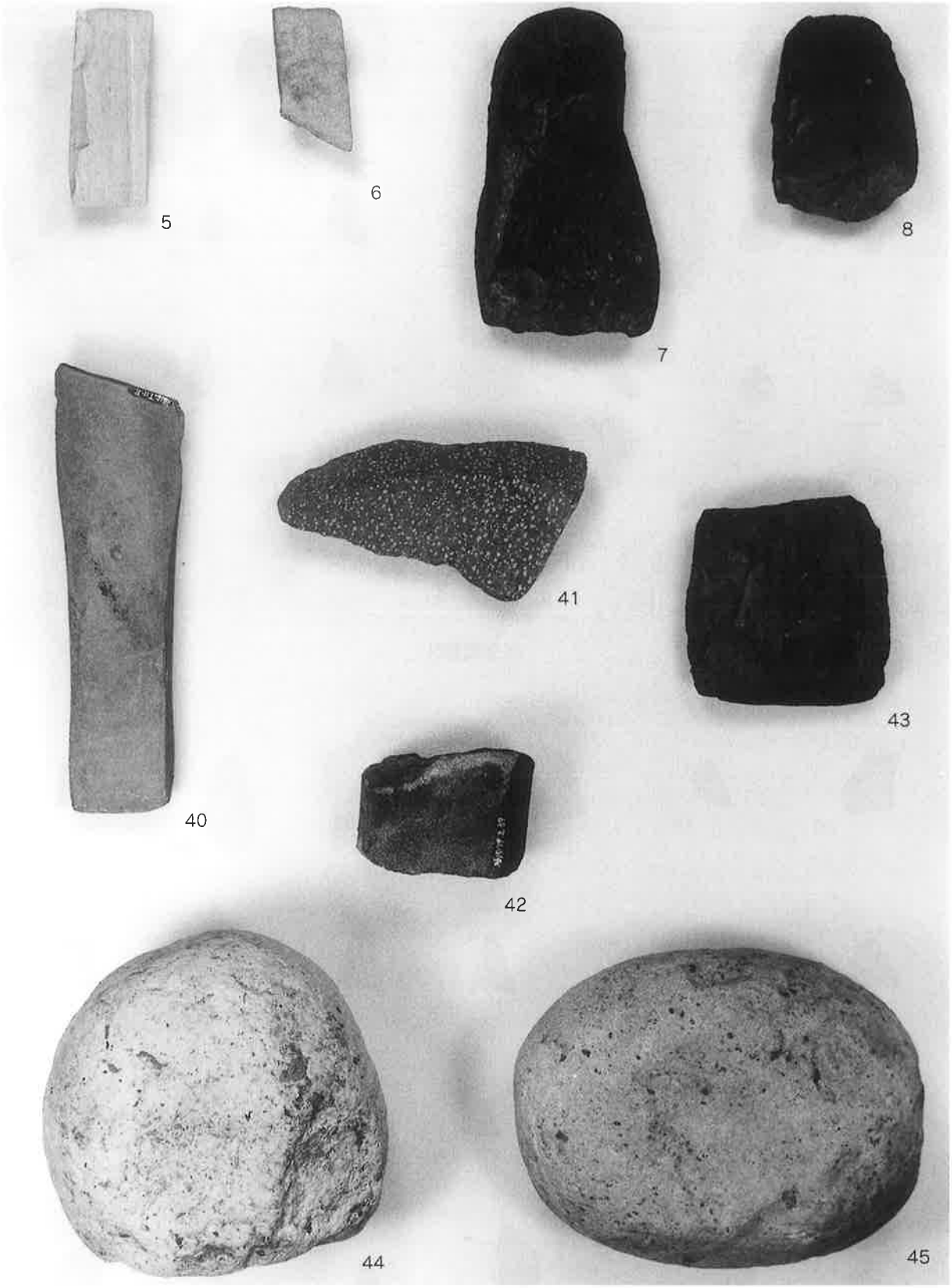


出土遺物①



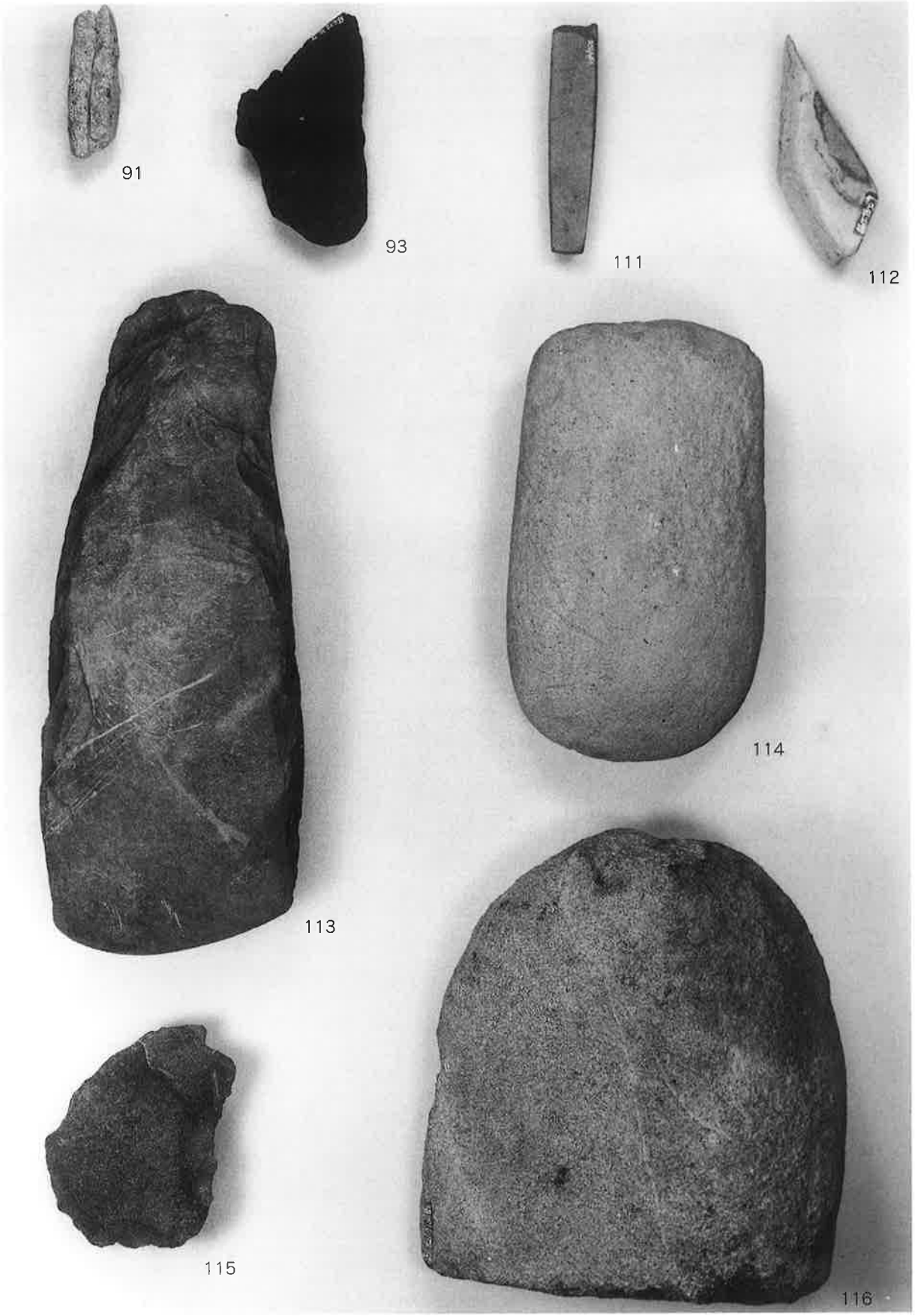
出土遺物②

図版24



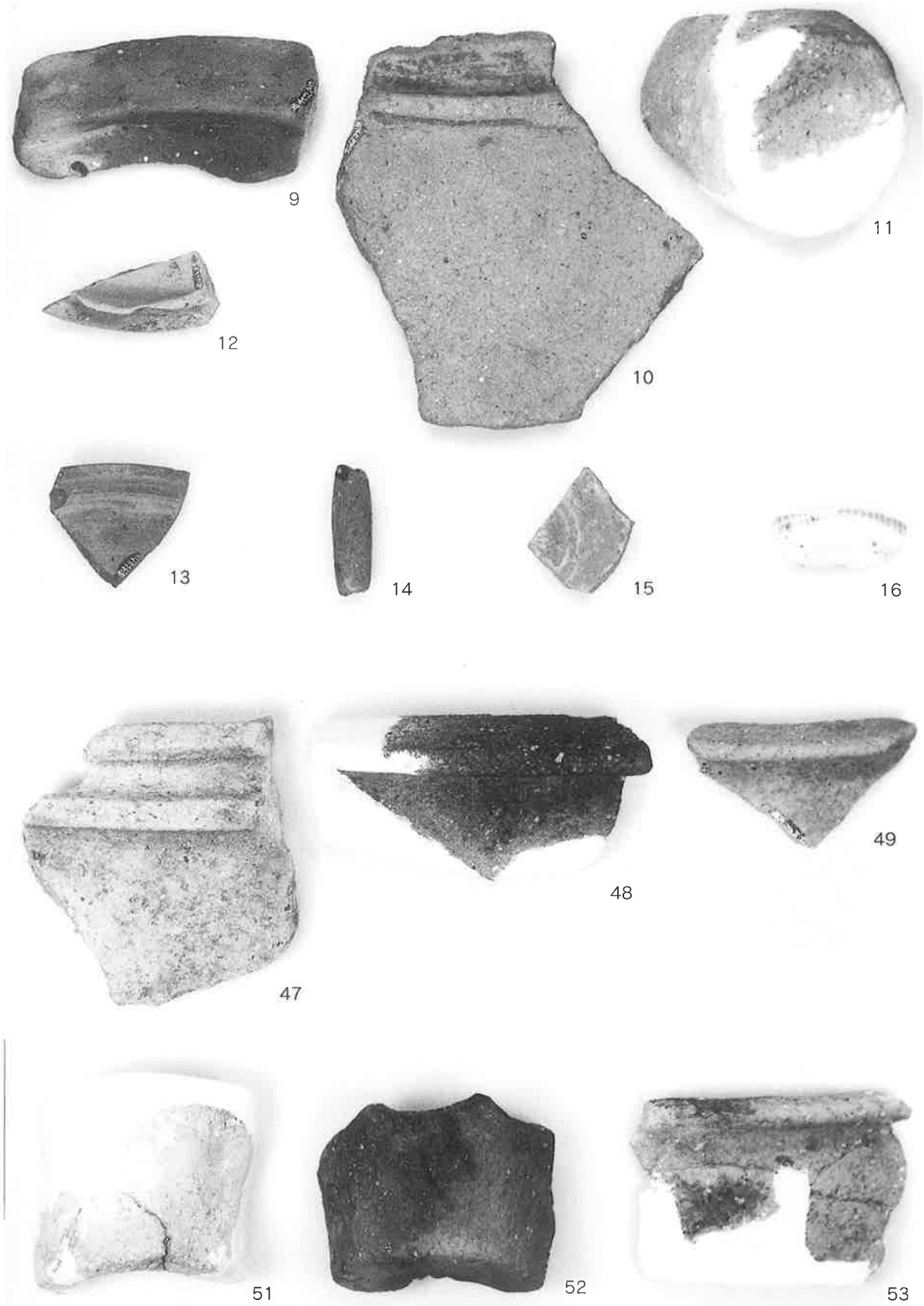
出土遺物③

図版25



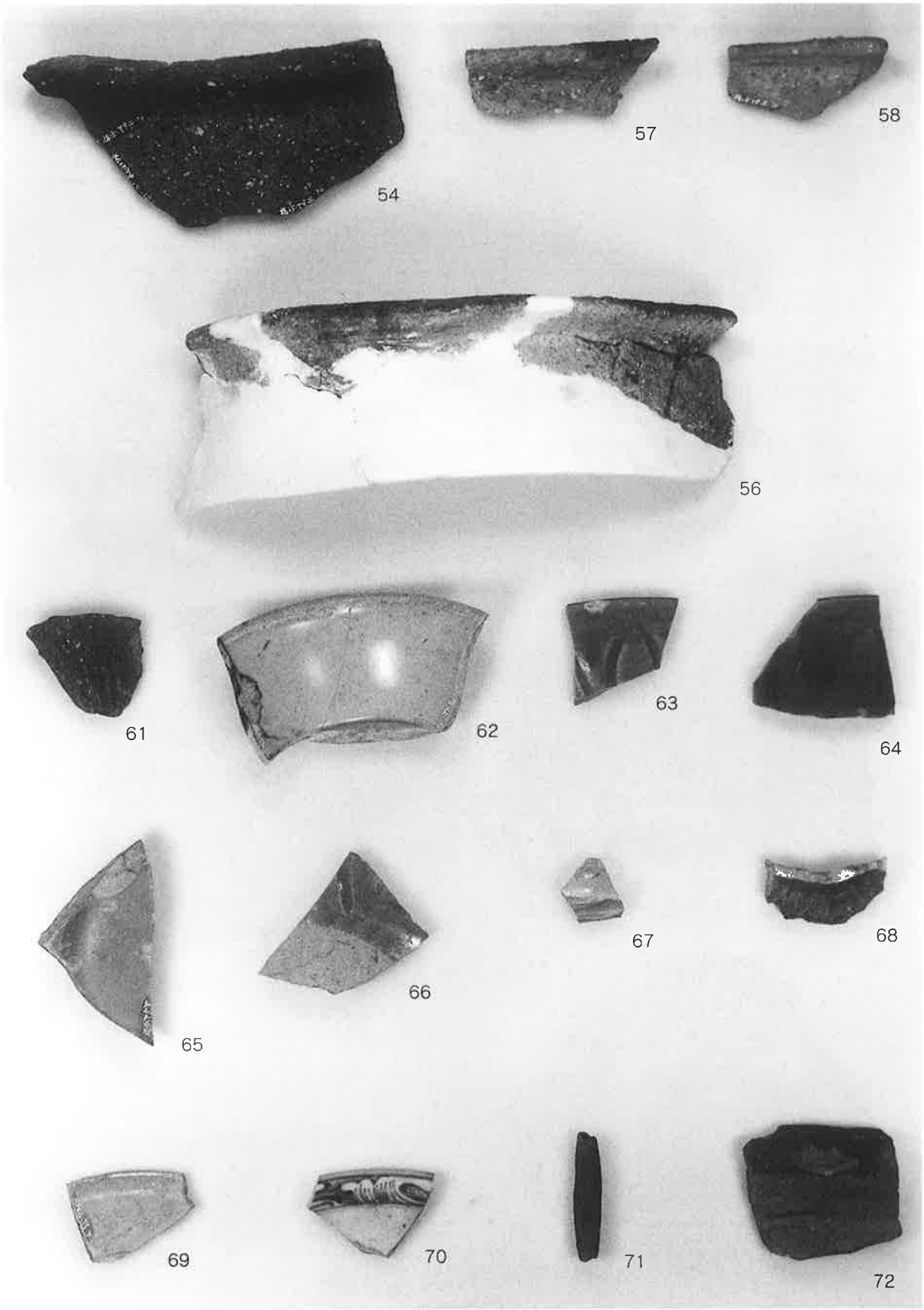
出土遺物④

図版26



出土遺物⑤

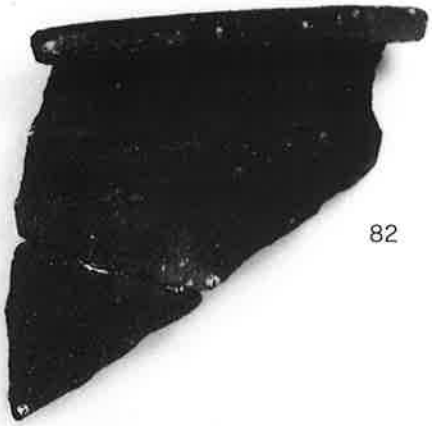
図版27



出土遺物⑥

図版28

80

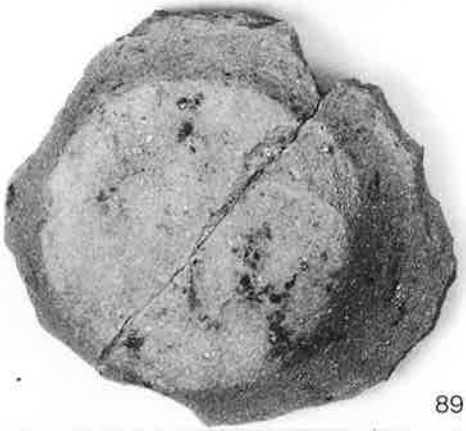

82

81

83

85

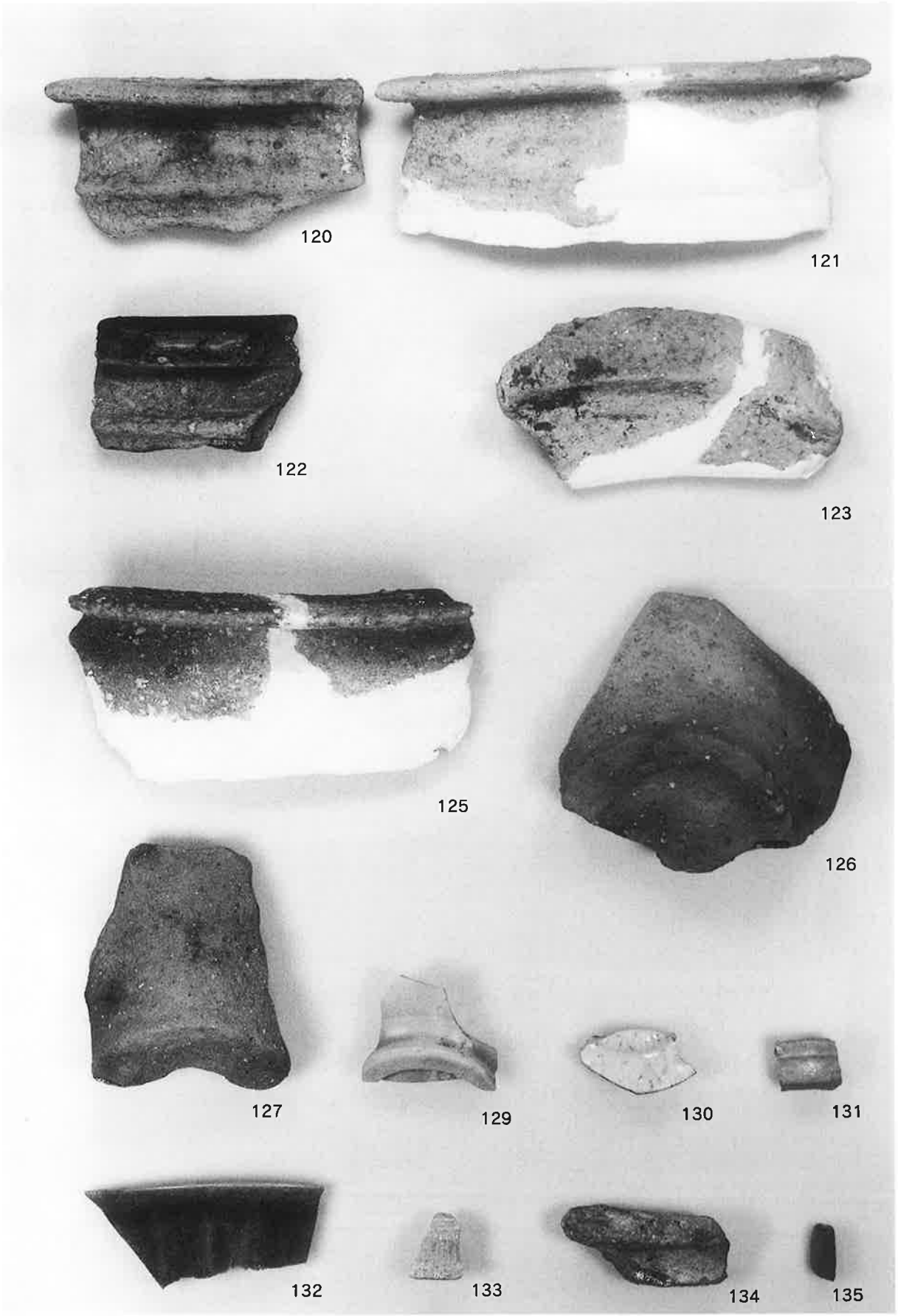
88


89

90

出土遺物⑦

図版29

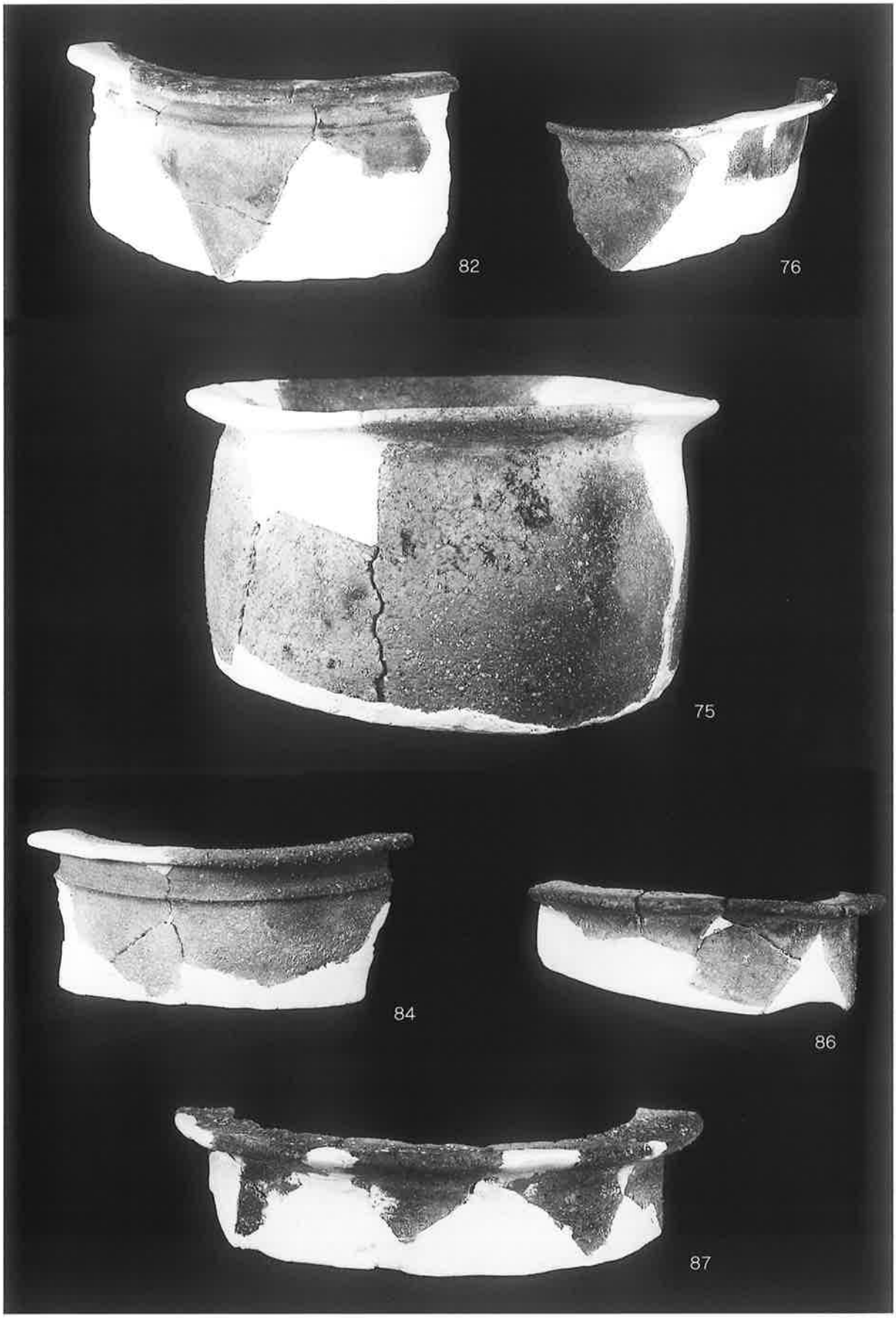


出土遺物⑧

図版30

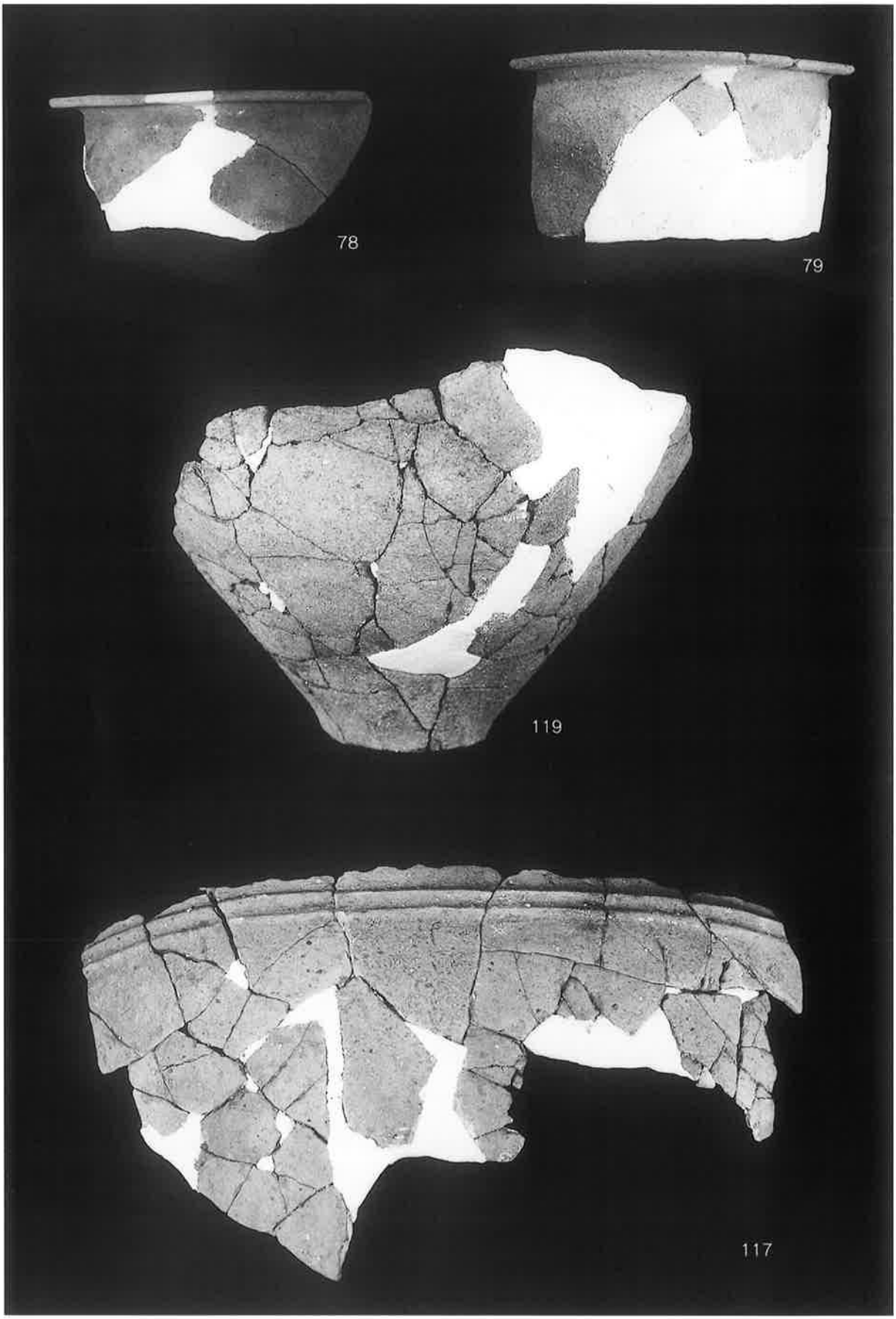
出土遺物⑨

図版31



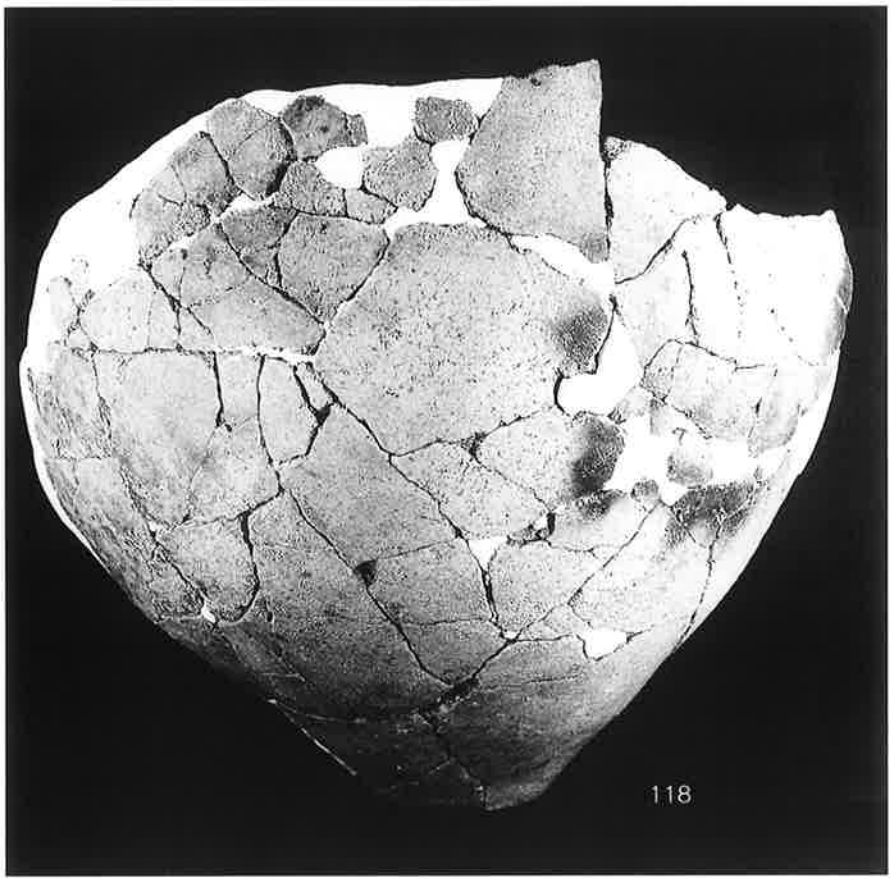
出土遺物⑩

図版32

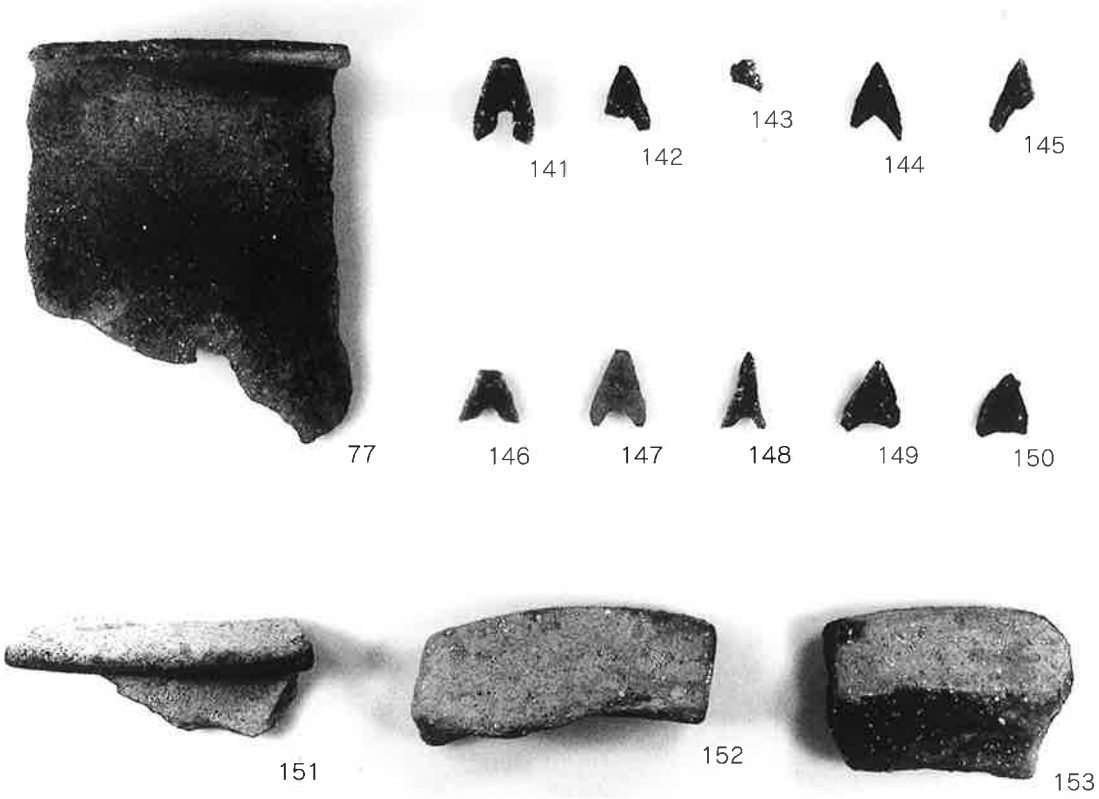


出土遺物⑪

図版33

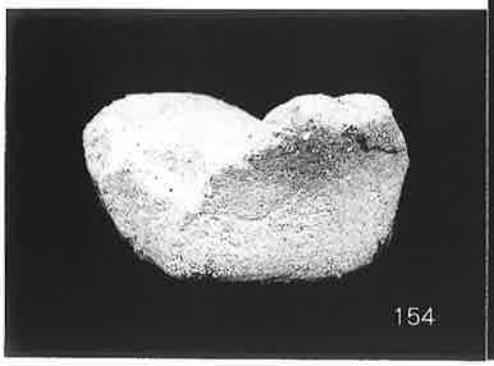


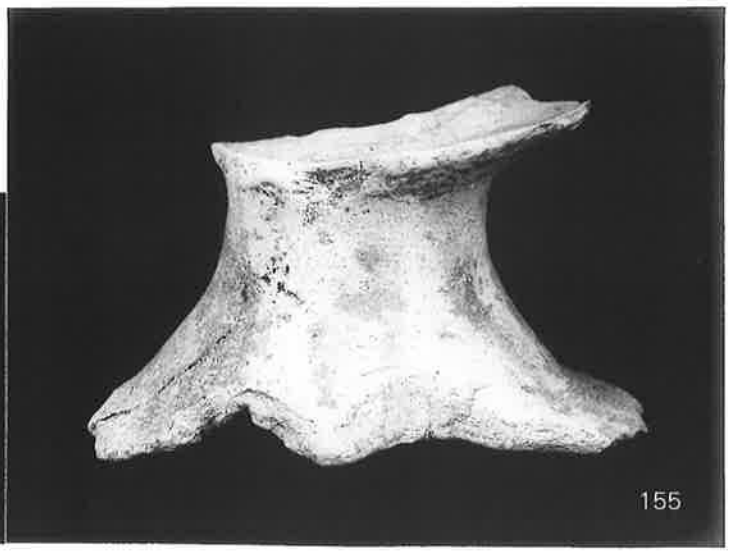
出土遺物⑫



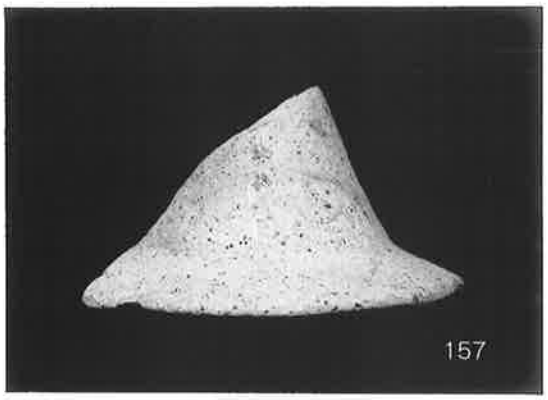
出土遺物⑬

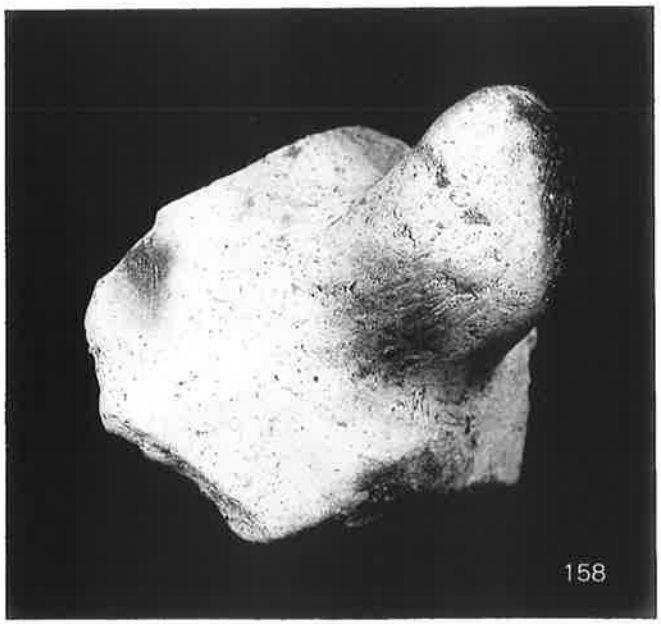
図版34


154


155

156


157

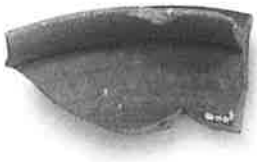

158

出土遺物⑭

図版35

159

160

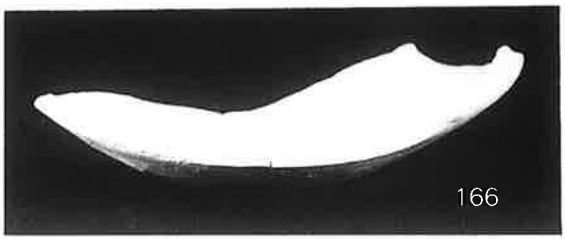

163

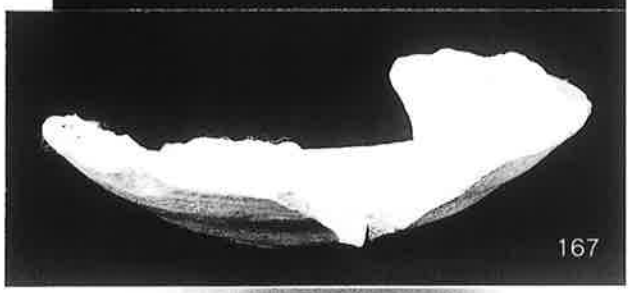
164

165

161

162


166

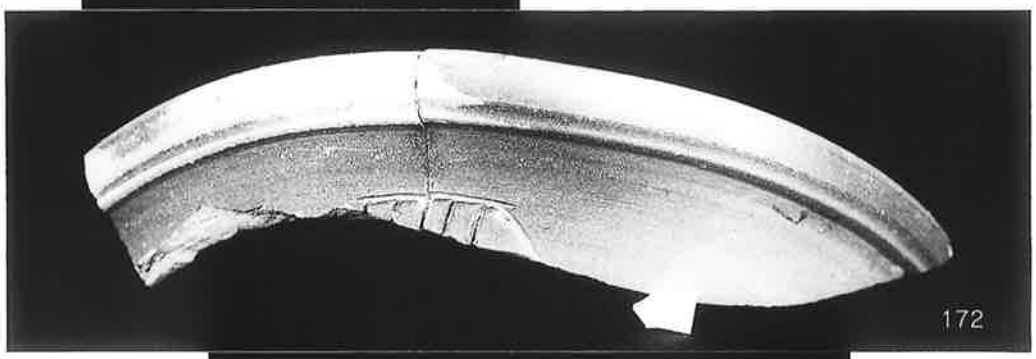

167

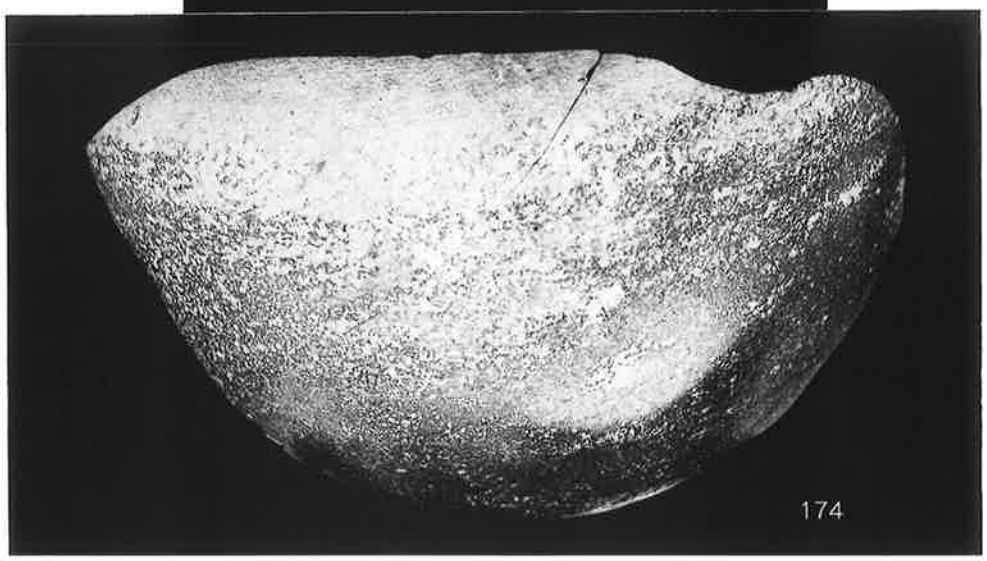
168

169

出土遺物⑮

図版36





出土遺物⑯

報　告　書　抄　録

ふりがな	まつうらしないいせきかくにんちょうさ
書名	松浦市内遺跡確認調査（5）
副書名	
巻次	
シリーズ名	松浦市文化財調査報告書
シリーズ番号	第２０集
編著者名	中　田　敦　之
編集機関	松浦市教育委員会
所在地	〒859-4502　長崎県松浦市志佐町里免365番地　　ＴＥＬ　0956－72－1111
発行年月日	西暦　　2004年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
市内遺跡（しないいせき）	長崎県（ながさきけん） 松浦市（まつうらし） 市内一円（しないいちえん）	42208	－	－	－	13.12.18 ～ 16.03.19		土地開発に伴う確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
市内遺跡	集落跡 包含層	旧石器時代 縄文時代 弥生時代 中世	甕棺墓 石棺墓 柱穴 土壙	黒曜石製石鏃 石斧 弥生土器 土師器 須恵器 輸入陶磁器 土錘 石鍋	

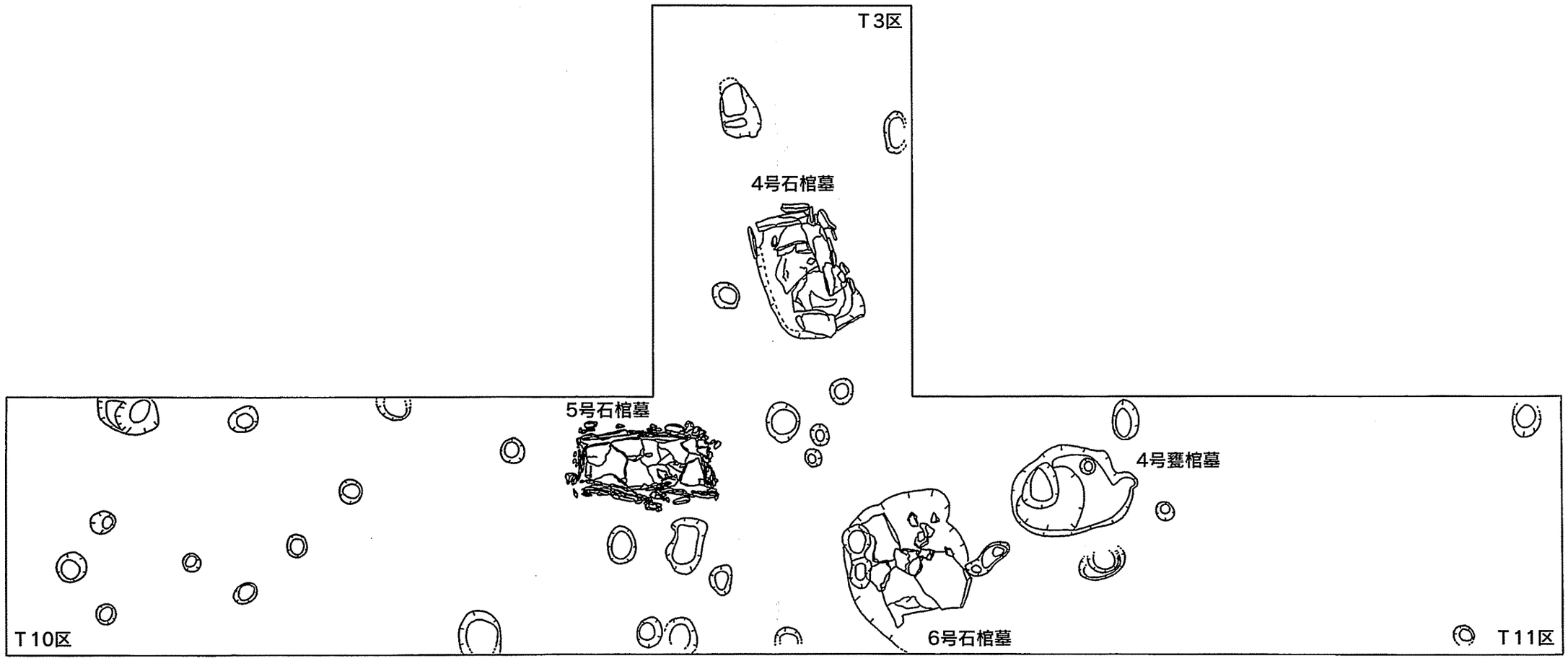
松浦市文化財調査報告書　第20集

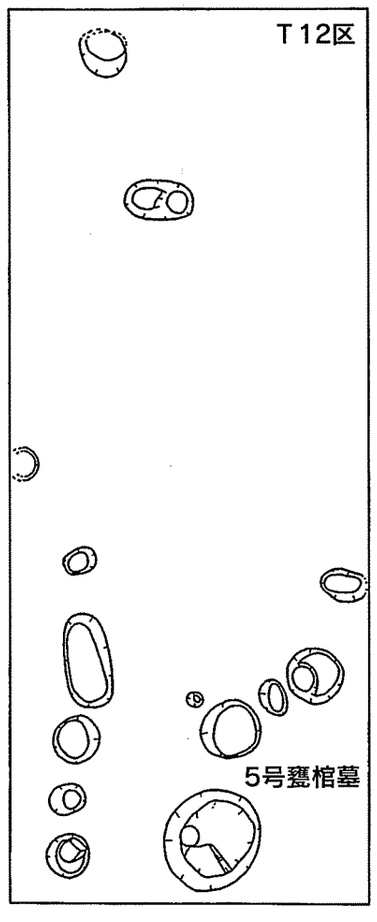
松浦市内遺跡確認調査(5)

平成16年３月31日

発行　松浦市教育委員会
長崎県松浦市志佐町里免365番地

印刷　有限会社　タイセイ印刷
長崎県松浦市志佐町白浜免660-76





付図　栢ノ木遺跡17次調査遺構配置図③（1/40）